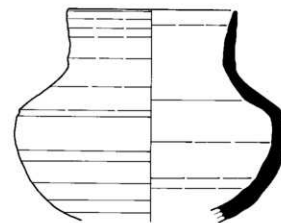


茨城県石岡市

# 東成井東原遺跡

(第2次)

—H26 県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査—



2015

茨 城 県  
石 岡 市 教 育 委 員 会  
株 式 会 社 地 域 文 化 財 研 究 所

茨城県石岡市

# 東成井東原遺跡 (第2次)

— H26 県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査 —

2015

茨 城 県  
石 岡 市 教 育 委 員 会  
株式会社地域文化財研究所



## 序

石岡市は、茨城県のほぼ中央部に位置する人口約8万人の都市です。平成17年10月1日に旧石岡市と旧八郷町との合併によって誕生し、本年合併10周年を迎えます。

本書で報告されます「東成井東原遺跡」は、旧八郷町に所在し、平成22年に新たに発見された遺跡です。今回、県営畑地帯総合整備事業に伴い発掘調査が行われ、7世紀から9世紀にかけての集落が発見され、26軒もの堅穴住居跡が発掘されました。なかには一辺10m余りの大型の住居跡もあり、どのような人々が住んでいたのかと興味はつきません。

このような成果をあげることができましたのも、調査にあたりご理解とご協力を賜りました事業者、土地所有者、関係各位の皆様方や、ご指導をいただきました皆様方のおかげであり、心から感謝申し上げます。

石岡市としても、より一層、文化財の保護・保存・活用に取り組んでいく所存ですので、引き続きのご指導、ご協力をお願い申し上げます。

本書が学術的な研究資料としてはもとより、石岡市の歴史に関する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、広くご活用いただければ幸いです。

平成27年3月

石岡市教育委員会  
教育長 櫻井 信





## 例言

1. 本書は、茨城県石岡市東成井に所在する東成井東原遺跡の第2次発掘調査報告書である。
2. 調査は、県営畑地帯総合整備事業（東成井西部地区）に伴い、石岡市より委託を受けた株式会社地域文化財研究所が行った。
3. 調査は、石岡市教育委員会の指導の下に行った。調査内容及び調査組織は下記のとおりである。

所在地 茨城県石岡市東成井 1396-3 ほか

調査面積 約 1,950 m<sup>2</sup>

調査期間 発掘調査 平成 26 年 9 月 1 日～平成 26 年 10 月 29 日

整理調査 平成 26 年 10 月 30 日～平成 27 年 2 月 28 日

事務局

石岡市教育委員会教育長	櫻井 信
教育部長	鈴木信充
次長	大関敏文
文化振興課長	武石 誠
文化振興課長補佐	櫻井浩司
文化振興課係長	安藤敏孝
係長	小杉山大輔
主幹	谷仲俊雄

調査担当者 高野浩之（株式会社地域文化財研究所）

調査参加者

（発掘調査）

海老原龍生	小野 豊	鬼澤 勲	小山義則	川崎剛史	北村 稔
今野春雄	今野美登里	佐久間弘美	鈴木利勝	高久照美	高安幸且
滝田一徳	中島 昭	中島貞雄	沼田久男		

（整理調査）

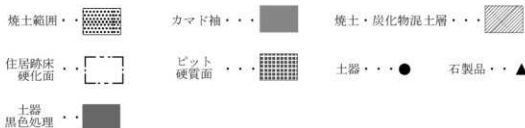
秋元智子	川村理華	木村春代	野村浩史	藤井陽子	増田香理
------	------	------	------	------	------

4. 本書は、谷仲、高野が分担して執筆し、各節の文責は文末に記載してある。編集は谷仲の助言の下に高野が行った。編集にあたっては増田、野村の協力を得た。
5. 遺構の写真撮影は高野が行い、遺物の写真撮影は野村が行った。
6. 縄文土器については齋藤弘道氏に、古墳時代須恵器については土生朗治氏にご教示いただいた。
7. 調査で得られた記録類、出土遺物は石岡市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関及び諸氏のご協力を得た。記して感謝の意を表します。（順不同・敬称略）

茨城県教育庁文化課 茨城県県南農林事務所 齋藤弘道 土生朗治

## 凡 例

1. 本書に記した座標値は、世界測地系第IX系を用いた。
2. 遺構実測図中の方位は座標北を示し、断面図に記載した数値は海拔標高値を表す。
3. 本文中及び遺構・遺物実測図中に用いた略記号は以下のとおりである。  
S I : 竪穴住居跡    S B : 掘立柱建物跡    S K : 土坑・地下式坑    P i t : ビット  
P : 竪穴住居跡内柱穴・ビット    S D : 溝    S X : 風倒木痕    K : 攪乱
4. 本書に用いた遺構・遺物実測図の基本縮尺は以下のとおりである。  
(遺構実測図) 全体図 1/650、竪穴住居跡 1/80、土坑 1/60、ビット 1/60、溝 1/80  
(遺物実測図) 縄文土器 1/3、土師器・須恵器 1/4、土製品 1/1・1/4、石製品 1/4  
石器 2/3・1/3、鉄製品 1/2
5. 遺構・遺物実測図中に用いたスクリーン・記号は以下のとおりである。



6. 土器実測図の断面に付したドット (■) は胎土に繊維を含むことを表し、還元炎焼成のものは断面を黒く塗ってある。
7. 遺構の規模は壁上端を計測し、深さは検出面からの数値である。柱穴などの遺構内施設は床または底面からの数値とした。主軸方向は座標北に対して何度偏斜するかを記した。基本的に竪穴住居跡ではカマドを通る中心線をもとにし、カマドが検出されていない場合は南北軸を基本とした。土坑などそれ以外の遺構は長軸線を軸線としている。
8. 土層説明及び出土遺物観察表の色調は『新版標準土色帖』2003年版を用いた。また、土層中に占める含有物の割合は、同書の「図1面積割合」を参考にした。
9. 遺構一覧表の規模や、出土遺物観察表の法量単位はcmで示し、( ) を付した数値は復元値、( ) の付した数値は残存値を表す。
10. 遺物観察表の中で、出土地点に○数字付区の記載がしてあるものは、土層観察用ベルトを設定して掘り下げた際に、区割りごとに遺物を取り上げた地点を示している。2分割の場合は北を①区、南を②区とし、4分割の場合は、北東側から時計回りに①～④区の区名を付して遺物を取り上げている。
11. 耕作によるトレンチャーで破壊されている部分は、煩雑になることを避けるため、図中には反映させなかった。
12. 本遺跡の略号はHHH-2014-2とし、出土遺物の採集時や注記に用いた。
13. 本書表紙に使用した遺物は、SI19出土(第41図掲載No.16・縮尺1/2)の須恵器壺である。

# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査に至る経緯と調査経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の概要	
第1節 調査の方法	4
第2節 基本層序	4
第3節 試掘調査	5
第4節 第1次調査	6
第4章 検出された遺構と遺物	
第1節 遺構・遺物の概要	9
第2節 遺構外の縄文土器・石器	9
第3節 竪穴住居跡	11
第4節 掘立柱建物跡	64
第5節 土坑	65
第6節 ビット	72
第7節 溝	78
第5章 総括	84
写真図版	
報告書抄録	

## 図版目次

第1図	調査地点位置図・・・・・・・・・・	1	第34図	SI15 遺構及び遺物実測図・・・・・・・・	42
第2図	遺跡の位置と周辺遺跡図・・・・・・・・	3	第35図	SI16 遺構実測図(1)・・・・・・・・	43
第3図	基本層序・・・・・・・・・・	4	第36図	SI16 遺構実測図(2) 及び遺物実測図・・・・・・・・	44
第4図	調査区域図及び試掘トレンチ図・・・・	5	第37図	SI17・18 遺構実測図・・・・・・・・	46
第5図	試掘遺物実測図・・・・・・・・・・	6	第38図	SI17 遺物実測図・・・・・・・・	47
第6図	遺構全体図・・・・・・・・・・	7、8	第39図	SI18 遺物実測図・・・・・・・・	48
第7図	遺構外遺物実測図・・・・・・・・・・	10	第40図	SI19 遺構実測図・・・・・・・・	49
第8図	SI01 遺構実測図・・・・・・・・・・	11	第41図	SI19 遺物実測図・・・・・・・・	50
第9図	SI01 遺物実測図・・・・・・・・・・	12	第42図	SI20 遺構実測図・・・・・・・・	52
第10図	SI02 遺構及び遺物実測図・・・・・・・・	14	第43図	SI20 遺物実測図・・・・・・・・	53
第11図	SI03 遺構実測図・・・・・・・・・・	16	第44図	SI21 遺構及び遺物実測図・・・・・・・・	54
第12図	SI03 遺物実測図・・・・・・・・・・	17	第45図	SI22 遺構及び遺物実測図・・・・・・・・	54
第13図	SI04 遺構実測図・・・・・・・・・・	18	第46図	SI23 遺構及び遺物実測図(1)・・・・	56
第14図	SI04 遺物実測図・・・・・・・・・・	19	第47図	SI23 遺構及び遺物実測図(2)・・・・	57
第15図	SI05 遺構実測図(1)・・・・・・・・	20	第48図	SI24 遺構及び遺物実測図・・・・・・・・	59
第16図	SI05 遺構実測図(2)及び遺物実測図・	21	第49図	SI25 遺構実測図・・・・・・・・	60
第17図	SI06 遺構及び遺物実測図・・・・・・・・	22	第50図	SI25 遺物実測図・・・・・・・・	61
第18図	SI07 遺構実測図・・・・・・・・・・	22	第51図	SI26 遺構実測図・・・・・・・・	63
第19図	SI07 遺物実測図・・・・・・・・・・	23	第52図	SI26 遺物実測図・・・・・・・・	64
第20図	SI08 遺構実測図(1)・・・・・・・・	24	第53図	SB01 遺構実測図・・・・・・・・	65
第21図	SI08 遺構実測図(2)・・・・・・・・	25	第54図	SK07 遺構実測図・・・・・・・・	66
第22図	SI08 遺構実測図(3) 及び遺物実測図(1)・・・・	26	第55図	SK13・14 遺構実測図・・・・・・・・	67
第23図	SI08 遺物実測図(2)・・・・・・・・	27	第56図	SK16 遺構及び遺物実測図・・・・・・・・	68
第24図	SI08 遺物実測図(3)・・・・・・・・	28	第57図	その他の土坑遺構実測図(1)・・・・	69
第25図	SI09・10 遺構実測図・・・・・・・・	32	第58図	その他の土坑遺構実測図(2) 及び遺物実測図・・・・・・・・	70
第26図	SI09 遺物実測図(1)・・・・・・・・	33	第59図	Pit 配置図・・・・・・・・・・	72
第27図	SI09 遺物実測図(2)・・・・・・・・	34	第60図	Pit 遺構実測図(1)・・・・・・・・	73
第28図	SI10 遺物実測図・・・・・・・・・・	36	第61図	Pit 遺構実測図(2)・・・・・・・・	74
第29図	SI11 遺構及び遺物実測図・・・・・・・・	37	第62図	Pit 遺構実測図(3)・・・・・・・・	75
第30図	SI12・13 遺構実測図・・・・・・・・	38	第63図	Pit 遺構実測図(4)及び遺物実測図・	76
第31図	SI12・13 遺物実測図・・・・・・・・	39	第64図	溝遺構実測図(1)・・・・・・・・	78
第32図	SI14 遺構実測図・・・・・・・・・・	40	第65図	溝遺構実測図(2)・・・・・・・・	79
第33図	SI14 遺物実測図・・・・・・・・・・	41			

## 表 目 次

第1表	試掘遺物観察表	6	第20表	SI17 遺物観察表	47
第2表	試掘遺構対比表	6	第21表	SI18 遺物観察表	48
第3表	調査区検出遺構内訳表	9	第22表	SI19 遺物観察表	51
第4表	遺構外遺物観察表	10	第23表	SI20 遺物観察表	53
第5表	SI01 遺物観察表	13	第24表	SI21 遺物観察表	54
第6表	SI02 遺物観察表	15	第25表	SI22 遺物観察表	55
第7表	SI03 遺物観察表	17	第26表	SI23 遺物観察表	58
第8表	SI04 遺物観察表	19	第27表	SI24 遺物観察表	59
第9表	SI05 遺物観察表	21	第28表	SI25 遺物観察表	62
第10表	SI06 遺物観察表	22	第29表	SI26 遺物観察表	64
第11表	SI07 遺物観察表	23	第30表	SK16 遺物観察表	68
第12表	SI08 遺物観察表	28	第31表	その他の土坑一覧表	71
第13表	SI09 遺物観察表	34	第32表	SK15 遺物観察表	71
第14表	SI10 遺物観察表	36	第33表	Pit一覧表	76
第15表	SI11 遺物観察表	37	第34表	Pit遺物観察表	77
第16表	SI12・13 遺物観察表	39	第35表	溝一覧表	79
第17表	SI14 遺物観察表	41	第36表	出土遺物集計表(縄文時代)	80
第18表	SI15 遺物観察表	42	第37表	出土遺物集計表(古墳時代以降)	80
第19表	SI16 遺物観察表	45	第38表	遺構変遷表	85

## 写 真 図 版

写真図版 1	1区全景 / 2区全景 / 3区全景 / 4区全景 / 5区全景 / 6区北側全景
写真図版 2	6区全景 / 7区全景 / 7区西側全景 / 8区全景
写真図版 3	SI01 遺物出土状況 / SI01 全景 / SI02 全景 / SI03 遺物出土状況 / SI03 完壁全景 / SI03 全景 / SI04 全景 / SI05 全景
写真図版 4	SI06 遺物出土状況 / SI07 遺物出土状況 / SI08 遺物出土状況 / SI08 全景 / SI08 土層断面 / SI09・10 全景 / SI09 遺物出土状況
写真図版 5	SI09 遺物出土状況 / SI11 全景 / SI12・13 全景 / SI14 全景 / SI15 全景 / SI16 遺物・炭化材検出状況 / SI16 遺物出土状況 / SI16 全景
写真図版 6	SI17 全景 / SI18 全景 / SI19 遺物・炭化材検出状況 / SI19 遺物出土状況 / SI19 全景 / SI20 全景 / SI21 炭化材検出状況 / SI22 カマド検出状況
写真図版 7	SI23 遺物出土状況 / SI23 全景 / SI23 土層断面 / SI24 全景・SI25 北検出状況 / SI25 遺物出土状況 / SI25 遺物出土状況 / SI25 全景 / SI26 全景
写真図版 8	SD01 全景 / SK07 全景 / SK13・14 全景 / SK16 主室部分土層断面 / SK16 全景 / SK16 竪坑部分全景 / SD01～03 全景 / SD08 全景

写真図版	9	遺構外・SI01・SI02 出土遺物
写真図版	10	SI03・SI04 出土遺物
写真図版	11	SI05・SI06・SI07・SI08 出土遺物
写真図版	12	SI08 出土遺物
写真図版	13	SI08 出土遺物
写真図版	14	SI08・SI09 出土遺物
写真図版	15	SI09 出土遺物
写真図版	16	SI09・SI10・SI11・SI12・13 出土遺物
写真図版	17	SI14・SI15・SI16・SI17・SI18 出土遺物
写真図版	18	SI19・SI20・SI21・SI22 出土遺物
写真図版	19	SI23・SI24・SI25 出土遺物
写真図版	20	SI25・SI26・SK15・SK16・P11・試掘出土遺物

## 第1章 調査に至る経緯と調査経過

### 第1節 調査に至る経緯

茨城県は、平成18年度に「畑地帯総合整備事業 東成井西部地区」の計画を立ち上げ、平成19年度には埋蔵文化財包蔵地の地図に記載がないことを確認し、計画書を作成した。平成20年12月に県営事業として計画が決定、平成21年1月に確定したことから事業に着手し、平成22年1月からは区画整理工事に着手していた。

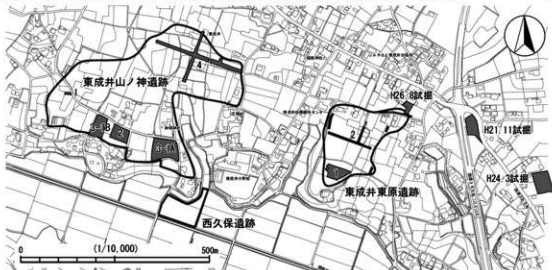
一方、石岡市教育委員会は、平成21年6月に開発行為に伴う埋蔵文化財確認のための現地踏査によって東成井山ノ神遺跡を発見し、6月25日付で茨城県教育委員会に「遺跡発見の届出」を連達していた。

平成22年6月15日、茨城県文化財保護指導委員より東成井山ノ神遺跡の範囲内において掘削を伴う工事が実施されている旨、石岡市教育委員会へ連絡があった。市教育委員会が同日現地を確認したところ、工事範囲内において土器の散布を確認したことから、事業主体である茨城県県南農林事務所へ工事の中断を要請するとともに、埋蔵文化財に関する協議を申し入れた。

平成22年6月21日、県南農林事務所より「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が市教育委員会に提出された。市教育委員会は、中断中の工事の未着手部分の試掘調査および事業地内の踏査を行い、事業地全域について試掘調査が必要な旨を平成22年7月22日付で回答した。試掘調査を平成22年9月～11月に断続的に実施したところ、当初の東成井山ノ神遺跡の範囲を超えて遺跡を確認するとともに、新たに東成井東原遺跡を確認した。

平成22年11月15日、県南農林事務所より、県教育委員会あて「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出された。県教育委員会からは平成22年12月17日付で、東成井山ノ神遺跡および東成井東原遺跡の1. 道路工事部分については工事着手前に発掘調査を実施するように、2. 区画整理工事部分については市教育委員会が立会うように通知があった。

これらを受け、平成23年度は東成井山ノ神遺跡について株式会社ノガミに委託し発掘調査を実施した。平成26年度は東成井東原遺跡について有限会社日考研茨城及び株式会社地域文化財研究所に委託し発掘調査を実施することとなり、本報告は株式会社地域文化財研究所の調査担当にあたる。(谷仲)



第1図 調査地点位置図



## 第2節 調査の経過

発掘調査は、平成26年9月1日から同年10月29日まで実施した。調査に先立ち調査区を設定し、便宜上8区に分けた（第4図）。

9月1日、表土除去を開始した。調査区内にある栗木等伐採の都合から、まず6区の南側と7・8区から行い、3日には作業員が着任し、遺構確認作業を開始した。4日、8区の表土除去を終えた段階で一旦中断した。同日、遺構確認を終了し、7区西側より遺構掘削を開始した。基準点測量と水準点設置も併せて行った。9日から8区の遺構掘削に着手し、7区と併行して作業を進めた。16日には8区に作業員全員を投入し、17日に同区的全景写真撮影を行った。18日以降は7区の遺構掘削を西から順次行い、24日までに同区の調査をほぼ完了し、6区南側への調査へと徐々に移行していった。30日には作業員全員で7区の全体清掃を行い、全景写真撮影を終えて、7・8区の調査を終了した。

10月1日から未着手であった1～5区と6区北側の表土除去を再開した。2日、住宅進入路確保のため、先行して調査の必要な1区東側の遺構掘削を開始し、3日には終了させた。全ての表土除去は4日に終了し、遺構確認を順次行った。7日に全ての遺構確認を終了し、2区から遺構掘削を開始した。8日から1区の遺構掘削に入り、14日には1・2区の全体清掃後、全景写真撮影を行った。15日から4・5区の遺構掘削を開始した。16日、5区を完掘し、全体清掃、全景写真撮影を終えた。その後4区と併行して6区北側の調査を開始した。17日、3区の遺構掘削を終了し、20日以降は6区に調査を集中させた。27日に6区の調査を終了し、全体清掃、全景写真撮影を行った。28日、石岡市教育委員会の終了確認を受け、29日、施設及び発掘器材の撤収を行って、現地発掘調査の全業務を完了した。

整理調査は、平成26年10月27日から平成27年2月28日まで実施した。

10月27日、出土遺物の水洗い作業を開始した。遺物整理箱で20箱分の遺物を、事前に搬入してあったものから順次行い、翌月11月7日で終了した。11月10日から注記作業を開始した。19日、注記作業を終了し、同日より遺物の接合を開始した。遺物の選別は、遺物接合の過程で行った。12月10日、遺物の接合・選別をほぼ終了した。選別資料に関しては18日に石岡市教育委員会の了解を得た。この遺物接合・選別作業の間、遺構原稿の執筆を行った。遺物実測は11月から開始し、年がかわった1月5日にはトレース作業を併行して開始した。ある程度遺物の実測が進んだ段階で遺物観察表を作成し、遺物の実測・トレースが終了した後の14日まで作業を継続した。15日より報告書作成業務に入り、遺構、遺物図版、写真図版割り付け等の編集作業を経て、30日に終了した。2月2日から28日まで、石岡市教育委員会の査読及び校正作業を行って、本報告書の刊行に至った。

(高野)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

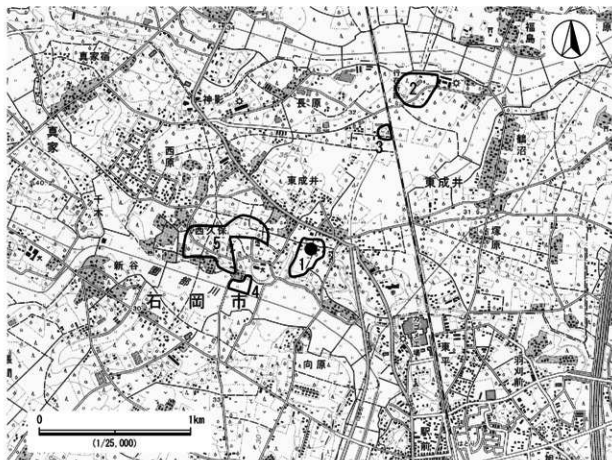
東成井東原遺跡の所在する石岡市は茨城県のほぼ中央にあって、北西部の筑波山系から南部の市街地にかけてなだらかな丘陵地が形成されている。この丘陵地には主要河川となる巴川、園部川、志瀬川の3河川が東南流し、それぞれ霞ヶ浦や北浦へと注いでいる。これら河川流域は、開析によって小支谷が複雑に入り組み、台地周辺部の地形に大きな影響を与えている。

本遺跡の位置する東成井は、市街地中心部から北方へ約7.5km離れた旧八郷町の北東端部にあたる。西方

には筑波山系、南側には園部川を臨み、沖積低地に向かって緩やかに傾斜した標高33mの台地上に立地している。遺跡として周知されている範囲の西側には大きな支谷が延び、本次調査地はその谷頭にあたる。調査前の現況は畑地と栗林であった。(高野)

## 第2節 歴史的環境

東成井地区の調査事例は、近年の国道バイパス建設や畑地帯整備事業の進展に伴って蓄積されつつある。今回の調査地、東成井東原遺跡(1)の周辺遺跡を概観してみると、国道バイパス建設に伴い平成16年度及び平成21年度に実施された新松遺跡(2)・長原遺跡(3)では、旧石器時代の石器集中地点4か所が確認され、細石万文化への過渡期になる石器群と推定されている。県外産出の石材も出土していることから移動や交流の可能性も考えられている。縄文時代では規則的に配列した陥穴が確認され、中期以前の一時期に機能した可能性が指摘されている。また堅穴住居跡は加曾利E I 式期のものである。古墳時代では前期から6世紀初頭にかけての堅穴住居跡3軒が検出されている。東成井小学校南側の西久保遺跡(4)は沖積地に立地する遺跡で、和同開珎が出土している。本遺跡に西側に隣接する東成井山ノ神遺跡(5)では、平成23年度に行われた調査で、縄文時代の陥穴2基、6世紀後半と7世紀末から8世紀前半にかけての堅穴住居跡34軒が検出された集落跡である。7世紀代の畿内系土師器が含まれていることで、畿内との関連が注目されている。同時に中世の遺構も地下式坑5基をはじめ、方形堅穴状遺構や溝跡も検出され、溝跡から仏像铸造関連品が出土したことは特筆される。(高野)



第2図 遺跡の位置と周辺遺跡図

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査の方法

発掘調査に際し、調査区は新設道路及び現道拡幅部分が対象になるため各地点が広範囲に分布していることから、便宜上1～8区に区分した(第4図)。表土除去はバックフォーを使用し、遺構検出面まで慎重に掘り下げた。その後の遺構確認及び遺構掘削は全て人力で行った。確認された遺構は平板実測により遺構確認状況図(1/200)を作成し、そこに遺構名を記して、現地調査から報告書までの基準にした。遺構名は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の用例に従った。全調査区には10×10mの方眼グリッドを網羅した。グリッド設定に際しては世界測地系第IX系を用いてX=28880、Y=39720の基点を導き出し、これを北西隅として、北から南へアルファベット「A～Q」、西から東へ算用数字「1～23」を付した。この双方併せた名称をグリッド名にし、北西隅をA1グリッド、南東隅をQ23グリッドとし、現地調査時の遺物採集や報告書での遺構検出位置などに活用した。遺構の掘削時には、十字のベルトまたは半載によって土層の観察を行い、埋没過程の把握に努めた。遺構平面は遣り方実測により記録し、堅穴住居跡のカマドは基本的に四分分割して掘り下げた。遺物の出土地点は、遣り方実測とレベルを併用して記録した。写真による記録は、35mm判カメラにより白黒フィルム、カラーリバーサルフィルム双方を用い、ほかに1000万画素のデジタルカメラを併用して、調査の過程で随時撮影を行った。

整理作業として、遺物の水洗いは全ての遺物に対して行い、注記は注記専用機械を用いて微小片を除き可能な限り行った。土器の接合にあたっては、バイサム(赤褐色)を用いて必要最小限の補強を行った。報告書作成業務は遺構図作成班と遺物実測班に分かれて作業を進めた。現地において作成された遺構図の原因は、修正後にデジタルトレースを行った。一方、遺物実測図は手測り実測によって作成した後、ロットリングによるトレースを行った。遺物トレースは版下を作成し、最終的にDTP編集作業を行った。(高野)

### 第2節 基本層序(第3図)

基本層序は、全調査区の中で最も標高が高く、さらにトレンチヤー等耕作の影響のない7区中央部のH7グリッド内に試掘坑を設定して観察を行った。

I層は表土・耕作土層で、I-a、I-b層に分けられるが、I-b層はロームブロックを中量以上含み、攪乱層とみられる。II層はIII層ソフトロームへの漸移層に相当し、II層下部からIII層上面が遺構検出面になる。IV層もソフトロームであるが、ガラス質の細粒が極微量認められる。V層以下ハードロームで、VI層は色調が暗く、黒色帯と考えられる。VII層から黄色粒がわずかに含まれるようになり、下層へ移行するに従い、



第3図 基本層序

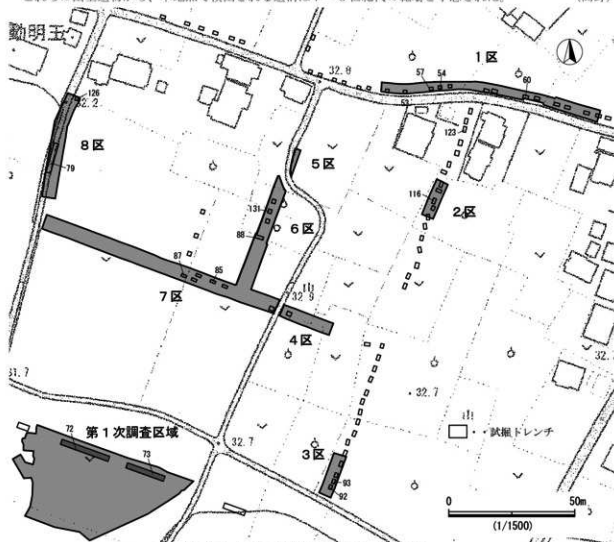
この黄色粒は増加する。Ⅷ層から堆積が斜状になり、層が乱れている。Ⅹ層は鹿沼軽石層で下層ほど粒状が粗くなっている。  
(高野)

### 第3節 試掘調査 (第5図、第1・2表、写真図版20)

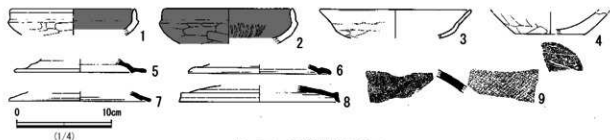
本調査に至る事前の試掘調査は、平成22年9月6日から同年11月12日まで実施された。調査では開発対象区域に229ヶ所の試掘トレンチが設定され(第4図)、調査の結果、古墳時代～奈良・平安時代の竪穴住居跡20軒、土坑25基、溝6条、ピット等が確認された。その内、本遺跡の2次調査に関連する遺構は竪穴住居跡4軒、土坑8基で、遺構の規模はいずれも4m前後、土坑は1～3mと予想された。全てのトレンチから出土した遺物は、該期の土師器、須恵器を主体とし、351点・3,807gである。なお、試掘調査で付された遺構名は、本調査で検出された遺構と照合した(第2表)。遺物は、本調査で合致した遺構の出土遺物と接合を試みたが、小破片が多く、接合する土器はほとんどなかった。

1～3は土師器杯の口縁部片で、1・2は須恵器模倣形態であるが内湾度が弱い。3は体部中心位以下に稜を持つ新しい形態である。5～8は須恵器蓋で、5～7は内面にかえりを持つ。9は須恵器甕の胴部片で格子目のタタキを施している。雲母を含む胎土から新治窯の所産と考えられる。

これらの出土遺物から、本地点で検出される遺構は7～8世紀代の範疇と予想された。  
(高野)



第4図 調査区域図及び試掘トレンチ図



第5図 試掘遺物実測図

第1表 試掘遺物観察表

図号	種類 器種	口径 高さ 底径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 杯	(13.0) (3.7) —	口縁部～体部片。内外面塗りの黒色処理で一部赤彩あり。口縁部は内外面横ナズ。体部の外面はヘラケズリ。内面は横ナズ。	雲母、白色粒	10YR4/2R黄褐 10YR3/1黒褐	焼成 良好	T-7.9
2	土師器 杯	(13.5) (3.7) —	口縁部～体部片。内外面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。体部の外面はヘラケズリ。内面は放射状のヒラキ。	雲母、砂鉄多量	10YR2/1黒褐 10YR2/1黒	焼成 良好	T-8.7
3	土師器 杯	(15.9) (3.0) —	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナズで輪模様が残る。体部の外面はヘラケズリ。内面は横ナズ。	雲母、石英、赤石	7.5YR4/2R黄褐 10YR3/2黒褐	焼成 普通	T-8.8
4	土師器 甕	(2.3) (1.4) —	底面片。胴部下縁の外面はヘラケズリ。底部の外面には木炭屑。内面はヘラナズ。	砂鉄多量	10YR3/2黒褐 10YR5/3R-2.5Y黄褐	焼成 普通	T-8.8
5	須恵器 蓋	(14.0) (1.4) —	口縁部片。口縁部は水平で内面にかえりを持つ。	雲母、石英	2.5YR7/2R黄 2.5YR7/2R黄	還元 良好	T-8.8
6	須恵器 蓋	(15.0) (1.0) —	口縁部片。口縁部は水平で内面にかえりを持つ。	雲母、石英	10Y7/2R黄 10Y7/2R黄	還元 良好	T-8.8
7	須恵器 蓋	(15.0) (1.0) —	口縁部片。口縁部は水平で内面にかえりを持つ。	雲母、砂鉄	2.5Y7/2R黄 2.5Y7/2R黄	還元 良好	T-8.8
8	須恵器 蓋	(17.0) (1.7) —	口縁部片。口縁部は屈曲し横ナズ。	石英、黒色粒	5YR/1R 5Y5/1R	還元 良好	T-8.8
9	須恵器 甕	(2.4) — —	胴部片。外面は格子目状のタタキ。内面の当て具痕は不明瞭。	雲母少量、石英、黒色粒	N5/ 灰 N4/ 灰	還元 良好	T-1.2.3

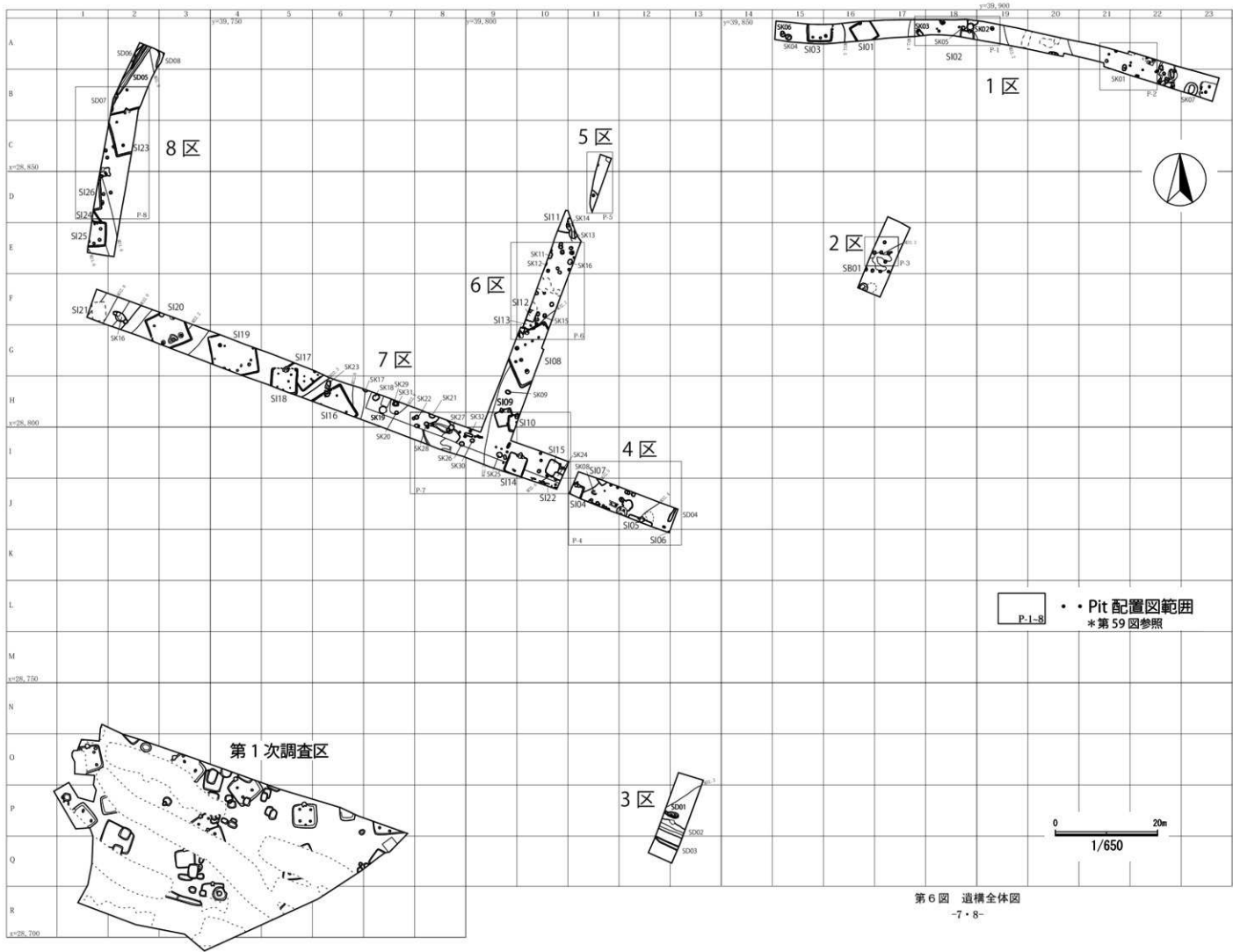
第2表 試掘遺物対比表

遺構名	確認位置 トレンチ	試掘調査 出土遺物	→	本調査(第2次調査)	
				遺構名	検出位置 区 グリッド
SI06	T-54・57	土師器(坏3、甕11)	→	SI01	1区 A16
SI11	T-79	土師器(坏5、甕32)	→	SI23	8区 B2、C2
SI12	T-126	土師器(坏6、甕2)	→	SD08	8区 A2・3
SI19	T-88	土師器(坏6、甕80)、須恵器(坏15、甕1)、鉄滓(79)	→	SI08	6区 C9・10、H10
SK11	T-53	須恵器(甕2)	→	SK04?	1区 A15
SK13	T-60	—	→	SK04?	1区 A20
SK16	T-87	土師器(甕1)	→	SK19?	7区 H7
SK17	T-85	—	→	SK27?	7区 I8
SK18	T-92	—	→	SD01又はSD02?	3区 P13
SK19	T-116	土師器(甕3)、須恵器(坏1)	→	SB01又はSX07?	2区 E16・17
SK20	T-116	—	→	SB01又はSX07?	2区 E16・17
SK22	T-131	—	→	PI41又はPI45?	6区 E10

#### 第4節 第1次調査(第4・6図)

今回の第2次調査に先行して、平成26年7月10日から同年9月22日にかけて第1次調査が行われた。第1次調査地点は第2次調査を行った7区から南方向へ70m程離れた台地先端部に位置し、南側にかけて緩やかに傾斜する地形上に立地している。試掘調査ではT-72・73にかかる地点の1,630㎡が本調査として設定された(第4図)。調査の結果、古墳時代後期と奈良・平安時代の堅穴住居跡2軒、中近世を主体とした土坑37基、井戸跡1基、溝1条が検出され(第6図)、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、土製支脚、銭貨、磁石、磨石などが出土した。

(高野)



## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺構・遺物の概要 (第3・36・37表)

東成井東原遺跡は、東西・南北ともに約200mの範囲が周知され、今回の第2次調査はその北側半分をほぼ網羅する形で8ヶ所の調査区が設定された。各区の現況は、1～3区と6区北側が栗林、4・7・8区は畑地として利用されていた場所である。表土除去を行った段階で、栗林の部分は植栽痕や何らかの目的で重機を使用した攪乱が目立ち、畑地部分では、5区を除き牛糞または炭栽培のためのトレンチャー跡が激しく遺構を壊していた。特に7区西側での攪乱は顕著であった。

検出された遺構の総数は、竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡1棟、土坑32基、ピット90基、溝8条であった。土坑とした中には、陥穴状遺構3基と地下式坑1基が含まれる。各区における遺構の内訳は第3表にまとめた。なお、遺構としては取り扱わなかったが、1・2・4・6・7区では風倒木痕(SX)が確認されており、7区で検出された風倒木痕はかなりの大型であった。2区のSB01や6区のSI12はこの風倒木痕上に構築されている。また、1・4・5区では検出面より若干落ち込む地点を確認し、竪穴状遺構としていたが、床面等住居跡とする痕跡が認められなかったため、遺構から除外している。

遺物は、総点数で7,388点、総重量で184,072gが出土した。その内訳と全体の数から土器の点数比をみると、縄文土器は37点・656.5gで1%にも満たない。一方、土師器は坏・碗・鉢類が1,863点・39,279gで25%、甕・瓶類が4,678点・110,517gで64%を占め、出土遺物の主体となっている。須恵器は坏・蓋類が326点・5,184gで全体の6%、甕・壺・瓶類が180点・6,182gで全体の3%であった。中世以降の土器は内耳土鍋を主体として14点・414gとわずかな出土量であった。その他土器以外の遺物では、石器が石鏃1点1g、磨製石斧1点55.0g、土製品が手捏土器等24点1,110g、支脚28点・2,728g、紡錘車1点・56.8g、石製品が砥石3点1,421g、紡錘車1点・51.0g、鉄製品が鉄鏃1点・6.8g、刀子1点・14.3g、鉄斧3点70.0g、鎌1点・42.7g、鋤・鋸類1点20.9g、釘1点・10.4gで、鉄滓は142点・3,563gが出土している。

第3表 調査区検出遺構内訳表

遺構種別	SI	SB	SK	Pit	SD	(SX)	備考
1区	01～03		01～07	01～18		01～05	栗林栗林、溝敷区は南側で現在使用されている道路に沿って設定。
2区		01		19～21		06～07	栗林栗林。
3区					01～03		栗林栗林、溝敷区は南側で現在使用されている道路に沿って設定。
4区	04～07		08	22～35	04	08	栗林が隣接し、畑が若干侵入。全体に耕作によるトレンチャーで検出面が攪乱。
5区				36～37			栗林栗林。
6区	08～13		09～15	38～54		09	栗林栗林が隣接、南側に畑地。北側では雑草が目立つ。
7区	14～22		16～32	55～82・90		10	栗林栗林。西側では耕作によるトレンチャーで検出面が攪乱。
8区	23～26			83～89	05～08	11	栗林栗林。東側では耕作によるトレンチャーで検出面が攪乱。
合計	26軒	1棟	32基	90基	8条	(11ヶ所)	

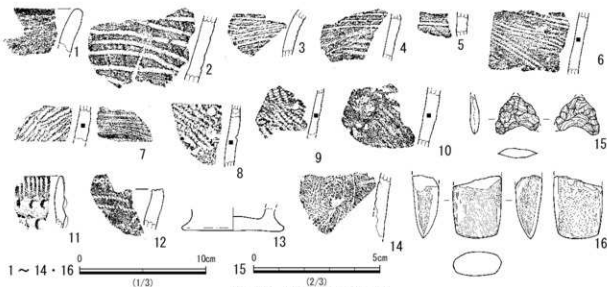
※SXは風倒木痕として遺構数には含まず、あくまで参考。

### 第2節 遺構外の縄文土器・石器 (第7図、第4表、写真図版9)

縄文時代の遺物は、縄文土器37点・656.5g、石器2点(石鏃1点1.1g、磨製石斧1点55.0g)が出土した。今回の調査では、縄文時代の陥し穴と考えられる土坑3基(1区・SK07、6区・SK13・14、第5節後述)を検出しているが、縄文時代の遺物は出土せず、ほとんどは古墳時代以降の遺構覆土中から出土したものである(第4表)。土器の時期は、縄文時代早期～前期が主体で、早期土器文系の田戸下層式が8点・159.1g、前期黒浜式が8点・86.1gで最も多く、他に早期・条痕文系土器や前期浮島・興津式土器も認められる。

1の口縁部は口唇部が丸みを持ち、器面には横位の擦痕がみられ、内面は丁寧にミガキがかけられる。

胎土には石英が多量に含まれていることから、沈線文系土器直前の天矢塚式と考えられる。2～5は沈線文系の器群である。2は太沈線で尖底土器の底辺部の破片と思われ、5は沈線間に貝殻復縁文が施文されている。胎土が精良堅緻で田戸下層式に比定される。6は表面に無節縄文、裏面に条痕文が施文され、茅山式と思われる。7～10は胎土に繊維を含んだ土器群で、無節・単節縄文が施文されている。7は条痕文系土器で、表面に無節縄文、裏面に条痕文が施文される。8には補修孔が穿たれ、9は内面が丁寧に磨かれている。いずれも黒浜式の所産である。11は口縁部直下に条線帯を巡らせ、深めの凹凸文を横走させた興津式の口縁部片である。12は外面に縄文原体の側面圧痕、口唇部には円形刺突文が施された粟島台式の口縁部片と考えられる。13は下端が張り出す底部片で縄文後期の所産であろう。14は細い有節沈線で文様を描出した雲



第7図 遺構外遺物実測図

第4表 遺構外遺物観察表

図面番号	種類・器種	部高	文様・特徴	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	縄文土器 口縁部	(3.5)	口縁部片。無文。口唇部は丸みを持つ。外面は斜状の擦痕。(天矢塚式)	石英、白色粒	10185/212・赤褐色 10184/212・赤褐色	普通	5114区 覆土
2	縄文土器 底縁部	(5.5)	胴部片。太沈線を多量に横走させる。(田戸下層式)	石英多量、長石多量	7.5386/412・赤褐色 7.5386/412・赤褐色	良好	5108 表探
3	縄文土器 底縁部	(3.7)	胴部片。横位～斜位の細沈線を施文。(田戸下層式)	砂粒	10187/412・赤褐色 7.5387/412・赤褐色	良好	5119区 覆土
4	縄文土器 底縁部	(3.5)	胴部片。細沈線を多量に横走させる。(田戸下層式)	白色粒、砂粒	10185/412・赤褐色 10185/412・赤褐色	良好	5816 覆土
5	縄文土器 底縁部	(2.0)	胴部片。沈線間に貝殻復縁文を施文。(田戸下層式)	雲母少量、石英	10186/412・赤褐色 7.5386/412・赤褐色	良好	5108 覆土
6	縄文土器 底縁部	(4.8)	胴部片。外面に貝殻条痕文を施文。(茅山式)	繊維、石英、長石	7.5386/412・赤褐色 10185/412・赤褐色	普通	5108区 覆土
7	縄文土器 底縁部	(5.0)	胴部片。外面に無節縄文、内面に条痕文を施文。(黒浜式)	繊維少量、砂粒、砂粒	10184/412・赤褐色 10184/412・赤褐色	普通	5909 覆土
8	縄文土器 底縁部	(2.8)	胴部片。単節とL縄文を施文。補修孔あり。(黒浜式)	繊維、砂粒多量	7.5385/412・赤褐色 10186/412・赤褐色	普通	5103区 覆土下層
9	縄文土器 底縁部	(3.7)	胴部片。施文縄文は単節とL縄文のみ。内面はヒガキ。(黒浜式)	繊維、雲母	7.5387/412・赤褐色 10186/412・赤褐色	普通	5123区 覆土
10	縄文土器 底縁部	(4.7)	胴部片。外面に無節縄文を施文する。(黒浜式)	繊維多量、砂粒	10186/412・赤褐色 10186/412・赤褐色	普通	5122区 覆土
11	縄文土器 底縁部	(4.1)	口縁部片。口縁部直下に条線帯、以下凹凸文を横走させた。興津式)	石英、砂粒	10187/412・赤褐色 7.5386/412・赤褐色	普通	5119 表探
12	縄文土器 底縁部	(3.2)	口縁部片。口唇部に円形刺突文、口縁部直下に縄文の側面圧痕文を横走させた。粟島台式で施文する。(粟島台式)	雲母少量、砂粒多量	7.5386/412・赤褐色 7.5386/412・赤褐色	普通	5123区 覆土
13	縄文土器 底縁部	(1.8)	底部片。底縁部0.6cm。無文。胴部下端が大きく張り出す。(縄文後期末)	雲母、石英、長石	10187/412・赤褐色 10185/212・赤褐色	普通	5308区 覆土
14	縄文土器 底縁部	(5.0)	胴部片。細い有節沈線で文様を描出した(図上台11～14式)	雲母、石英多量、砂粒	10184/412・赤褐色 10184/412・赤褐色	不良	5116 覆土
15	石器 石鏃	長さ：1.5cm、幅：1.7cm、厚さ：0.4cm、重量：1.0g、石材：チャート	凹溝無葉形、ほぼ完形、先端部をわずかに欠損。				5120区 覆土
16	石器 磨製石斧	長さ：(4.9cm)、幅：3.8cm、厚さ：2.1cm、重量：55.0g、石材：砂岩	定向式。基部欠損、側面に磨り痕あり。				5816 覆土

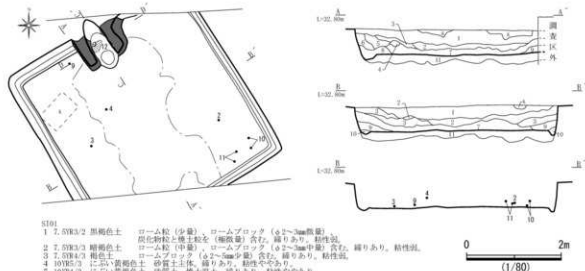


母を含む阿玉台式前半の胴部片で、縄文中期と判断される土器片はこの14のみである。石器では15はチャート製の石鏃で先端部をわずかに欠損し、16は砂岩製の定角型磨製石斧と考えられる刃部片である。（高野）

### 第3節 竪穴住居跡

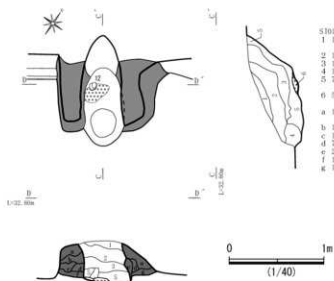
#### S101（第8・9図、第5表、写真図版3・9）

検出位置は1区西側のA16・17グリッドである。北東隅と南西隅の一部が調査区外にあるが、平面形状は方形で、規模は東西軸で4.33m、南北軸で4.20mを測り、主軸方向はN-31°-Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存する壁高は53cmである。覆土は10層に分層された自然堆積で、下層部ではロームブロックの含有量が多いことから人為的な埋め戻しがあったのかもしれない。北西壁寄りではカマド左袖部の流れ込みが多く認められた。床面は平坦で、カマドから南壁にかけての中央部に顕著な硬化面が広がる。壁溝は



S101

- 1 7.0YR3/2 黒褐色土 ローム粒（少量）、ロームブロック（φ2~3mm少量）、炭化植物と骨土粒を（細微量）含む、締りあり、粘性弱。
- 2 7.0YR3/3 暗褐色土 ローム粒（中量）、ロームブロック（φ2~3mm中量）含む、締りあり、粘性弱。
- 3 7.0YR3/3 褐色土 ロームブロック（φ2~3mm少量）含む、締りあり、粘性弱。
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色土 砂質土主体、締りあり、粘性ややあり。
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色土 砂質土、焼土混入。締りあり、粘性ややあり。
- 6 10YR4/4 褐色土 ローム粒（少量）含む、締りあり、粘性弱。
- 7 2.0YR4/3 褐色土 ロームブロック（φ5~10mm多量10%）、ローム粒（中量）含む、締りあり、粘性弱。
- 8 10YR5/4 にぶい黄褐色土 砂質土主体、ロームブロック（φ5~10mm少量）含む、締りあり、粘性ややあり。
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック（φ2~3mm多量10%）、φ10~15mm少量）含む、締りあり、粘性弱。
- 10 10YR4/4 褐色土 ロームブロック（φ2~3mm少量）含む、締りあり、粘性弱。
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック（φ10~30mm含む）、締り強、粘性ややあり。



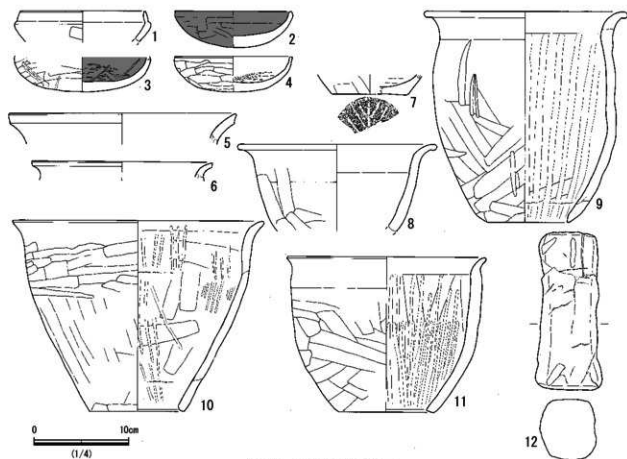
S101 カマド

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色土 砂質土、赤褐色土（少量）含む、締りあり、粘性なし。
- 2 10YR5/6 明黄褐色土 砂質土、焼土（少量）含む、締りあり、粘性なし。
- 3 10YR5/6 黄褐色土 砂質土、焼土（微量）含む、締りあり、粘性なし。
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土 砂質土をブロック状に（少量）含む。
- 5 7.0YR4/3 褐色土 砂質土主体、焼土ブロック（φ2~7mm多量10%）含む、締りあり、粘性弱、焼土ブロック主体、締り強、粘性なし。
- 6 5YR4/6 赤褐色土 焼土（少量）含む、締りあり、粘性弱。
- a 10YR5/4 にぶい黄褐色土 砂質土、焼土（少量）含む、締りあり、粘性なし。
- b 10YR5/6 黄褐色土 砂質土と焼土の混入。締りあり、粘性なし。
- c 7.0YR5/4 黄褐色土 砂質土と焼土（少量）含む、締りあり、粘性なし。
- d 7.0YR5/4 にぶい黄褐色土 砂質土と焼土との混入。締りあり、粘性弱。
- e 2.0YR4/6 赤褐色土 焼土、炭灰による硬結。締り強、粘性なし。
- f 10YR4/2 灰黄褐色土 砂質土（多量20%）含む、締りあり、粘性弱。
- g 10YR5/6 明黄褐色土 砂質土。締りあり、粘性弱。

第8図 S101 遺構実測図

ほぼ全周するとみられ、断面U字状で幅は17～22cm、深さ6～10cm程である。貯蔵穴や支柱穴は検出されなかった。掘り方は中央部を高く、兩壁際を除く壁際が深く掘り下げられ馬蹄形を呈する。カマドは北西壁の中央に付設され、煙道部は壁を33cm掘り込んでいる。焚口部から煙道部までの全長は115cm、袖部の最大幅は117cm、袖部の構築材はにぶい灰褐色粘質土とにぶい黄褐色砂質土の混土が用いられ、砂質土の割合が高い。そのためか強度があまり高くないようで、構築材が燃焼部内と袖部左右に大きく崩落していた。燃焼部には左袖寄りに焼土が12cm程堆積し、土製支脚が立脚していた。火床部は、焼土の前面が被熱して浅く掘り窪められた部分と考えられるが、特に硬化した部分は認められなかった。

遺物は、153点・7,282gが出土した。土器は土師器のみの出土で須恵器は認められず、その内環類は25点と少なく、残存率もあまり良くないものばかりである。一方、甕・甔類は126点であるが、内面の調整にミガキのものが比較的多いことから、甔の破片が主体と考えられる。1は、須恵器環埴做形態の埴で、口縁部が内傾し、直下に段を有する。2・3は無段有種の埴で、双方とも口縁部は短く内湾する形態となり、内外面または内面に漆塗りによる黒色処理がなされる。3の内面は円心状に雑なミガキの後、放射状のミガキがまばらに施されているのが特徴的である。一方、4は形態的には2・3に類似するが、口縁部は短く直立しない半球形に近いもので、黒色化せず外面にミガキが念入りに施されている。内面を見るとミガキの技法が3に類似するが、放射状のミガキは確認できない。2～4の器壁は厚めである。5・6の甔はいずれも口縁部だけの細片で開き気味の形態になり、口唇部が面取りされている。8～11は甔である。カマド西側脇に横転して出土した9はやや長胴気味であるが、他は器高が低い。口縁部の形態は、8・10などは大きく開き、9・10の口縁部は外側へ短く屈曲する。12は前述したカマドに立脚し出土した支脚の完形品である。



第9図 S101 遺物実測図

出土物から推定される本跡の時期は、坏の中で須恵器模倣坏が少ないことや、坏の器壁が厚めで浅い器形ということもあるが、口縁部が直立する半球形状の坏も存在することから、7世紀中葉以降と考えられる。

第5表 S101 遺物観察表

図面番号	種類 器種	口縁部 高 直径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色層 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 罎	113.0 (3.3)	口縁部～体部片、口縁部内外面横ナズ。体部の外面へラケズリ。	石英、長石、黒	10YR4/2R黄褐 / 2.53R/2R赤	酸化赤 良好	④区覆土 下層
2	土師器 罎	12.2 3.8	口縁部～底部、90%存。口縁部の一部を欠損。内外面漆塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。体部～底部の外面はへラケズリ後くさき、内面は横ナズ。	雲母、石英少量	7.5YR5/1黒褐 / 7.53R2/1黒	酸化赤 良好	④区覆土
3	土師器 罎	— (3.7)	体部～底面、30～40%存。内面漆塗りの黒色処理。体部の外面はへラケズリ後まばらなくさき、内面は円心状のくさき後、捺刷状のまばらなくさき。	石英、長石、 チャート、白色 粒	10YR5/4に5黄褐 / 2.53R3/1黒褐	酸化赤 良好	④区覆土
4	土師器 罎	(12.2) 3.7	口縁部～底部、70%存。口縁部は内外面横ナズで、底下はくさき。体部の外面へラケズリ後くさき、内面は円心状のくさき後、捺刷状のまばらなくさき。底面の外面はへラケズリ。	雲母、黒色粒	7.5YR5/4に5黄褐 / 7.53R5/4に5黄褐	酸化赤 良好	④区覆土
5	土師器 罎	(23.8) (3.3)	口縁部片、内外面横ナズ。	石英多量、長石 多量	5YR5.0明赤褐 / 5YR4.6赤褐	酸化赤 良好	④区覆土 上層
6	土師器 罎	(19.0) (2.0)	口縁部片、内外面横ナズ。	石英、長石、微 小砂少量	7.5YR6/4に5黄褐 / 7.53R6/4	酸化赤 良好	④区覆土
7	土師器 罎	(2.1) (8.0)	底部片、胴部下端は外面へラケズリ、内面へラケズリ。底部の外面は本墨色。	石英、長石、 チャート、白色 粒	7.5YR5/4に5黄褐 / 10YR6/4に5黄褐	酸化赤 良好	④区覆土
8	土師器 罎	(20.6) (9.2)	口縁部～胴部片、口縁部は外面横ナズ。胴部は外面へラケズリ、内面は口縁部～胴部にかけて横ナズ。	雲母、石英、長 石、チャート、白色 色粒	5YR5.0明赤褐 / 5YR4.6赤褐	酸化赤 良好	④区覆土、 カマド
9	土師器 甕	26.8 8.9 22.3	ほぼ完形。口縁部と底部の一部を欠損。口縁部は内外面横ナズ。胴部は外面へラケズリ、内面は縦位のへラケズリ後、丁寧なくさき。	雲母少量、長 石、黒色粒	7.5YR6.0褐 / 5YR4.6赤褐	酸化赤 良好	④区覆土
10	土師器 甕	(36.2) 20.2 10.0	口縁部～底部、90%存。口縁部は内外面横ナズ。胴部の外面は上半が横位のへラケズリ、下半は縦位のへラケズリ、内面はへラケズリ後くさき。	雲母、長石西 量、白色粒	7.5YR5/3黄褐 / 7.53R3/1黒	酸化赤 良好	④区 覆土下層
11	土師器 甕	(20.8) 16.4 (10.0)	口縁部～底部、40%存。口縁部は内外面横ナズ。胴部は外面へラケズリ、内面はへラケズリ後丁寧なくさき。	雲母、石英少 量、長石	7.5YR6.0褐 / 7.53R6/4に5黄褐	酸化赤 良好	④区覆土 下層
12	土製品 文箱	—	完形。長さ：16.8cm、径：6.4～7.9cm、重量：798.6g。肉厚部がやや広がる。裏面より調整は不明だが、向状に調整した可能性あり。	—	—	—	カマド

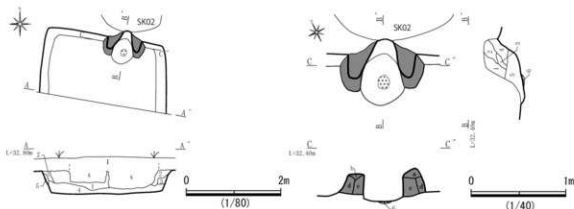
S102 (第10図、第6表、写真図版3・9)

検出位置は1区中央のA18グリッドである。南側約半分が調査区外にあるため正確な形状や規模は把握できなかったが、検出された部分から平面形は方形と考えられる。規模は東西軸で2.68m、南北軸は現存値で1.43mを測り、主軸方向はN-7°-Eを示す。壁は外傾して立ち上がり、残存する壁高は38cmである。覆土は5層に分層された自然堆積であるが、カマド前面が上層から中層にかけて大きく攪乱を受けていた。床面はほぼ平坦であるが、壁際が若干高めである。顕著な硬化面は認められず、壁溝、貯蔵穴及び支柱穴等のピットは検出されなかった。掘り方は中央部が高く残り、東西壁際が深く掘り下げられ、北東隅は特に広い範囲で掘り下げが行われている。カマドは北壁の中央やや東寄りにつ設され、煙道部は壁を17cm掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部にかけての全長が71cm、袖部の最大幅は89cm、袖部の構築材には白い灰黄褐色粘質土と暗褐色土との混土で、粘質土の含まれる量が非常に少なかった。火床部は長さ56cm、幅44cm、深さ6cm程の楕円形で、中央部が大きく掘り窪められた中にわずかな赤変硬化の痕跡を確認した。

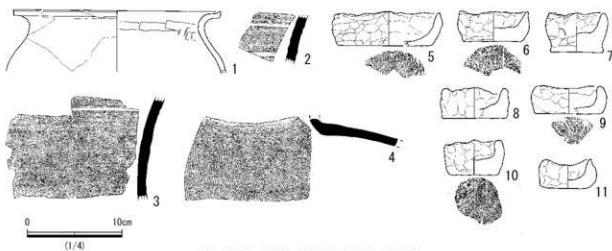
遺物は、68点・2,679gが出土した。土器は土師器23点、須恵器も23点である。土師器は坏類が1点のみの出土で、甕類がほとんどである。須恵器も坏類は2点のみで、甕類の破片が主体である。出土した甕類の全てが同一個体であるが、ほとんど接合できなかった。土器以外では手捏土器が12点まとまって出土しているのが特徴的である。いずれも上層での出土が多いが、大きく攪乱された部分と重複するため出土位置は不明瞭である。1は土師器甕で、胴部が張り、口縁部は強く屈曲して口唇部につまみ上げが認められる。

2～4は須恵器甕の同一個体である。2・3は沈線間に刺突が施されており、その調整技法や精良な胎土から湖西産と考えられる。5～11は手捏土器で、形態は多様である。5はこの中で最も大型で、口唇部に窪みが認められることから、柄杓として利用されたものであろうか。いずれも底部は平底であるが、11はやや丸みを持っている。底部の外面は木葉痕が施されたものが多い。

以上のように、土師器・須恵器ともに坏類が細片で図示できず、須恵器甕も接合されないため形態が不明瞭である。その中で、土師器甕口唇部の形態や手捏土器が供伴することから推定される時期は、7世紀後葉～8世紀中葉の範疇と考えられる。



- S102
- |   |               |                                 |                                  |                        |
|---|---------------|---------------------------------|----------------------------------|------------------------|
| 1 | 2.5YR3/2 黒褐色土 | ローム粒 (中量)                       | ロームブロック (φ2～3mm中量)               | 炭化物粒 (微量) 含む、縞りあり、粘性弱。 |
| 2 | 5YR3/3 暗褐色土   | ロームブロック (φ2～3mm中量) 含む、縞りあり、粘性弱。 |                                  |                        |
| 3 | 5YR4/3 褐色土    | ローム粒 (中量)                       | ロームブロック (φ2～3mm中量) 含む、縞りあり、粘性弱。  |                        |
| 4 | 2.5YR3/3 暗褐色土 | ローム粒 (多量10%)                    | ロームブロック (φ2～3mm少量) 含む、縞りや中量、粘性弱。 |                        |
| 5 | 2.5YR3/4 暗褐色土 | ローム粒 (多量10%)                    | ローム小～中ブロック (少量) 含む、縞りや中量、粘性弱。    |                        |
- S103
- |    |               |  |  |  |
|----|---------------|--|--|--|
| 1  | 5YR4/2 灰褐色土   | ローム粒 (微量) 含む、縞りや中弱、粘性ややあり。                                     |  |  |
| 2  | 5YR5/2 灰褐色土   | シルト質土、焼土粒 (少量)、焼土ブロック (φ15mm微量)、白色粒 (微量) 含む、縞りや中弱、粘性あり。        |  |  |
| 3  | 5YR5/3 褐色土    | シルト質土、炭化物粒 (微量) 含む、縞りや中弱、粘性あり。                                 |  |  |
| 4  | 5YR4/3 褐色土    | シルト質土、ロームブロック (φ2～3mm微量)、焼土粒 (微量)、炭化物粒 (微量) 含む、縞りあり、粘性ややあり。    |  |  |
| 5  | 5YR4/2 灰褐色土   | ロームブロック (φ2～3mm少量)、焼土ブロック (φ2～3mm少量、φ10mm前後少量) 含む、縞りあり、粘性ややあり。 |  |  |
| 6  | 5YR4/3 褐色土    | 焼土、縞りあり、粘性なし。  |  |  |
| 7  | 5YR4/3 褐色土    | ロームブロック (φ2～3mm多量10%)、φ10mm微量) 含む、縞りあり、粘性弱。                    |  |  |
| 8  | 5YR4/2 灰褐色土   | シルト質土、白色粒 (微量) 含む、縞りあり、粘性あり。                                   |  |  |
| 9  | 10YR5/2 灰黄褐色土 | シルト質土、焼土 (少量) 含む、縞りあり、粘性あり。                                    |  |  |
| 10 | 10YR5/2 灰黄褐色土 | シルト質土と褐色土の混土、縞りあり、粘性あり。  |  |  |



第10図 S102 遺構及び遺物実測図

第6表 S102 遺物観察表

図版番号	種類 器種	目録 器表 記述	目録・残存率・調整技法等	胎土	色調 (外表面/内面)	焼成	出土位置
1	土器部 —	(22.49 16.5)	口縁部一側削片。口縁部は内外面横ナズ。胴部の外面ナズ。内面の胴部へ クズリ、胴部ナズ。	雲母、石英、長 石	7.5385/21.251黄褐色 10385/21.251黄褐色	焼成度 良好	層土上層
2	須恵器 埴	(3.1)	胴部片。貫数の辻線を芯らせ、沈線間に斜状の刺突を連続させる。胴西 面。3・4と同一体。	黒色粒	2.537/28黄 2.537/28黄	還元炎 煎焼	層土上層
3	須恵器 埴	(10.6)	胴部片。沈線を芯らせ、沈線間に斜状の刺突を連続させる。胴西面。2・ 4と同一体。	石英粒。黒色 粒	2.5367/18灰 2.537/18白	還元炎 煎焼	層土上層
4	須恵器 埴	(2.7)	胴部片。外面ツツキ。一部に煤付着。内面ナズ。一部に煤付着。胴西面。 2・3と同一体。	石英粒。黒色 粒	2.537/18白 2.537/28黄	還元炎 煎焼	層土上層
5	土製品 平粋土器	(11.22 3.5 10.0)	90%存。外面指頭による整形。内面指頭による横ナズ。底部は平底で外面 には木葉痕。	雲母粒。石英 少量、長石	10386/41.251黄褐色 7.5385/41.251黄褐色	還元炎 普通	層土上層
6	土製品 平粋土器	(7.22 3.2 6.1)	90%存。外面指頭による整形。底部は平底で外面には木葉痕。	雲母粒。石 英。白色粒、長 石	10386/41.251黄褐色 7.5385/41.251黄褐色	還元炎 普通	層土上層
7	土製品 平粋土器	(5.7) 4.2 5.7	90%存。外面指頭による整形。底部は平底で外面には木葉痕。	石英、長石、 白色粒	5385/48赤褐色 5384/6赤褐色	還元炎 普通	層土上層
8	土製品 平粋土器	(6.4) 3.2 (7.0)	90%存。内外面指頭による整形。底部は平底。	石英、長石少 量、白色粒、雲 母粒	10386/41.251黄褐色 10385/21.251黄褐色	還元炎 普通	層土上層
9	土製品 平粋土器	(6.7) 2.9 (7.0)	20%存。内外面指頭による整形。口縁部は指頭による横ナズ。底部は平底 で外面には木葉痕。	石英、長石、 白色粒	7.5385/41.251黄褐色 7.5385/41.251黄褐色	還元炎 普通	層土上層
10	土製品 平粋土器	5.2 3.7 5.2	ほぼ完全。内外面指頭による整形。底部は平底で外面には木葉痕。	雲母、長石	10386/41.251黄褐色 7.5385/41.251黄褐色	還元炎 普通	層土上層
11	土製品 平粋土器	4.2 3.2 4.9	完全。内外面指頭による整形。底部は平底だが丸底気味。	雲母、石英、 黒小粒	10387/41.251黄褐色 7.5385/21.251黄褐色	還元炎 普通	層土上層

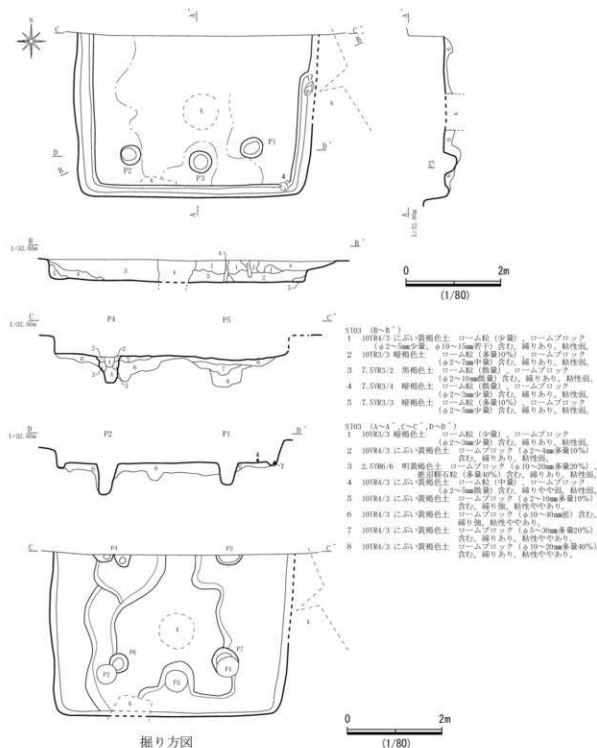
## S103 (第11・12図、第7表、写真図版3・10)

検出位置は、1区西側のA15・16グリッドである。北側が調査区外にあるため正確な形状や規模は把握できないが、検出された部分や支柱穴の配置等から平面形状は方形と考えられる。規模は東西軸で5.06m、南北軸は現存地で3.40mを測り、主軸方向はN-0°で真北を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存する壁高は40cmで、覆土は5層に分層された自然堆積で、東壁側は覆土等の影響を受けた層の乱れが認められ、床面まで達していた。床面は平坦で、東西の壁際を除く中央部に顕著な硬化面が広がる。壁溝はほぼ全周していると考えられ、断面U字状で幅は25～30cm、深さ6～9cm程である。ピットは3本が検出され、支柱穴はP1・2の2本が相当する。P1は径50×32cm、深さ68cm、P2は径37×33cm、深さ47cmである。P3は南壁寄りの中央部にあり、径48～44cm、深さ27cmで、配置から出入り施設に伴うピットと考えられる。掘り方は中央部を高くし、東西壁際を深めに掘り込んでいた。P4・5は大部分が北側調査区外へ延びているため床面精査時には認められなかったが、貼り床を除去した段階で確認され、北側の支柱穴と考えられる。P1・2の内側でも貼り床下に柱穴が検出され、支柱穴の付け替えが行われた住居跡であることがわかった。P4・5の周囲でも掘り方が広めにとられていることから、同様の行為が行われたものと考えられる。貯蔵穴及びピットは検出されなかったが、P4・5間中央の床面にカマドの構築材と思われる灰褐色粘質土が付着していたことから、調査区外の近至にカマドが存在する可能性が高い。

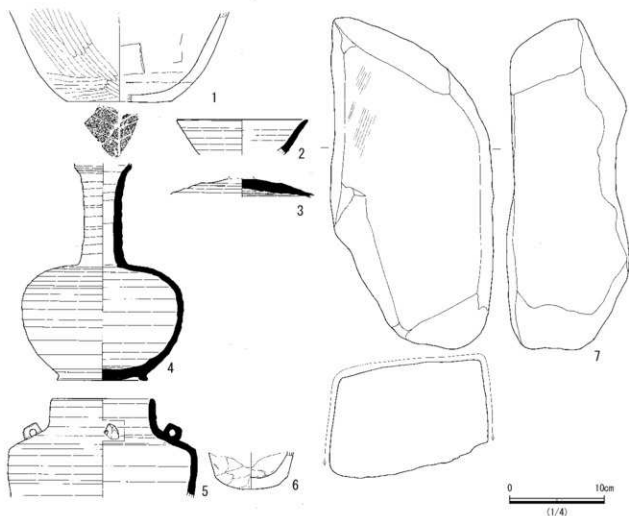
遺物は、64点・13,040gが出土した。土器は土師器が55点で、その内環類は9点、甕・壺類は46点である。須恵器は5点のみであるが、壺類の出土が目を引く。1は土師器甕で、胴部下半に密なミガキが施され、常総甕の特徴が認められる。2は須恵器杯の口縁部片、3は蓋の天井部である。いずれも胎土に雲母を含み、焼成不良の状態から、新治窯の所産と考えられる。4の長頸壺は、南東隅に転倒した状態で出土した。肩部に丸みがある形態で、頸部内面はクロク目がほとんど認められない。5の短頸壺は耳を有し、頸部が若干長

めである。4・5とも精良な胎土から湖西産と考えられる。6の手捏土器は底部が丸底を呈している。7は大型の磁石で、東壁際の床面から出土し、据えられた状態で使用されたとみられる。

出土した遺物から推定される時期は、2の須恵器杯は底径が小さ目になることが推定され、8世紀中葉以降と考えられるが、壺類の形態が若干古相を示すため、8世紀前葉～中葉まで時期を広げて考える必要があるだろう。



第11図 S103 遺構実測図



第12図 S103 遺物実測図

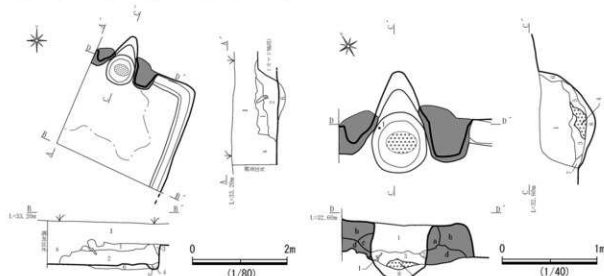
第7表 S103 遺物観察表

図面番号	種類 器種	目録 図名 底径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 甕	(9.5) (11.6)	胴部～底部片。胴部の外面は密な縦位のミガキで下部は横位のミガキ。内面はヘラナシ。底部の外面は本葉筋。	雲母、石英多量、長石多量	7.0YR4/3黒 / 10YR3/2黒褐色	酸化炭 良好	②区様土 下層
2	須色器 片	(13.7) (9.7)	臼縁部～体部片。ロケロ整形。	雲母、石英微量、微小礫少量	10YR6/2に赤・黄褐色 / 10YR6/2に黄褐色	還元赤 不良	②区様土 下層
3	須色器 蓋	(1.8)	楕円蓋穴瓶。ロケロ整形。天井部の外面は同形ヘラケズリ。	雲母、長石、黒色粒	10YR8/1に白 / 2.0Y7/2に黄	還元赤 不良	②区様土 下層
4	須色器 長頸蓋	(20.6) (9.5)	90%存。臼縁部と胴部の一部を欠損。ロケロ整形。胴部には自然釉が分かる。底部は爪底で同形ヘラケズリ。高台部は貼り付け後ナシ。胴西面。	黒色粒、白色粒、石英微量	2.0Y7/2に黄 / 2.0Y6/3に黄褐色	還元赤 明黒	②区様土 下層
5	須色器 短頸蓋	(10.5) (9.4)	臼縁部～体部片。ロケロ整形。胴部に後数の耳を持つ。臼縁部～胴部の外面に自然釉が分かる。胴西面。	黒色粒、石英微量	2.0Y6/3に黄褐色 / 2.0Y6/3に黄褐色	還元赤 明黒	①区様土 下層
6	土製品 手捏土器	(5.8)	体部～底部。40%存。外面はヘラケズリ。内面は指頭による整形。	石英少量、白色粒	7.0YR4/2に黒 / 7.0YR2/1黒	酸化炭 普通	②区様土 下層
7	石製品 板石	完形、長さ：35.0cm、幅：17.0cm、厚さ：12.5cm、重量：10.9kg、石材：安山岩、磨り面は2面、その内1面は良く使用される。					②区様

S104 (第13・14図、第8表、写真図版3・10)

検出位置は、4区西端のJ11グリッドである。北西側と南西側が調査区外にあるため正確な形状や規模は把握できないが、検出された部分から平面形は方形と考えられる。規模は現存地で東西軸が2.41m、南北軸が2.12mを測り、主軸方向はN-22°-Eを示す。壁は垂直に立ち上がり、残存する壁高は43cmで、覆土は5層に分層された自然堆積である。床面は平坦で、カマドの前面で顕著な硬化面が広がる。壁溝はほぼ全周しているとみられ、断面U字状で幅は24~28cm、深さ6~8cm程である。貯蔵穴等や主柱穴等のピットは検出されなかった。掘り方は中央部を高く残し、東壁際を深めに掘り込み、隅際は特に深く掘り下げられていた。カマドは北東壁に付設され、煙道部は壁を53cm掘り込んでいるが、逆に袖部は、壁から30~40cm程度と短めである。規模は焚口部から煙道部までの全長が106cm、袖部の最大幅は現存地から137cmである。袖部の構築材は褐灰色粘質土と砂質土の混土が用いられている。火床部は長さ64cm、幅57cm、深さ8cm程の楕円形で浅く掘り窪められ、焼土が堆積した底面は赤変硬化していた。

遺物は、124点・3,662gが出土した。土器は土師器が109点、須恵器が13点である。土師器は坏類が3点のみで、それ以外は甕が圧倒的に多く、甕はほとんど認められない。須恵器は逆に坏類が主流である。1~9は土師器甕で、いずれも口唇部に揃み上げ技法が認められ、雲母を含むなど胎土が類似する。1~3は胴部が張る形態で、1は胴部下半にまばらではあるが、縦位のミガキが施されている。4~8は頭部の屈曲が強まる一方で胴部の張りが弱まる形態のものである。9の胴部下端にもミガキが認められることから、本跡で出土する土師器甕は常態甕が主体であることがわかった。10・11は須恵器坏の口縁破片である。11は形態から高台が付けられていた可能性がある。12・13の須恵器甕胴部の破片は、雲母を含む胎土で新治楽の所産と考えられ、12は焼成がかなり不良である。

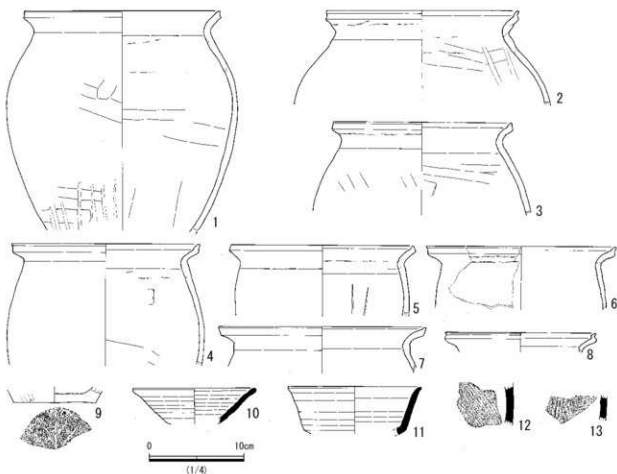


- S104
- 1 2.03R3/4 暗褐色土 ローム粘 (少量)、ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む、締りあり、粘性弱。
  - 2 2.03R3/3 暗褐色土 ローム粘 (少量)、ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む、締りあり、粘性弱。
  - 3 10.0R4/3 に赤い黄褐色土 ローム土 (多量40%) 含む、締りあり、粘性全くなり。
  - 4 10.0R3/2 暗褐色土 ローム粘 (多量10%)、ロームブロック (φ2~5mm多量10%) 含む、締りあり、粘性弱。
  - 5 10.0R4/2 に赤い黄褐色土 ロームブロック (φ5~20mm少量) 含む、締りあり、粘性弱。
  - 6 10.0R5/2 に赤い黄褐色土 ロームブロック (φ10~50mm少量) 含む、締り強、粘性あり。
- S104 台
- 1 2.03R4/1 黄褐色土 シルト質土、ローム粘 (少量)、焼土粒 (微量)、炭化物粒 (微量) 含む、締りあり、粘性あり。
  - 2 2.03R4/2 灰褐色土 シルト質土、焼土粒 (微量) 含む、締りあり、粘性あり。
  - 3 2.03R4/3 灰褐色土 シルト質土と焼土の混土、ローム (微量)、焼土ブロック (φ2~5mm微量) 含む、締りやや弱、粘性ややあり。
  - 4 03R4/9 赤褐色土 焼土質、灰褐色土 (中量) 含む、締りやや弱、粘性なし。
  - 5 2.03R4/4 褐色土 焼土粒 (少量)、焼土ブロック (φ2~5mm少量)、ロームブロック (φ2~5mm多量10%) 含む、締り弱、粘性弱。
  - 6 2.03R4/2 灰褐色土 ロームブロック (φ2~5mm少量)、焼土ブロック (φ5~20mm多量10%) 含む、締りあり、粘性弱。
  - 7 2.03R3/2 暗褐色土 ロームブロック (φ5~10mm少量) 含む、締りあり、粘性弱。
  - 8 2.03R4/3 暗褐色土 ロームブロック (φ5~10mm多量20%) 含む、締り弱、粘性弱。
  - 9 10.0R3/2 灰褐色土 シルト質土、ロームブロック (φ2~5mm少量)、焼土粒 (微量) 含む、締りあり、粘性ややあり。
  - a 10.0R3/1 褐色土 シルト質土、ロームブロック (φ2~5mm少量)、白色ブロック (φ2~5mm微量) 含む、締り強、粘性あり。
  - c 10.0R4/2 灰褐色土 シルト質土、ロームブロック (φ2~10mm少量)、焼土 (中量) 含む、締りあり、粘性ややあり。
  - d 10.0R4/1 褐色土 シルト質土、ロームブロック (φ5~10mm多量10%)、焼土ブロック (φ5~10mm少量) 含む、締りあり、粘性あり。

第13図 S104 遺構実測図



須恵器環の10は9世紀代前半、12はそれより古相を示すことから、本跡の推定される時期は、9世紀初頭～中葉の可能性がある。



第14図 S104 遺物実測図

第8表 S104 遺物観察表

図面 番号	種類 器種	口縁 部高 径径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 甕	(20.5) (23.2)	口縁部～胴部、40%存。口縁部は内外面横ナデ。胴部の外面は上半がヘラケズリ、下半がヘラケズリ後まばらなミガキ。内面は上半が横位のヘラナデ、下半が縦位のヘラナデ。	雲母、石英、長石	7.5YR5/2(5.1)焼 / 7.5YR4/2(6)焼	酸化表 良好	礎土 カマド
2	土師器 甕	(20.49) (10.4)	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナデで、外面には輪轆痕が残る。胴部は内外面はヘラナデ後まばらなミガキ。	雲母、石英、長石	7.5YR6/6(焼) / 7.5YR6/4(12.5)焼	酸化表 良好	礎土 カマド
3	土師器 甕	(18.6) (10.4)	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナデで、外面には輪轆痕が残る。胴部は内外面はヘラナデ。	雲母、石英、長石	7.5YR5/4(12.5)焼 / 7.5YR5/4(12.5)焼	酸化表 良好	礎土 方
4	土師器 甕	(19.8) (12.9)	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナデ。胴部の外面はナデか、内面はヘラナデ。	雲母、石英、長石	5YR5/4(12.5)赤焼 / 10YR4/2(6)黄焼	酸化表 良好	礎土 カマド
5	土師器 甕	(18.2) (7.5)	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナデで、内面に輪轆痕が残る。胴部の外面はナデか、内面はヘラナデ。	雲母、石英少 量、長石	7.5YR6/4(12.5)焼 / 7.5YR5/4(12.5)焼	酸化表 良好	礎土
6	土師器 甕	(19.6) (6.7)	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナデで、外面には輪轆痕が残る。胴部は内外面はナデか。	雲母、石英、長石	7.5YR6/4(12.5)焼 / 7.5YR5/4(12.5)焼	酸化表 良好	礎土 カマド
7	土師器 甕	(21.6) (4.9)	口縁部片。口縁部は内外面横ナデ。	雲母、石英、長石	7.5YR5/6(9)焼 / 7.5YR5/6(9)焼	酸化表 良好	礎土
8	土師器 甕	(15.8) (2.1)	口縁部片。口縁部は内外面横ナデ。	雲母微量、石英 少量、長石	5YR4/6赤焼 / 5YR4/8赤焼	酸化表 良好	礎土
9	土師器 甕	(1.7) (8.4)	底部片。胴部下端の外面にミガキ。底部外面には木炭痕。	雲母、石英、長石	7.5YR5/4(12.5)焼 / 7.5YR3/2(暗)焼	酸化表 普通	礎土

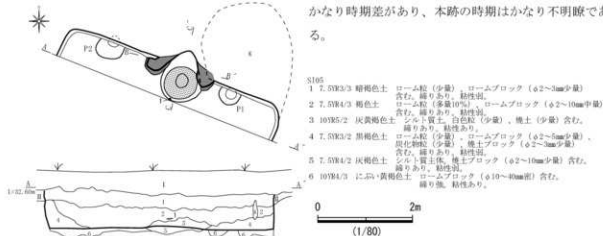
図面番号	種類 図種	白壁 部高 延び	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
10	須恵器 片	(13.2) (3.8)	白縁部-体部片。ロクロ整肌。	雲母少量、石 灰、白色粘少量	2.5Y6/1黄灰 / 2.5Y5/1黄灰	還元焼 成肌	礎土
11	須恵器 片	(14.0) (5.0)	白縁部-体部片。ロクロ整肌。	石英少量、黒色 粘	2.5Y6/1黄灰 / 2.5Y6/1黄灰	還元焼 成肌	礎土
12	須恵器 壁	(4.5)	銅版片。外面平行タタキ。	雲母多量、石英 多量	10Y6/4に2.5Y黄 / 2.5Y4/4黄粘	還元焼 成不 良	礎土
13	須恵器 壁	(2.7)	銅版片。外面異方向のタタキ。	雲母多量、黒色 粘	2.5Y6/1黄灰 / 2.5Y6/2灰黄	還元焼 成肌	礎土

### S105 (第15・16図、第9表、写真図版3・11)

検出位置は4区東側のJ12グリッドである。大部分が南西側の調査区外にあるため正確な形状や規模、床面の状態や貯蔵穴、主柱穴等ピットの有無は把握できないが、検出された部分から平面形は方形と考えられる。規模は東西軸が4.95m、南北軸が現存値で0.80mを測り、主軸方向はN-21°-Eを示す。壁は垂直に立ち上がり、残存する壁高は76cmで、覆土は4層に分層された自然堆積である。掘り方は東西壁際を深く掘り込んでいるようである。床除去の際にピットP1・2がカマドを挟んで北東壁際に検出される。ピットは半円形状で、壁外側に向けて斜めに差し込んで掘り込まれている。P1は径46×20cm、深さ55cm、P2は径67×40cm、深さ47cmになり、規模から主柱穴とする見方も可能であるが、住居跡全体の検出がわずかであるため確実ではない。カマドは北東壁の中央部に付設され、煙道部は壁を38cm掘り込んでいる。焚口部から煙道部までの全長は112cm、袖部の最大幅は152cmである。袖部の構築材にはがしい黄褐色粘質土と砂質土の混土で、砂質土の割合が高めである。そのため流失したのであろうか、壁から28～40cm程が残存するのみであった。火床部は長さ77cm、幅87cm、深さ10cm程の円形で掘り窪められ、焼土主体の層が堆積しており、わずかに赤変硬化した部分が確認された。

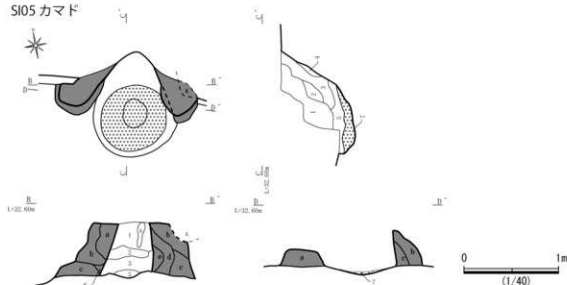
遺物は、69点・1,975gが出土した。土器のみで、土師器が52点、須恵器が17点である。土師器は坏類が6点、甕類が46点、須恵器は坏類が7点、甕類が8点のほか、蓋が2点出土した。1の土師器の高台付坏は2層から出土する。須恵器の高台付坏同様ロクロ整形であるが、内面に丁寧な黒色処理が施されている。2の土師器甕は、常総甕特有の縦位のミガキが認められる。3・4は須恵器坏であるが、4は胎土に雲母が含まれず、口縁部が大きく外反する器形は搬入品であろうか。5・6の蓋は出土した2点すべてを図示したが、こちらも胎土に雲母が認められない。

1の土師器坏と3の須恵器坏の形態からみると、8世紀代前葉から9世紀代前葉の範疇で捉えられるが、かなり時期差があり、本跡の時期はかなり不明瞭である。



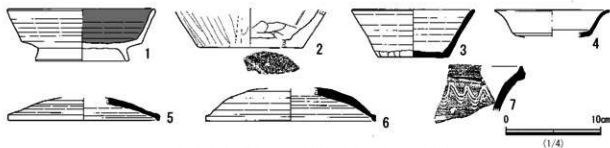
第15図 S105遺構実測図(1)

S105 カマド



S105 カマド

- 1 1035/4 に近い黄褐色土 砂質土、ロームブロック (φ10mm前後微量) 焼土ブロック (φ10mm前後微量) 含む。締りあり、粘性ややあり。
- 2 1035/4 に近い褐色土 砂質土・焼土の混土。焼土ブロック (φ5~7mm少量) 含む。締りあり、粘性ややあり。
- 3 1035/4 に近い黄褐色土 砂質土。ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む。締りあり、粘性ややあり。
- 4 7.5385/4 に近い褐色土 砂質土、ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む。締りあり、粘性弱。
- 5 7.5382/2 黄褐色土 砂質土・焼土の混土。焼土ブロック (φ2~5mm少量) 含む。締りあり、粘性弱。
- 6 7.5384/4 褐色土 ロームブロック (少量)、ロームブロック (φ2~10mm少量) 含む。締りやや弱、粘性弱。
- 7 5384/4 多量褐色土 焼土ブロック主体。締りあり、粘性弱。
- a 7.5385/4 に近い褐色土 ロームブロック (φ2~7mm多量10%)、焼土粒 (少量)、焼土ブロック (φ2~3mm少量) 含む。締りあり、粘性あり。
- b 1035/3 に近い黄褐色土 ロームブロック (φ2~7mm多量10%) 含む。締りあり、粘性あり。
- c 1035/3 に近い黄褐色土 砂質土、ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む。締りあり、粘性ややあり。
- d 7.5385/3 に近い褐色土 砂質土、ロームブロック (φ2~5mm少量)、焼土粒 (微量) 含む。締りあり、粘性ややあり。
- e 5384/2 に近い黄褐色土 砂質土・焼土の混土。締りあり、粘性ややあり。
- f 7.5384/2 褐色土 砂質土、ローム粒 (多量10%)、ロームブロック (φ2~5mm多量10%) 含む。締りあり、粘性ややあり。



第16図 S105 遺構実測図(2)及び遺物実測図

第9表 S105 遺物観察表

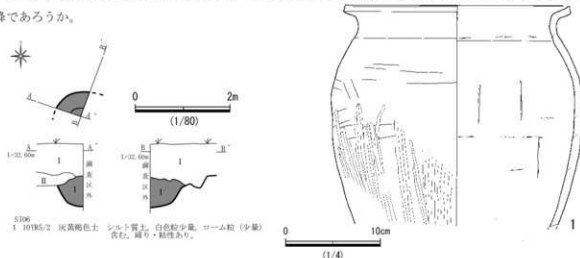
図面番号	種類 部様	口径 高さ 底径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 高台付杯	15.4 10.0 5.5	白縁部～底面、90%存。白縁部の一部欠損。内面は黒色処理。コクロ壺形。底面は凹溝ヘラケズリ。高台部は貼り付け板ナゲ。	雲母、石英微量、針状物微量、砂粒	7.5386/6焼 / 7.5382/1焼	還元系 良好	埋土
2	土師器 椀	(4.1) (10.8)	底面片、胴部下縁の外縁は縦位のミガキ。内面はヘラナゲ。底面の外縁には木炭痕。	雲母、石英、長石	7.5384/3焼 / 7.5386/6焼	還元系 良好	埋土
3	煎茶器 杯	(12.8) 5.0 (7.0)	白縁部～底面、30～40%存。コクロ壺形。胴部下縁及び底面の外縁は半円ヘラケズリ。	雲母、石英、長石、黒色粒	N5 / 灰 / 536/1灰	還元系 煎焼	埋土
4	煎茶器 杯	(12.0) (2.4)	白縁部～底面片。コクロ壺形。底面外縁は凹溝ヘラケズリ。	石英、針状物	2.534/1灰 / 534/1灰	還元系 煎焼	埋土
5	煎茶器 椀	(15.8) (2.4)	天弁部～白縁部。コクロ壺形。天弁部は凹溝ヘラケズリ。白縁部は凹溝・垂下。	石英、黒色粒	536/1灰 / 536/1灰	還元系 煎焼	埋土
6	煎茶器 椀	(17.8) (3.5)	天弁部～白縁部。コクロ壺形。天弁部は凹溝ヘラケズリ。白縁部は凹溝・垂下。	石英、チャーン、白色粒	536/1灰 / 533/1灰	還元系 煎焼	埋土
7	煎茶器 椀	(4.0)	胴部片。外縁は横ナゲ後状板織文。	雲母多量、黒色粒少量、砂粒	537/1灰 / 536/1灰	還元系 煎焼	埋土

S106 (第17図、第10表、写真図版4・11)

検出位置は4区東端のK12グリッドである。カマドの構築材となる灰黄褐色粘質土がわずかに検出され、遺物を伴っていたため、住居跡全体が南側の調査区外に存在すると判断した。それ以外の詳細は不明である。

遺物は、土師器甕1点・717gのみの出土である。1がカマド構築材中に破片が重なって出土している。口唇部にわずかなつまみ上げが認められ、胴部下半には縦位のミガキが施された常総甕である。

推定される時期は、遺構の全体が見えず、出土遺物1点のみで推定するのは困難であるが、8世紀後半以降であろうか。



第17図 S106 遺構及び遺物実測図

第10表 S106 遺物観察表

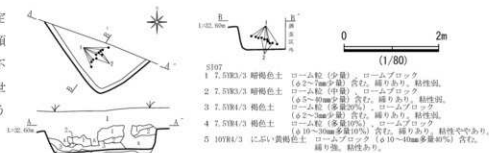
調査番号	種類 図番	口径 器高 器径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色層 (外層/内層)	構成	出土位置
1	土師器 甕	(21.8) (23.4)	口縁部～胴部、30～40%存。口縁部は内外面横ナズ。胴部は外面上半が横位のヘラナズ、下半はヘラナズ後縦位のミガキ。内面は縦位のヘラナズ。	栗目、石英、長石	7.5YR5/2に濃い焼 7.5YR5/4に5A焼	酸化赤 良好	カマド

S107 (第18・19図、第11表、写真図版4・11)

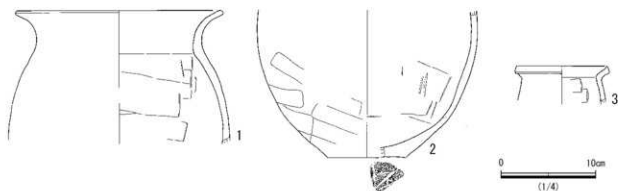
検出位置は4区北東側のJ11グリッドである。南隅の検出で大部分が北側の調査区外にあり、正確な形状や規模、床面の状態や貯蔵穴、支柱穴等ピットの有無は把握できないが、検出された部分から平面形は方形と考えられる。主軸方向はN-52°-EあるいはN-38°-Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存する壁高は45cmで、覆土は4層に分層された自然堆積である。

遺物は、24点・1,007gが出土した。土師器は21点で南西壁際から流れ込む形で出土した甕類が主体である。須恵器は甕類の破片が3点認められる。1・2の土師器甕は同一個体で、1の口縁部はつまみ上げが認められず、2の胴部にはヘラケズリの調整である。3の土師器甕は小型で、口唇部はわずかにつまみ上げられている。

出土遺物から推定される時期は、坏類が細片であるため不明瞭であるが、8世紀後半以降であろうか。



第18図 S107 遺構実測図



第19図 S107 遺物実測図

第11表 S107 遺物観察表

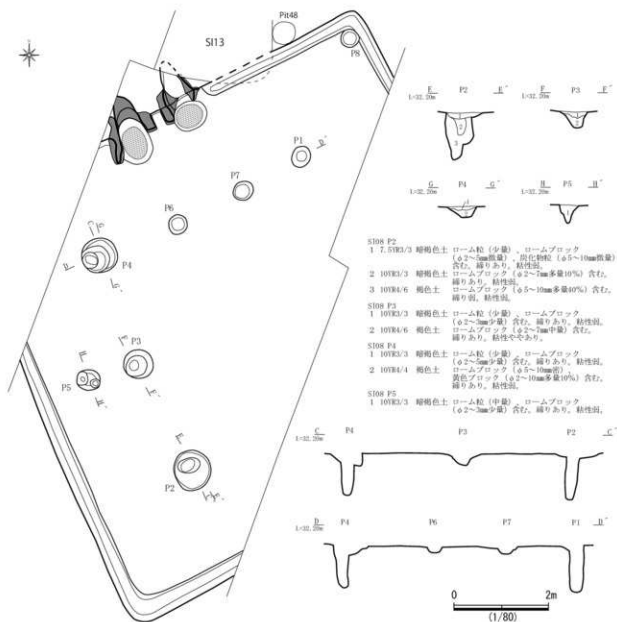
調査番号	種類 部類	口径 器高 底径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外・内面)	焼成	出土位置
1	土師器 甕	(21.5) (14.1) —	口縁部～胴部、20%存。口縁部は内外面横ナズ。胴部は内外面ヘラナズ。2	雲目肌土、石 灰、長石	7.5YR6/4暗 10YR6/4に5Y黄緑	酸化赤 普通	礎土
2	土師器 甕	— (15.4) (8.4)	胴部～底面、20～30%存。胴部の外面はヘラナズ、内面はヘラナズ。底部の外面には本業肌。1と同一個体。	雲目肌土、石 灰、長石	7.5YR4/2暗 10YR6/4に5Y黄緑	酸化赤 普通	礎土
3	土師器 甕	(9.3) (6.1)	口縁部～胴部、20%存。口縁部は内外面横ナズ。胴部は内面ヘラナズ。	雲母、石英、砂 礫	5YR4/3に5Y赤褐 7.5YR4/4暗	酸化赤 良好	床

S108 (第20～24図、第12表、写真図版4・11～14)

検出位置は6区ほぼ中央のG9・10、H10グリッドである。S113とわずかに重複し、北西壁の一部と東側カマドの煙道部が切られていた。住居跡の北西隅と南東側が調査区外にあるが、検出された部分から平面形状は方形と考えられる。規模は推定で東西軸が10.00m、南北軸が9.52mを測り、主軸方向はN-25°-Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存する壁高は51cmで、覆土は8層に分層された自然堆積である。床面は平坦で、カマド前面と南壁際の一部に顕著な硬化面が認められる以外は全体に軟弱であった。壁溝は全周するとみられ、断面U字状で幅は28～34cm、深さ2～5cm程である。貯蔵穴は検出されなかった。ピットは8基で、主柱穴はP1・2・4が相当し、南東側の1基は調査区外にあると考えられる。柱径の規模は、P1が径46×38cm、深さ100cmで周囲に径70cm前後の掘り方を持つ。P2が径46×32cm、深さ102cmで南東側に90～110cm程の掘り方を持つ。P3が径32×31cm、深さ91cmで、北東側に70cm前後の掘り方を持つ。その他、P2・4間にあるP3は径67×65cm、深さ24cm、P1・4間にあるP6は径43×38cm、深さ15cm、P7は45×39cm、深さ16cmで、いずれも小規模になり、補助柱穴の可能性もある。掘り方は、特に深く掘り下げられた部分はなかった。カマドは北西壁の中央に付設され、2基のカマドが連なっていた。新旧関係を伴うと思われたが、土層から重複関係は認められず、同時に使用された可能性がある。ただ、両カマドの中央に短い袖部らしきものは確認したが明瞭ではなかった。東側のカマドでは煙道部を壁から60cm以上凸型に掘り込み、全体に灰褐色粘質土の構築材を充填している。煙道部の一部がS113に切られているため、焚口部から煙道部までの全長は現存値で132cm、袖部の最大幅は96cmである。袖部の構築材には、灰褐色粘質土と、灰褐色砂質土の混土で、砂質土の割合が高い。そのためか右袖部が大きく崩落し形状を留めていなかった。火床部は長さ61cm、幅72cm、深さ5cmのほぼ円形で浅く掘り窪められ、中央部が赤変硬化していた。西側のカマドは、煙道部を東側同様壁から50cm以上凸型状に掘り込み、全体に灰褐色粘質土の構築材を全体に充填している。煙道部が調査区外に延びるため、焚口部から煙道部までの全長は

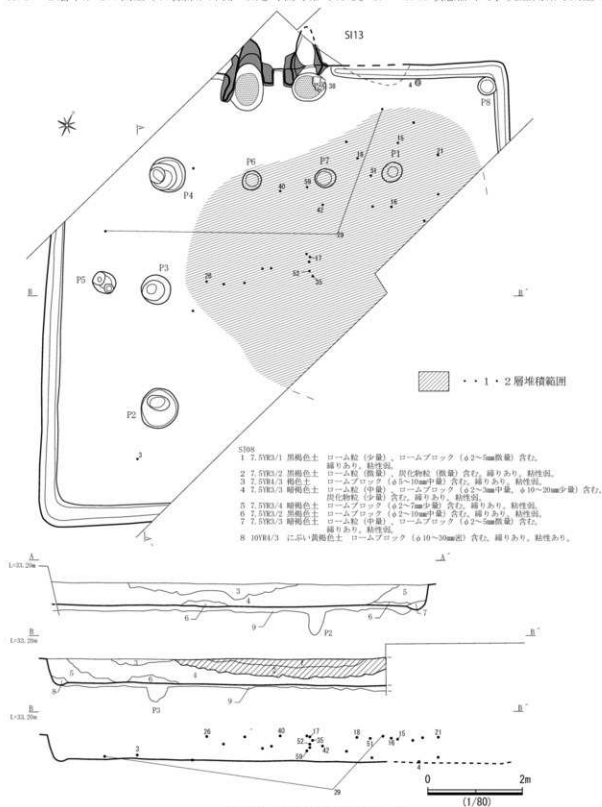
現存値で142cm、袖部の最大幅は109cmである。袖部の構築材にはぶい灰褐色粘質土とぶい黄褐色砂質土の混土が用いられ、砂質土の割合が高い。火床部は長さ68cm、幅48cm、深さ8cmの楕円形で浅く掘り窪められ、全体が赤変硬化していた。

遺物は、2,511点・57,732gが出土した。土器は土師器が主体で2,283点、須恵器は164点である。土師器は供膳具としての坏・鉢類が603点あり、他の住居跡の比へ出土数の割合は比較的高い。須恵器でも坏類や蓋の供膳具が大半を占めている。住居跡北側の覆土中から多く出土する傾向にあり、特に上層部に広がる黒褐色土を呈した1・2層に集中する。そして須恵器はほとんどがこの層からの出土である。1～25は土師器坏で、その内、1～8は須恵器模倣形態の坏であるが、大きさにばらつきが認められる。4・6は偏平形態で、4はカマド東脇の床面から出土している。9～14は無段有稜丸底形態の坏で、口径は13.5cm前後と15.0cm前後のものがある。15～17は口縁部の稜がなく開いて立ち上がり、16・17は深い器形である。18～21は同じく口縁部が開くが、中位以下に稜を持つ。22・23は平底志向の直線的に立ち上がる坏で、23



第20図 S108 遺構実測図(1)

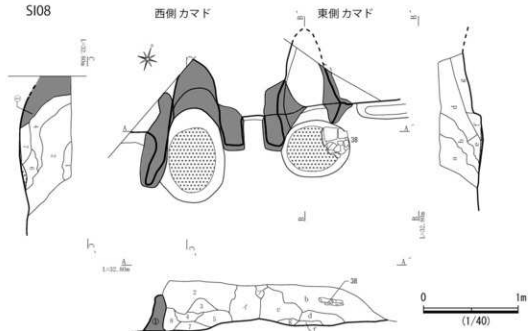
は下半にロクロ整形が認められ、本跡から出土する土師器環の中では、調整・胎土ともに異質である。24・25はかなり小型である。26～27は鉢で、26は内面が漆塗りの黒色処理が施される。29～37は土師器甕で、31～35は口縁部にわずかなつまみ上げがみられる。38・39は土師器甕で38はカマド付近からの出土、29は1・2層中からの出土で口縁部が外側へ大きく開く形である。40～45は須恵器環で、丸底気味で大型の



S108

西側カマド

東側カマド



## S108 西側カマド

- 1 土5R3/3 暗褐色土 ローム粒(少量)含む。細りあり。粘性弱。  
 2 5R3/3 に近い黄褐色土 シルト質土。ロームブロック(φ2~3mm少量)。白色ブロック(φ2~5mm散量)含む。細りやや強。粘性あり。  
 3 土5R4/2 暗褐色土 ローム粒(少量)。ロームブロック(φ2~7mm多量10%)。白色粒(散量)含む。細りあり。粘性やや弱あり。  
 4 5R4/2 灰褐色土 ロームブロック(φ2~5mm少量)。焼土粒(少量)含む。細りあり。粘性弱。  
 5 5R4/2 灰褐色土 ロームブロック(φ2~5mm少量)。焼土ブロック(φ2~7mm中量)。白色粒(少量)含む。細りあり。粘性弱。  
 6 土5R4/2 に近い赤褐色土 焼土ブロック(φ2~10mm少量)含む。細りあり。粘性弱。  
 7 土5R4/2 赤褐色土 焼土主体。細りあり。粘性弱。  
 8 土5R4/4 に近い赤褐色土 焼土と灰褐色土の混土。焼土ブロック(φ5~10mm少量)含む。細りあり。粘性弱。

## 袖部

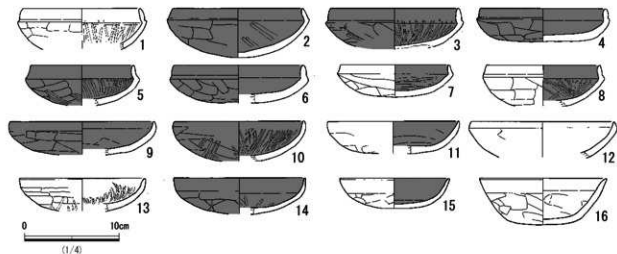
- 1) 5R3/2 灰黄褐色土 シルト質土。白色ブロック(φ2~3mm散量)含む。細りあり。粘性あり。

## 袖部の流れ

- ア 5R3/2 暗褐色土 ローム粒(少量)含む。細りあり。粘性弱。  
 イ 5R4/3 に近い黄褐色土 ロームブロック(φ2~5mm中量)含む。細りあり。粘性弱。

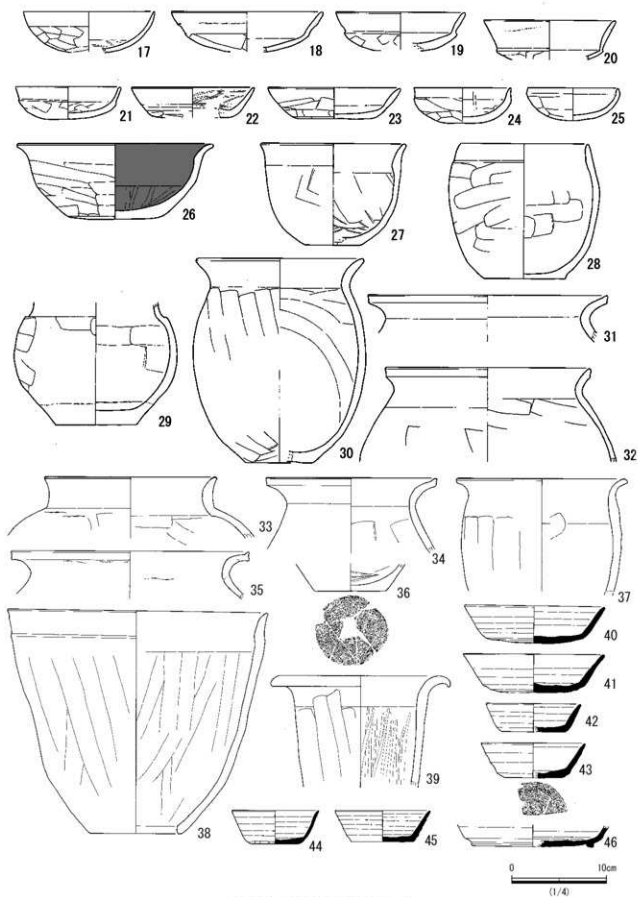
## S108 東側カマド

- a 土5R3/3 暗褐色土 ロームブロック(φ2~5mm少量)含む。細りあり。粘性弱。  
 b 土5R3/3 灰褐色土 ロームブロック(φ2~5mm散量)。焼土ブロック(φ2~10mm散量)含む。細りあり。粘性弱。  
 c 土5R4/2 灰褐色土 シルト質土と灰褐色土の混土。ロームブロック(φ2~10mm少量)。焼土ブロック(φ5mm前後散量)含む。細りあり。粘性あり。  
 d 5R3/3 暗褐色土 焼土ブロック(φ2~7mm中量)。白色粒(中量)。白色ブロック(φ2~5mm少量)含む。細りあり。粘性弱。  
 e 5R4/3 に近い赤褐色土 シルト質土と赤褐色土の混土。焼土ブロック(φ2~7mm中量)含む。細りあり。粘性弱。  
 f 5R4/3 赤褐色土 焼土主体。焼土ブロック(φ5~10mm多量20%)含む。細りあり。粘性弱。  
 g 土5R4/2 灰褐色土 シルト質土。ロームブロック(φ2~10mm少量)。焼土ブロック(φ5~10mm散量)含む。細りあり。粘性やや弱あり。



第22図 S108 遺構実測図(3)及び遺物実測図(1)

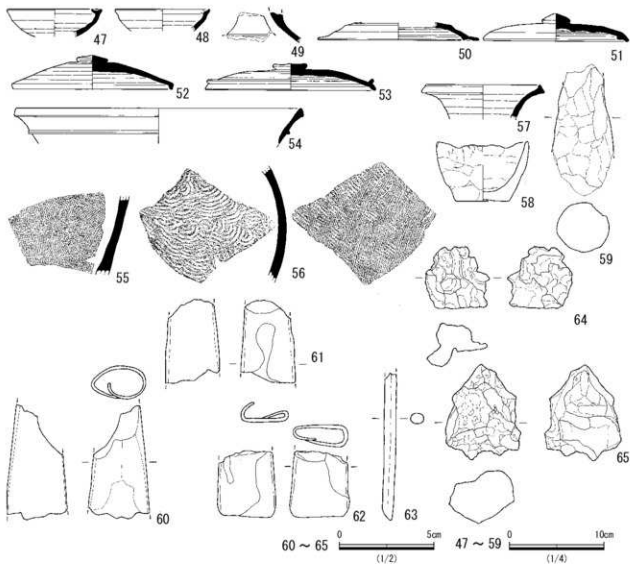




第23図 S108 遺物実測図(2)

40・41と小型の42～45がある。46は須恵器盤の底部片で、丸底気味の底部に、低めの高台が貼り付けられる。47・48は須恵器坏身の口縁部片で、同一個体とみられる。49は須恵器高坏脚部の小破片である。50～53は須恵器蓋で、50・51は口縁部内面にかえりを持つ。56は横瓶の体部片で、外面は平行タキ後に縦位のカキメ、内面は同心円状の当て具が施されている。

以上の出土遺物を見ると、時期に差異のある土器が混在する。新相の土器群はほぼ1・2層中から出土しているのに対し、3・4の土師器坏が床面から出土していることから、床面出土の遺物を重視して、本跡の推定される時期は7世紀後葉と考えられる。



第24図 S108 遺物実測図(3)

第12表 S108 遺物観察表

調査番号	種類 器種	口径 高さ 底径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外面/内面)	物産	出土位置
1	土師器 庄	(12.2) (4.4) —	口縁部～体部、20%存。口縁部は内外面横ナデ。体部の外面はヘラタズリ、内面は放射状のヒガキ。	長石、黒色粘	7.5W7/4に濃い黄緑 / 7.5W2/4に濃い黄緑	酸化赤 良好	①区層土 下層
2	土師器 庄	(13.6) (5.2) —	口縁部～体部、40%存。内外面流塗りの赤色地肌で外面は割落少、口縁部は内外面横ナデ。体部の外面はヘラタズリ、内面は並ばらなヒガキ。	黄母、石英	10R5.5に濃い黄緑 / 7.5W3/2赤褐色	酸化赤 良好	②区層土 上層

図面番号	種別 名称	口縁部 高さ 底径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外面/内面)	地成	出土位置
3	土師器 杯	13.5 (4.3)	口縁部～底部、70%存。底面磨光。内外面磨光の黒色処理。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面は口縁部下端から底部にかけて放射状のヒタギ。	少量、白色粒	7.53R/1黒 / 7.53R/2黒	酸化鉄 良好	①区床
4	土師器 杯	13.0 3.5	ほぼ完整。口縁部の一帯欠損。内外面磨光の黒色処理。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面は横ナデ。	雲母、石膏、長石	10YR3/2黒 / 10YR3/1黒	酸化鉄 良好	①区床
5	土師器 杯	10.8 (4.2)	口縁部～底部、50%存。内外面磨光の黒色処理。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ後底面をヒタギ。内面は縦皺状のヒタギ。	雲母粒数、石膏、砂粒	5YR3/1黒 / 5YR2/1黒	酸化鉄 良好	①区塵土 下層
6	土師器 杯	13.63 (4.0)	口縁部～底部、40%存。内外面磨光の黒色処理で外面は剥落箇所。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面は横ナデ。	少量、石膏、長石、砂粒多数	10YR3/2黒 / 7.53R/2黒	酸化鉄 良好	カマド裏
7	土師器 杯	11.5 3.4	口縁部～底部、90%存。内面磨光の黒色処理。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面は横ナデヒタギ。	雲母、石膏、長石	7.53R/2黒 / 7.53R/1黒	酸化鉄 良好	カマド裏
8	土師器 杯	12.0 (4.3)	口縁部～底部、90%存。内面磨光の黒色処理。体部と底部の一部欠損。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面は縦皺状のヒタギ。	雲母粒数、砂粒	7.53R/4C:5黄 / 7.53R/3黄	酸化鉄 良好	①区塵土
9	土師器 杯	13.1 (4.1)	口縁部～底部、20%存。内外面磨光の黒色処理で、体部外面が全く欠損。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面はヘラケズリ。	長石、白色粒	7.53R/1黒 / 7.53R/1黒	酸化鉄 良好	P4
10	土師器 杯	13.63 (4.2)	口縁部～底部、40～50%存。内外面磨光の黒色処理。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ後底面をヒタギ。内面は放射状のヒタギ。	長石、白色粒	10YR3/2黒 / 10YR3/1黒	酸化鉄 良好	①区塵土 上層
11	土師器 杯	13.23 (4.4)	口縁部～底部、20%存。内面磨光の黒色処理。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面はヘラケズリ。	雲母、砂粒多数	10YR4/2C:黄 / 10YR3/1黒	酸化鉄 普通	燗り方
12	土師器 杯	15.0 (4.8)	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナデ。体部の外表面はヘラケズリで焼色が付着。内面はヘラケズリ。	雲母、石膏、長石	10YR6/6明黄 / 7.53R/6黄	酸化鉄 良好	カマド西
13	土師器 杯	13.23 (4.5)	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナデ。体部の外表面はヘラケズリ。内面は縦皺状のヒタギ。	石膏粒数、長石、白色粒、赤色粒	10YR4/2C:黄 / 7.53R/2C:黄	酸化鉄 良好	①区塵土 上層
14	土師器 杯	13.83 (4.8)	口縁部～体部、20～30%存。内外面磨光の黒色処理。口縁部は内外面横ナデ。体部の外表面はヘラケズリ。内面は放射状のヒタギ。	石膏、砂粒	7.53R/2黒 / 7.53R/2黒	酸化鉄 良好	②区塵土 上層
15	土師器 杯	11.6 3.2	口縁部～底部、70%存。内面磨光の黒色処理。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面は横ナデ。	石膏、黒色粒、針状物数	7.53R/4C:5黄 / 7.53R/3黄	酸化鉄 普通	①区塵土 上層
16	土師器 杯	13.33 4.9	口縁部～底部、60%存。体部の内外面に炭がく付着。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面はヘラケズリ。	石膏、白色粒、針状物	10YR3/1黒 / 10YR3/1黒	酸化鉄 普通	①区塵土 上層
17	土師器 杯	13.7 (4.3)	口縁部～底部、30%存。口縁部は内外面横ナデで内面は体部に及ぶ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面の底面はヘラケズリ。	石膏少量、砂粒	7.53R/6黄 / 7.53R/4C:5黄	酸化鉄 良好	①区塵土 上層
18	土師器 杯	15.83 (4.3)	口縁部～体部、20～30%存。口縁部は内外面横ナデで外面に輪磨痕が残る。体部の外表面はヘラケズリ。内面は横ナデ。	雲母、石膏、長石	7.53R/2黒 / 7.53R/1黒	酸化鉄 普通	①区塵土 上層
19	土師器 杯	13.63 (4.0)	口縁部～体部、20～30%存。口縁部は内外面横ナデ。体部の外表面はヘラケズリ。内面は横ナデ。	雲母粒数、石膏、白色粒	7.53R/3黒 / 7.53R/1黒	酸化鉄 良好	①区塵土 上層
20	土師器 杯	13.83 (4.2)	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナデ。体部の外表面はヘラケズリ。内面は横ナデ。	雲母、石膏、長石	7.53R/2C:黄 / 7.53R/2C:黄	酸化鉄 良好	①区塵土 上層
21	土師器 杯	11.1 3.5	口縁部～底部、70%存。口縁部は内外面横ナデで環形で、体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面はヘラケズリ。	雲母、石膏、黒色粒	10YR5/3C:5黄 / 7.53R/4C:5黄	酸化鉄 良好	①区塵土 上層
22	土師器 杯	12.83 (4.2)	口縁部～底部、50%存。口縁部～体部はロコリ型形で内面は横皺のヒタギ。底面外表面は手持ちヘラケズリ。	雲母、白色粒、黒色粒	5YR5/6明黄 / 2.53R/6明赤	酸化鉄 良好	①区塵土 上層
23	土師器 杯	13.83 3.3	口縁部～底部、40%存。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリで体部下端はヘラケズリ。内面は横ナデ。	石膏粒数、白色粒	10YR5/3C:5黄 / 10YR5/3C:5黄	酸化鉄 良好	①区塵土 上層
24	土師器 杯	10.2 3.8	口縁部～底部、70%存。体部内外部の一部に環付着。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面はヘラケズリとわずかなヒタギ。	雲母、石膏、白色粒	10YR3/2黒 / 10YR2/1黒	酸化鉄 良好	①区塵土 上層
25	土師器 杯	9.5 3.5	口縁部～底部、70%存。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面は横ナデ。	雲母、長石、白色粒	5YR5/6明黄 / 5YR5/6明赤	酸化鉄 普通	①・②区 塵土上層
26	土師器 鉢	129.43 8.9 10.9	口縁部～底部、50%存。内面磨光の黒色処理。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面は放射状のヒタギ。	白色粒	7.53R/2C:黄 / 7.53R/2C:黄	酸化鉄 良好	①・②区 塵土上層
27	土師器 鉢	15.0 (5.8)	口縁部～底部、30～40%存。口縁部は内外面横ナデ。体部外表面はヘラケズリ。内面はヘラケズリ。	石膏、長石、砂粒	7.53R/4C:5黄 / 7.53R/2C:黄	酸化鉄 良好	①区塵土 下層
28	土師器 鉢	13.4 14.3 8.5	口縁部～底部、70%存。口縁部は内外面横ナデ。体部～底部の外表面はヘラケズリ。内面はヘラケズリ。	白色粒、砂粒	5YR4/2C:5黄 / 10YR6/4C:5黄	酸化鉄 普通	カマド裏

国産番号	種類 種別	口縁部 底径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (内面/外面)	焼成	出土位置
29	土師器 壺	— (13.0)	胴部～底径、90%存。口縁部は内外面横ナゲ。胴部の外面はヘラケズリ、内面はヘラナゲ。	石英、長石、白 色粒	10187/2に赤い黄緑 / 10187/4に赤い黄緑	酸化赤 良好	①空区 覆土上層
30	土師器 壺	(17.4) 21.6 (7.0)	口縁部～底径、80%存。口縁部は内外面横ナゲ。胴部の外面はヘラケズリ、内面はヘラナゲ。	石英、長石、白 色粒	10186/4に赤い黄緑 / 10186/5に赤い黄緑	酸化赤 良好	①空区 覆土上層
31	土師器 壺	(25.2) (4.9)	口縁部片、内外面横ナゲ。	雲母、石英、長 石	7.5986/4に赤い黄 7.5986/4に赤い黄	酸化赤 普通	①空区 覆土上層
32	土師器 壺	221.0 (10.0)	口縁部～胴部片。口縁部～胴部にかけて内外面横ナゲ。胴部の外面はヘラケズリ後ナゲ、内面はヘラナゲ。	雲母、石英、長 石	7.5987/6横 / 7.5987/6横	酸化赤 良好	①・②空 区 覆土上層
33	土師器 壺	(18.0) (6.0)	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナゲ。胴部は内外面ヘラナゲ。	白色粒、微小焼	7.5986/4に赤い黄 10186/4に赤い黄	酸化赤 普通	表土
34	土師器 壺	(17.8) (7.9)	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナゲ。胴部の外面はナゲ、内面はヘラナゲ。	雲母、石英、雲 母	10187/4に赤い黄 10187/4に赤い黄	酸化赤 良好	①空区 覆土上層
35	土師器 壺	(25.0) (5.0)	口縁部片、内外面横ナゲ。内外面に輪轆が残る。	石英、長石、砂 粒	7.5983/3輪轆 / 7.5984/3横	酸化赤 普通	①空区 覆土上層
36	土師器 壺	(2.9) 7.4	底面片。胴部下部の外面はナゲ、内面はヘラナゲ。底面外面には本亀裂。	石英、長石	7.5986/6横 / 7.5986/4に赤い黄	酸化赤 良好	カマド西
37	土師器 壺	(17.6) (11.9)	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナゲ。胴部の外面は縦位のヘラケズリ、内面はヘラナゲ。	石英少量、長 石、白色粒	5984/4に赤い黄 5984/3に赤い黄	酸化赤 良好	①空区 覆土上層
38	土師器 瓶	27.4 23.8 9.6	ほぼ完全。口縁部わずかに欠損。口縁部は内外面横ナゲ。胴部は内外面ともにも上平が縦位。下半が斜位のヘラナゲ。	石英、砂粒	7.5986/6横 / 7.5985/3に赤い黄	酸化赤 良好	①空区 覆土上層
39	土師器 瓶	(17.2) (11.8)	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナゲ。胴部の外面は縦位のヘラケズリ、内面は縦位の丁寧なケガシ。	雲母、白色粒	10186/4に赤い黄 10186/4に赤い黄	酸化赤 良好	①空区 覆土上層
40	煎茶器 杯	14.7 4.0	口縁部～底径、70～80%存。口口整形。底面外面は回転ヘラケズリ。	雲母、石英、砂 粒	2.597/22黄 / 2.597/22黄	還元赤 良好	①空区 覆土上層
41	煎茶器 杯	(14.8) 4.1	口縁部～底径、40～50%存。口口整形。底面外面は回転ヘラケズリ。	雲母、石英、長 石、砂粒	2.597/22黄 / 2.597/22黄	還元赤 良好	①空区 覆土上層
42	煎茶器 杯	(9.8) 4.0 (6.8)	口縁部～底径、40～50%存。口口整形。底面外面は回転ヘラケズリ。	石英、長石	95/1底 / 95/1底	還元赤 良好	①空区 覆土上層
43	煎茶器 杯	(10.8) 3.7 (6.0)	口縁部～底径、20～30%存。口口整形。底面外面は回転ヘラケズリ(×)字状のヘラ磨き。	雲母、石英、砂 粒	2.598/22白 / 2.598/1底白	還元赤 良好	①空区 覆土上層
44	煎茶器 杯	(9.1) 3.5 5.0	口縁部～底径、60～70%存。口口整形。体下部～底径は平持ちヘラケズリ。	雲母、砂粒	2.597/22黄 / 1017/2に赤い黄	還元赤 良好	①空区 覆土上層
45	煎茶器 杯	(9.8) 3.3 6.6	口縁部～底径、40%存。底面外面は平持ちヘラケズリ。	雲母、砂粒	97/1底白 / 2.597/22黄	還元赤 良好	①空区 覆土上層
46	煎茶器 高付盃	(2.3) (12.8)	胴部～底径、40～50%存。口口整形。底面外面は回転ヘラケズリ。高台部は取り付け後ナゲ。	雲母、石英、白 色粒	95/1底 / 95/1底	還元赤 普通	①空区 覆土上層
47	煎茶器 杯	(9.8) (2.9)	口縁部片。口口整形。口縁部内面にかえりを持つ。砂と同一個体。	白色粒少量、黒 色粒微量	96/1底 / 95/1底	還元赤 普通	①空区 覆土上層
48	煎茶器 杯	(9.8) (2.3)	口縁部片。口口整形。口縁部内面にかえりを持つが、欠損。砂と同一個体。	白色粒少量、黒 色粒微量	95/1底 / 95/1底	還元赤 普通	表土
49	煎茶器 高付杯	— (5.1)	胴部片。口口整形。高台に透かし。腹面に沈線が定まる。	雲母微量、白色 粒	7.5985/22黄 / 1017/2に赤い黄	還元赤 良好	①空区 覆土上層
50	煎茶器 蓋	(17.0) (1.3)	天井部～口縁部片。口口整形で口縁部を水平にし、かえりを持つ。天井部は回転ヘラケズリ。	雲母、石英、砂 粒	2.597/22黄 / 2.597/1底白	還元赤 良好	①空区 覆土上層
51	煎茶器 蓋	(15.0) 2.9	天井部～口縁部、20%存。口口整形で口縁部にかえりを持つ。天井部に自然亀が全体に付着。	黒色粒	7.594/22黄キープ / 976/1底	還元赤 普通	①空区 覆土上層
52	煎茶器 蓋	(16.8) 3.6	口縁部～胴部。70%存。口口整形。口縁部は磨き・垂下。天井部は回転ヘラケズリ。胴部は扁平な腹立状態で取り付け後ナゲ。	石英、砂粒多量	2.596/12黄 / 94/1底	還元赤 普通	①空区 覆土上層
53	煎茶器 蓋	18.0 2.4	ほぼ完全。天井部と口縁部の一部を欠損。口口整形。天井部は回転ヘラケズリ。胴部は扁平な腹立状態で取り付け後ナゲ。	石英少量、白色 粒	976/1底 / 976/1底	還元赤 普通	①・②空 区 覆土上層
54	煎茶器 蓋	(20.0) (5.8)	口縁部片。口縁部下面に縁帯を添らす。内面は割線。	雲母、石英、砂 粒多量	976/1底 / —	還元赤 普通	覆土上層

図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (内面/外面)	焼成	出土位置
55	須臾器 壺	— 8.2 —	胴部片。外面は平行タタキ、内面はヘラナツ。	石灰少量、白色 灰	黒 / 灰 / 灰 / 灰	還元 良好	①区 埋土層
56	須臾器 底版	(12.3) —	胴部片。外面は平行タタキ後少キ。内面は同心円状の当て具痕。	石灰少量、白色 灰、砂粒少量	2. 灰4 / 灰灰 / 2. 灰4 / 灰	還元 良好	①区 埋土層
57	須臾器 片断	(12.0) 0.7	口縁部片。ロケテ整形。内面に自然磨行着。	黒色粒	2. 灰7 / 灰灰 / 2. 灰7 / 灰灰	還元 良好	①区 埋土層
58	土製品 平片土器	19.4 6.3 5.5	口縁部へ底面、80%存。全体にヘラと指痕によるナツ。	石灰、炭石、白 色粒	7. 灰5 / 白一高い 7. 灰5 / 白	酸化 良好	①区 埋土層
59	土製品 土器	長さ：13.9cm、 径：6.4cm、 重量：396.0g。	片端部欠損。指痕による整形。				埋土層
60	鉄製品 鉄片	長さ：(5.8) cm、 幅：装着側2.9cm・ 刃部側3.2cm、 厚さ：1.7cm、 重量：36.2g。	方部・装着部ともに欠損。装着部は巻き込み 形状とみられるが、片端が直れ。				埋土層
61	鉄製品 鉄片	長さ：(4.5) cm、 幅：装着側2.6cm・ 刃部側2.9cm、 厚さ：1.0cm、 重量：23.6g。	方部・装着部ともに欠損。装着部は折り返し 形状とみられるが、片端が直れ。				埋土層
62	鉄製品 鉄片	長さ：(3.4) cm、 幅：装着側2.9cm・ 刃部側3.2cm、 厚さ：1.2cm、 重量：16.2g。	装着部欠損。刃部側磨行着跡着。装着部は巻き込 み。				埋土層
63	鉄釘	長さ：7.8cm、 径：0.7cm、 重量：10.4g。	断面は円形。				埋土層
64	鉄片	長さ：3.2cm、 幅：3.4cm、 厚さ：2.3cm、 重量：22.2g。	細治洋か。				埋土層
65	鉄片	長さ：5.0cm、 幅：4.0cm、 厚さ：2.8cm、 重量：76.7g。	細治洋か。				埋土層

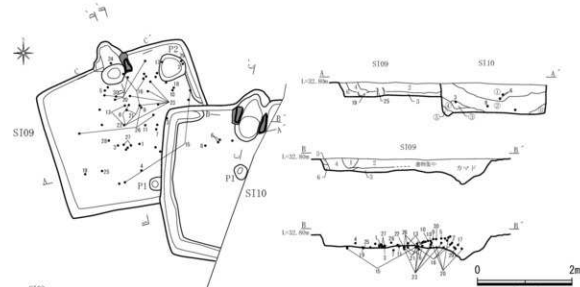
#### SI109 (第25～27図、第13表、写真図版4・5・14～16)

検出位置は6区南側のH9グリッドである。南東隅がSI110に切られているが、検出された部分から平面形はほぼ方形である。規模は東西軸で3.43m、南北軸で3.12mを測り、主軸方向はN-18°-Wを示す。壁は外傾し、残存する壁高は32cmで、覆土は6層に分層された自然堆積である。床面は平坦で、特に硬化した部分は認められなかった。壁溝は東壁際でわずかに確認されたが、不明瞭である。貯蔵穴は北東隅で検出された不整形の掘り込みが相当すると考えられる。規模は60×56cm、深さ29cmである。ピットは、主柱穴がなく、南壁のほぼ中央に径30cm前後、深さ10cmのP1があり、出入り施設に伴うピットと考えられる。掘り方は特に深く掘り下げられた部分はなかった。カマドは北壁の中央に付設され、煙道部は壁を45cm掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部までの全長が92cm、袖部の最大幅は左袖が検出されなかったが、80cm前後と推定される。袖部の構築材は灰黄褐色粘質土と褐色土の混土で、粘質土の含まれる割合が低い。火床部は長さ42cm、幅51cm、深さ22cm程の楕円形で掘り窪められるが、赤変硬化した部分は認められなかった。

遺物は、365点・25,495gが出土した。そのほとんどが土師器で、須臾器は1点含まれているが、重複するSI10からの混入とみられる。土師器の中では、坏類が233点で甕類の124点を上回っている。1～15は坏である。1～12は須臾器模倣形態の坏で口縁部直下に段が付く。口縁部は内傾する器形が主流であるが、3・5・12のように直立気味も認められる。13～15は無段有稜丸底形態の坏で、こちらも口縁部が内湾する13・14と直立から若干開き気味になる15に区分される。内外面に漆塗りの黒色処理がなされる坏の割合が多い一方で、2・4・13・15のように漆塗りが施されていない坏もある。内面の調整では放射状のミガキを施すものが目立つ。6は十字にミガキの筋を加える特異な坏である。樹とした16～19は、口縁部直下に段を持つ深い丸底の土器で、坏同様に内面を漆塗りする17、内面に放射状のミガキを施す18がある。20は、本次調査地点で出土した数少ない高坏である。21～28は甕で、口縁部がラップ状に外反し、いずれも口唇部につまみ上げや面取りが認められない。24～27は小型である。28は底部を欠いているため不明瞭であるが、内面にミガキがなされることから甕の可能性もある。29は甕で、28は口縁部があまり外反せず、内面に漆塗りの黒色処理がなされ、念入りなミガキが施されている。

出土した遺物から推定される本跡の時期は、坏の器高が高めでること、高坏もさほど短脚ではないこと

などから、7世紀初頭～前葉と考えられる。ただし、法量には多少ばらつきがあることなどから、その中でも新しい様相がうかがわれる。



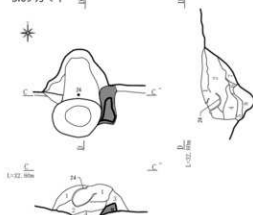
S109

- |                  |  |
|------------------|--|
| 1. S109/4/3 褐色土  | ローム土 (多量10%)、ロームブロック (φ5~10mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。            |
| 2. S109/3/3 暗褐色土 | ローム土 (多量10%)、ロームブロック (φ10~10mm少量)、炭化植物 (少量) 含む。縞りあり。粘性弱。 |
| 3. S109/3/2 暗褐色土 | ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。                |
| 4. S109/3/1 暗褐色土 | ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~5mm少量)、炭化植物 (微量) 含む。縞りあり。粘性弱。      |
| 5. S109/4/4 褐色土  | ローム質土、ロームブロック (φ2~5mm微量) 含む。縞りあり。粘性弱。                    |
| 6. S109/4/3 褐色土  | ロームブロック (φ2~5mm微量) 含む。縞りあり。粘性弱。                          |

S110

- |                 |   |
|-----------------|---|
| ① S109/3/2 暗褐色土 | ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~5mm少量、φ20~30mm微量)、炭化植物・焼土粒を含む (微量) 含む。縞りあり。粘性弱。 |
| ② S109/2/2 暗褐色土 | ロームブロック (φ2~5mm多量20%)、φ2~10mm多量10%、φ20~30mm中量) 含む。縞りあり。粘性弱。           |
| ③ S109/3/3 暗褐色土 | ローム土 (多量10%)、ロームブロック (φ2~5mm中量)、炭化植物 (微量) 含む。縞りあり。粘性弱。                |
| ④ S109/3/2 暗褐色土 | ローム土 (中量)、ロームブロック (φ2~5mm微量)、炭化植物 (微量) 含む。縞りあり。粘性弱。                   |
| ⑤ S109/3/2 暗褐色土 | ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~5mm微量) 含む。縞りあり。粘性ややあり。                          |
| ⑥ S109/3/3 暗褐色土 | シルト質土。ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む。縞りあり。粘性あり。                                |

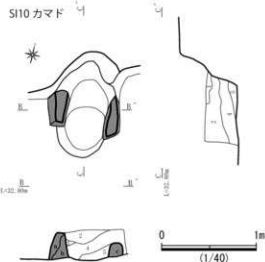
S109 カマド



S109 カマド

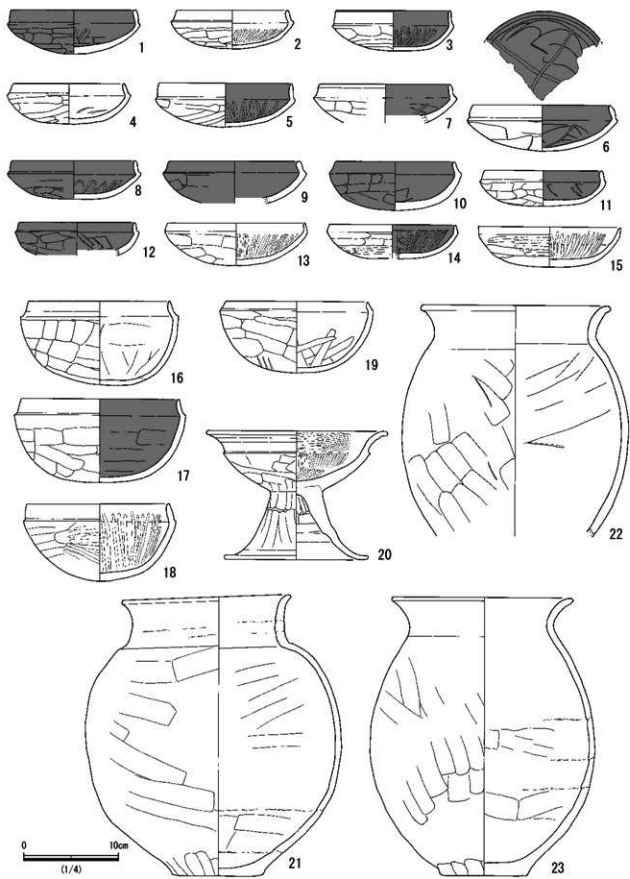
- |                   |  |
|-------------------|--|
| 1. S109/2/2 灰黄褐色土 | シルト質土、ローム土 (少量) 含む。縞りあり。粘性ややあり。                              |
| 2. S109/3/2 暗褐色土  | 焼土ブロック (φ2~5mm微量)、ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。            |
| 3. S109/4/4 褐色土   | ローム土 (多量10%)、ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。                 |
| 4. S109/3/2 暗褐色土  | 焼土ブロック (φ5~10mm中量) 含む。縞りあり。粘性弱。                              |
| 5. S109/3/3 暗褐色土  | ロームブロック (φ2~7mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。                              |
| 6. S109/3/2 暗褐色土  | ローム土 (多量10%)、ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。                 |
| 7. S109/3/4 暗褐色土  | ロームブロック (φ2~7mm中量)、焼土ブロック (φ2~5mm微量) 含む。縞りあり。粘性弱。            |
| 8. S109/4/3 暗褐色土  | ロームブロック (φ2~7mm少量、φ10~20mm微量)、焼土ブロック (φ2~5mm微量) 含む。縞りあり。粘性弱。 |
| 9. S109/3/3 暗褐色土  | ローム土 (中量)、ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。                    |
| 4. S109/3/2 灰黄褐色土 | シルト質土、白色土 (少量)、白色ブロック (φ2~5mm微量) 含む。縞りあり。粘性ややあり。             |

S110 カマド

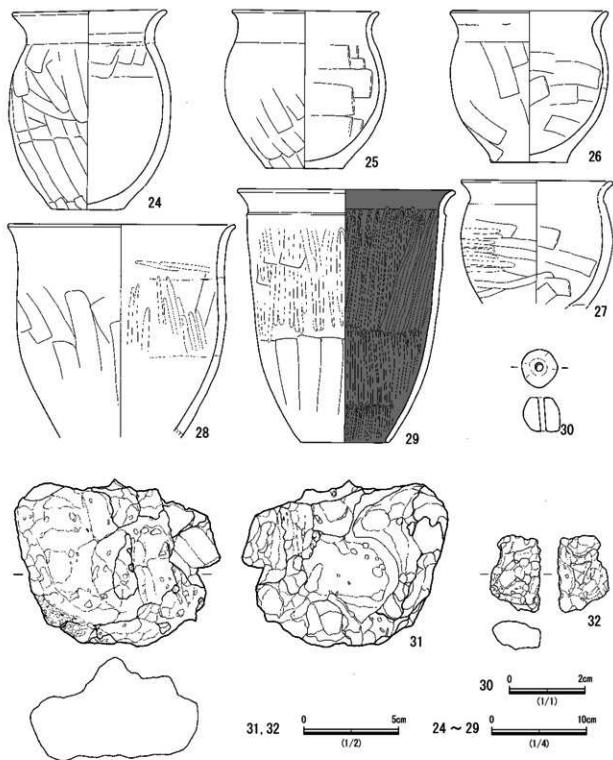


- |                   |   |
|-------------------|---|
| 1. S109/4/2 灰黄褐色土 | ややシルト質土。焼土色土をブロック状に (多量10%) 含む。縞りあり。粘性ややあり。                   |
| 2. S109/3/3 暗褐色土  | ローム土 (中量)、ロームブロック (φ5mm前後微量)、焼土粒 (少量) 含む。縞りあり。粘性弱。            |
| 3. S109/4/1 灰黄色土  | シルト質土、ロームブロック (φ5mm前後微量)、焼土ブロック (φ2~3mm微量) 含む。縞りあり。粘性弱。       |
| 4. S109/3/2 暗褐色土  | ローム土 (多量10%)、ロームブロック (φ2~5mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。                  |
| 5. S109/4/3 褐色土   | ロームブロック (φ2~5mm少量)、焼土ブロック (φ2~5mm微量) 含む。縞りあり。粘性弱。             |
| 4. S109/4/2 灰黄褐色土 | シルト質土。焼土色土をブロック状に (多量10%)、焼土 (多量10%) 含む。縞りあり。粘性ややあり。          |
| 5. S109/4/1 褐色土   | シルト質土、白色土 (少量)、粘性弱。   |
| 6. S109/4/3 褐色土   | シルト質土、ロームブロック (φ2~5mm多量10%)、焼土ブロック (φ2~5mm微量) 含む。縞りあり。粘性ややあり。 |

第25図 S109・10 遺構実測図



第26圖 S109 遺物実測図(1)



第27図 S109 遺物実測図(2)

第13表 S109 遺物観察表

図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・調整技法等	粘土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 杯	13.0 4.6 —	ほぼ完整。口縁部をわずかに欠損。内外面ほぼ均等の黒色処理。口縁部は内外面磨き。体部～底部の外表面はヘラケズリ後とガキ。内面はヘラケズリ後とガキ。	雲母、石英、白 色砂	10YR1.7/黒 10YR1.7/黒	酸化炭 素焼	①区床
2	土師器 盃	11.6 4.1 —	ほぼ完整。口縁部をわずかに欠損。口縁部は内外面磨き。体部～底部の外表面はヘラケズリ後とガキ。内面は刷毛状の丁寧なガキ。	雲母、白色砂	7.5YR5/4(2.5)・黒 7.5YR4/0	酸化炭 素焼	①区腐土



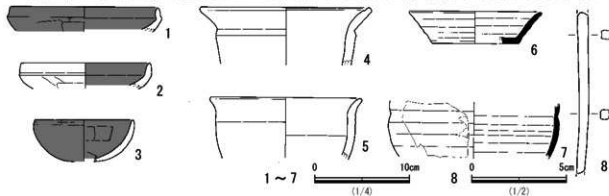
図面番号	種類	口径 高さ 底径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
3	土師器 杯	12.0 4.2	口縁部～底面、80%存。内面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面は放射状のミガキ。	石英、白色粒、赤色粒	7.5385/41.5(白)黄褐色 / 7.5382/31.8	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土
4	土師器 杯	11.7 4.3	口縁部～底面、90%存。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面は丁寧なヘラナゲ。	石英、白色粒	2.5368/31.6(白)黄 / 10.986/31.6(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土
5	土師器 杯	13.9 4.6	口縁部～底面、40～50%存。内外面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面は放射状のミガキ。	雲母、石英微塵、白色粒	7.5383/31.8(白)黄褐色 / 7.5383/23.8(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土
6	土師器 杯	(14.5) 4.8	口縁部～底面、30～30%存。内面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ後十字状のミガキを施。	砂粒	7.5384/23.8(白)黄褐色 / 7.5382/31.8	酸化炭素良好	①・①区Ⅰ層土
7	土師器 杯	(13.5) 4.1	口縁部～体部片。内面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナゲ。体部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ後1条のミガキを施。	雲母、砂粒	7.5384/23.8(白)黄褐色 / 7.5383/31.8(白)黄褐色	酸化炭素良好	①・①区Ⅰ層土
8	土師器 杯	(13.0) 4.1	口縁部～底面、50%存。内外面塗りの黒色処理で体部外面は割部。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面は放射状のミガキ。	雲母、砂粒	10.986/41.5(白)黄褐色 / 7.5383/31.8(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土・カマド
9	土師器 杯	(13.5) 4.5	口縁部～底面、30%存。内外面塗りの黒色処理で体部外面は割部。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面は横ナゲ。	石英、長石、砂粒	7.5384/23.8(白)黄褐色 / 7.5383/31.8(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層・カマド
10	土師器 杯	(12.5) 5.2	口縁部～底面、50～60%存。内外面塗りに上げた黒色処理。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	石英、長石	7.5383/31.8(白)黄褐色 / 7.5383/31.8(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土
11	土師器 杯	(12.2) 3.8	口縁部～底面、60～70%存。内面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	雲母、石英微塵、白色粒	7.5384/23.8(白)黄褐色 / 7.5383/31.8(白)黄褐色	酸化炭素普通	①区Ⅰ層土
12	土師器 杯	(12.2) 4.5	口縁部～体部片。内外面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナゲ。体部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	雲母、石英微塵、白色粒	7.5383/31.8(白)黄褐色 / 7.5383/31.8(白)黄褐色	酸化炭素普通	①区Ⅰ層土
13	土師器 杯	14.4 4.5	ほぼ完全。口縁部をわずかに欠損。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面は放射状の丁寧なミガキ。	雲母、石英微塵、砂粒	10.986/41.5(白)黄褐色 / 10.986/41.5(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土・カマド
14	土師器 杯	(13.2) 3.6	口縁部～底面、50%存。内面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリで下半はヘラケズリ後ミガキ。内面は放射状の丁寧なミガキ。	長石微塵、白色粒	7.5383/31.8(白)黄褐色 / 7.5383/23.8(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土
15	土師器 杯	15.0 4.3	口縁部～底面、70%存。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ後ミガキ。内面は放射状の丁寧なミガキ。	長石微塵、白色粒	5.934/6.8(赤)赤 / 5.934/6.8(赤)赤	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土・①区Ⅰ層土～カマド
16	土師器 瓶	15.0 8.9	ほぼ完全。口縁部と体部をわずかに欠損。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面は上半が横位のヘラナゲ。下半が縦位のヘラナゲ。	石英、砂粒	7.5386/6.8(赤)赤 / 7.5385/41.5(白)黄褐色	酸化炭素良好	①・①区Ⅰ層土
17	土師器 瓶	(16.5) 8.9	口縁部～底面、60～70%存。内面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	石英少量、白色粒	7.5385/41.5(白)黄褐色 / 7.5381/7.1(赤)赤	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土
18	土師器 瓶	15.0 8.2	口縁部～底面、50～90%存。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ後ミガキ。内面は放射状の丁寧なミガキ。	雲母、石英微塵、砂粒	10.987/41.5(白)黄褐色 / 10.986/41.5(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土
19	土師器 瓶	15.0 7.5	ほぼ完全。口縁部をわずかに欠損。口縁部は内外面横ナゲ。体部～底部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	石英微塵、白色粒	10.986/41.5(白)黄褐色 / 10.985/31.6(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土
20	土師器 高杯	19.0 13.6 15.2	胴部～頸部、70%存。胴部の外面は口縁部が横ナゲ。体部の外面はヘラケズリ。内面は口縁部が縦位のミガキ。体部が縦位のミガキ。胴部の外面が縦位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナゲ。	石英、長石、砂粒	7.5385/6.8(赤)赤 / 7.5385/6.8(赤)赤	酸化炭素良好	①・①区Ⅰ層土～カマド
21	土師器 高杯	17.3 29.8 9.8	ほぼ完全。口縁部と胴部をわずかに欠損。口縁部は内外面横ナゲで輪飾りが残る。胴部～底部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	雲母、石英、長石	7.5385/41.5(白)黄褐色 / 7.5385/41.5(白)黄褐色	酸化炭素普通	①区Ⅰ層土～灰
22	土師器 高杯	19.3 24.0	口縁部～胴部、50%存。口縁部は内外面横ナゲ。胴部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	石英、長石、砂粒	10.985/31.6(白)黄褐色 / 7.5383/31.8(白)黄褐色	酸化炭素良好	①・①区Ⅰ層土
23	土師器 高杯	18.8 29.5 9.3	口縁部～底面、80%存。口縁部は内外面横ナゲ。胴部～底部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	石英、白色粒	10.986/41.5(白)黄褐色 / 7.5385/41.5(白)黄褐色	酸化炭素普通	①・①区Ⅰ層土～灰
24	土師器 高杯	15.8 21.3 7.5	ほぼ完全。胴部をわずかに欠損。口縁部は内外面横ナゲ。胴部～底部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	雲母、砂粒	7.5385/31.6(白)黄褐色 / 7.5384/33.8	酸化炭素良好	カマド
25	土師器 高杯	15.0 16.8 8.0	ほぼ完全。口縁部をわずかに欠損。口縁部は内外面横ナゲ。胴部～底部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	雲母、石英少量、白色粒	7.5386/41.5(白)黄褐色 / 7.5386/41.5(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土
26	土師器 高杯	16.2 16.0 8.0	口縁部～底面、70%存。口縁部は内外面横ナゲで輪飾りが残る。胴部～底部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲ。	石英、長石、砂粒	7.5386/41.5(白)黄褐色 / 7.5386/41.5(白)黄褐色	酸化炭素普通	①・①区Ⅰ層土
27	土師器 高杯	15.5 13.2	口縁部～胴部、70%存。口縁部は内外面横ナゲ。胴部の外面はヘラケズリ後縦位のミガキ。内面はヘラナゲ。	石英、長石、砂粒	2.5385/6.8(赤)赤 / 2.5385/6.8(赤)赤	酸化炭素普通	①区Ⅰ層土～灰
28	土師器 高杯	23.7 (22.5)	口縁部～胴部、40～50%存。口縁部は内外面横ナゲ。胴部の外面は割部。口縁部は内外面横ナゲ。内面は縦位のミガキ。	白色粒、砂粒少量	10.983/31.8(白)黄褐色 / 10.983/31.8(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土
29	土師器 瓶	22.7 26.8 9.3	ほぼ完全。口縁部と胴部をわずかに欠損。内面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナゲ。胴部の外面は上半が縦位のミガキ。下半が縦位のヘラケズリ。内面は3段にわたる縦位の波文ミガキ。	白色粒、砂粒	7.5384/23.8(白)黄褐色 / 7.5382/23.8(白)黄褐色	酸化炭素良好	①区Ⅰ層土・若狭六上

図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (外面/内面)	構成	出土位置
30	土製品 小玉	縦:0.9cm, 横:0.9cm, 孔径:0.2cm, 重量:1.0g,	指間によるナゲ。穿孔は地成後か。				①区
31	鉄片	長さ:8.5cm, 幅:11.0cm, 厚さ:5.0cm, 重量:660.5g,	鍛冶片か。				層土
32	鉄片	長さ:4.0cm, 幅:2.5cm, 厚さ:1.5cm, 重量:25.9g,	鍛冶片か。				層土

#### S I 1 0 (第25・28図、第14表、写真図版4・16)

検出位置は6区中央のH9・10、I9グリッドである。西側でSI09を切り、東側の約半分が調査区外にあるため正確な形状や規模は把握できないが、検出された部分から平面形は方形と考えられる。規模は東西軸が現存値で2.20m、南北軸は3.33mを測り、主軸方向はN-4°-Eを示す。壁は直立して立ち上がり、残存する壁高は62cmで、覆土は6層に分層された自然堆積である。床面はほぼ平坦で、全体が顕著な硬化面となっていた。壁溝は北壁を除き確認され、断面U字形で幅20cm前後、深さ10cm前後である。貯蔵穴は検出されなかった。ピットは主柱穴がなく、住居跡中央部に径31~27cm、深さ21cmのP1がある。掘り方では、特に深く掘り下げられた部分はなかった。カマドは北壁に付設され、煙道部は壁を26cm程掘り込んでいる。規模は、焚口部から煙道部にかけての全長が112cm、袖部の最大幅は75cmである。袖部の構築材は褐色粘質土と暗褐色土との混土で、粘質土の含まれる割合が低い。火床部は長さ56cm、幅40cm、深さ4cm程の円形で浅く掘り窪められるが、赤色化や硬化した部分は認められなかった。

遺物は、261点・4,309gが出土した。1~2層上部からの出土が多く、下層からの出土はあまり多くない。



第28図 SI10 遺物実測図

第14表 SI10 遺物観察表

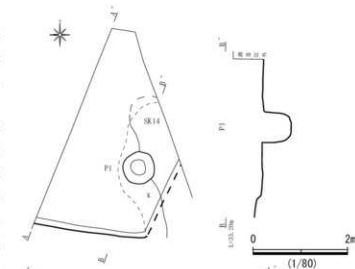
図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (外面/内面)	構成	出土位置
1	土器部 杯	(15.0) (2.6)	口縁部~体部片。内外面塗塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナゲ。体部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲか。	雲石、石英	7.0YR2/1黒 / 7.0YR3/2黒陶	焼成良好 良好	床
2	土器部 杯	(13.40) (2.7)	口縁部~体部片。内面塗塗りの黒色処理で剥落か。口縁部は内外面横ナゲ。体部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナゲか。	砂粒	10YR6/4にぶい黄緑 / 7.0YR3/1黒陶	焼成良好 良好	①区層土
3	土器部 杯	(10.4) (4.4)	口縁部~底径。40~50%存。内外面は塗塗りの黒色処理。外面はヒタギ。内面はヘラナゲで内外面とも丁寧に仕上げた。	雲石、石英、長石	7.0YR3/2黒陶 / 7.0YR3/2黒陶	焼成良好 良好	①区層土
4	土器部 蓋	(17.80) (6.1)	口縁部~胴部片。口縁部は内外面横ナゲ。	砂粒多量	5YR4/6赤陶 / 5YR5/6暗赤陶	焼成良好 良好	カマド
5	土器部 蓋	(15.6) —	口縁部~胴部片。口縁部は内外面横ナゲで、内面は胴部上端まで及び。	砂粒多量	5YR4/6にぶい赤陶 / 5YR3/2暗赤陶	焼成良好 普通	①区層土
6	瓦器部 杯	(13.80) (3.4) (9.0)	口縁部~底径。20%存。ロコト型。底部外面は回転ヘラケズリ。	白色粘、黒色粘、砂状物	5Y5/1R / 5Y6/1R	還元良好 製成	①区層土
7	瓦器部 蓋類	(5.9)	体部片。ロコト型。外面には自然軸が付着。裏面黒。	黒色粘	5Y7/1R白 / 2.5Y7/2灰黄	還元良好 製成	②区層土
8	群衆品 鉄片	長さ:8.6cm, 高さ:0.5cm, 重量:6.8g,	鍛錬とすれば表面部を欠損。表面は角状。				①区層土

2点の須恵器は全てこの1～2層の出土である。1・2の土師器環は須恵器環模倣形態の環であるが、口縁部直下の段がやや不明瞭である。1は床面から出土している。3は碗状の環で、形態や調整が異質である。4・5は小型の土師器甕である。6は須恵器環で、胎土から木葉下窯の所産と考えられる。7の瓶頸も精良な胎土から湖西産の可能性がある。8の鉄製品も須恵器と同じ層からの出土である。

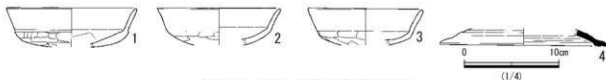
出土した須恵器は、形態や調整から8世紀中葉以降と思われるが、土師器環は7世紀代とみられ、時期に差がある。土師器環は小破片ではあるが、1が床面から出土し、さらにSI09との切り合い関係や1・2土師器の段の不明瞭が退化していることを重視すれば、7世紀中葉以降と考えられる。

#### SI11 (第29図、第15表、写真図版5・16)

検出位置は6区北端のD10・E10グリッドである。一部がSK14と重複し、その覆土上に貼り床が施されていた。南東隅のみの検出で、大部分が北西側の調査区外にあるため、正確な形状や規模は把握できなかった。現存値での規模は東西軸が2.00m、南北軸が4.36mである。検出された部分や主柱穴の配置から、平面形は方形と考えられ、主軸方向はN-12°-Eを示す。壁は外傾し、残存する壁高は10～15cmで、覆土は3層に分層された自然堆積である。床面は平坦で、検出された部分での顕著な硬化面は認められなかった。壁溝は確認されていないが、北側の土層面で痕跡が認められる。貯蔵穴、カマドは確認できなかった。ピットは径67cm前後、深さ58cmのP1のみが検出され、主柱穴と考えられる。掘り方は柱穴内側の住居跡中央部が深く掘り下げられているようである。



- SI11
- 7.09E/3 暗褐色土 ローム粒(少量)、ロームブロック(φ2~3mm散見)含む。縞りあり、粘性弱。
  - 7.09E/2 黒褐色土 ローム粒(少量)、ロームブロック(φ2~5mm少量)含む。縞りあり、粘性弱。
  - 7.09E/4 暗褐色土 ローム粒(中量)、ロームブロック(φ2~5mm少量)含む。縞りあり、粘性弱。
  - 109E/3 濃い黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm多量40%)含む。縞りあり、粘性ややあり。
  - 109E/9 褐色土 ロームブロック(φ10~40mm多量)含む。縞りあり、粘性あり。



第29図 SI11 遺構及び遺物実測図

第15表 SI11 遺物観察表

調査番号	遺物 品類	口縁部 高さ	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (外底/内底)	焼成	出土位置
1	土師器 環	(13.4) (4.1)	口縁部～底部片。口縁部は内外面横ナズ、体部～底部の外底はヘラケズリ、内底はヘラナズ。	雲母、砂粒	109E5/41:濃い黄褐色 7.09E5/41:濃い黄褐色	酸化劣 良好	覆土
2	土師器 環	(12.8) (3.9)	口縁部～底部片。口縁部は内外面横ナズ、体部～底部の外底はヘラケズリ、内底は横ナズ。	雲母、砂粒	2.09E.7/3:濃い黄褐色 109E6.7/3:濃い黄褐色	酸化劣 良好	覆土
3	土師器 環	(11.9) (3.8)	口縁部～底部、30%存、体部～底部の外底はヘラケズリ、内底は横ナズ。	雲母、砂粒	7.09E5/41:濃い黄褐色 109E3/1:黒褐色	酸化劣 良好	覆土
4	須恵器 蓋	(17.6) (1.8)	口縁部片、ロクロ製形。口縁部は水平で内面に小えりを持つ。	雲母、石英、長石	59E/10E / 59E/10E	還元劣 良好	覆土

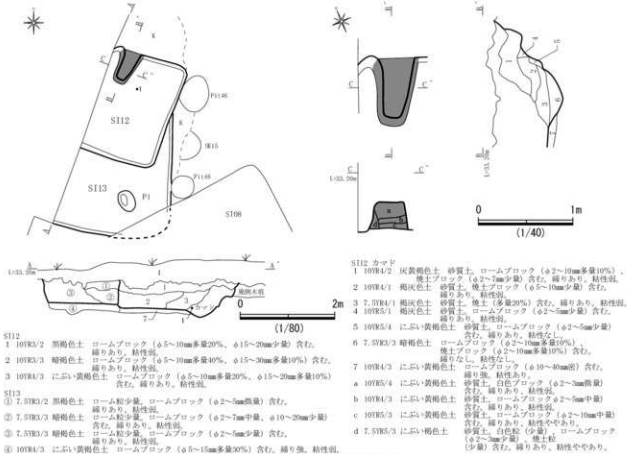
遺物は、30点・858gが出土した。1～3の土師器環は、体部中位以下に稜を有し、平底気味である。4はかえりを持った新治窯産の須恵器蓋である。

これらの出土遺物から推定される本跡の時期は、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

#### SI12 (第30・31図、第16表、写真図版5・16)

検出位置は6区中央のF10グリッドである。南側でSI13と重複し、土層から本跡が新しいと判断される。また、風倒木底(SX09)を切り込んでカマドや貼り床が構築されている。さらに西側半分が調査区外にあるため、正確な形状や規模は把握できなかったが、検出された部分から平面形は方形と考えられる。規模は東西軸が現存値で1.60m、南北軸は2.24mを測り、主軸方向はN-21°-Eを示す。壁は直立して立ち上がり、残存する壁高は40cm前後である。覆土は3層に分層されており、いずれの層もロームブロックを多量に含んでいることから人為的な堆積であると考えられる。床面はほぼ平坦で、全体が顕著な硬化面となっていた。壁溝、貯蔵穴、主柱穴などは検出されず、掘り方では、特に深く掘り下げられた部分はなかった。カマドは北壁に付設され、東側半分の検出に留まる。煙道部は壁をわずかに4cm程掘り込んでいる。規模は焚口部から煙道部にかけての全長が78cm、袖部は右袖のみの検出であるため幅は確認できなかった。袖部の構築材はにぶい黄褐色砂質土が主体になって用いられている。火床部は長さ66cm、深さ13cm程の円形で掘り窪められ、わずかに赤色化するものの、硬化した部分は認められなかった。

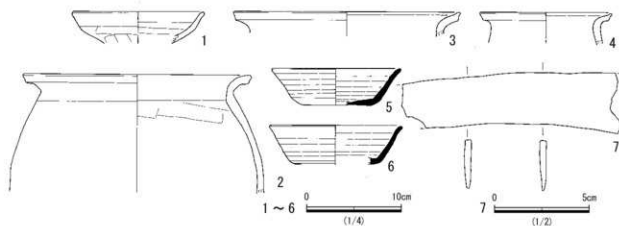
遺物は、41点・1.316gが出土した。ただし、遺構の検出当初、SI13の重複が認識できていなかったことから、同遺構の覆土遺物も含まれている。その内土師器環は30点であるが、須恵器は環11点が出土している。1は土師器環で体部中位にわずかな稜を有する。2～4は土師器甕で、口唇部につまみ上げの技法が認められ



第30図 SI12・13 遺構実測図

る。4は小型である。5・6は須恵器環で、5は二次底部面が認められ、6の体部下端も丸みを持つ。

出土遺物から推定される本跡の時期は、土師器環及び須恵器環の形態から8世紀前葉～中葉と考えられる。



第31図 SI12・13 遺物実測図

第16表 SI12・13 遺物観察表

図面番号	種類 器種	口径 高さ 底径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 環	(13.4) (3.4)	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナズ。体部の外面はヘラケズリ、内面はヘラナズ。	雲母、白色粒	10YR4/2灰黄緑 / 10YR2/1黒	酸化赤 良好	覆土
2	土師器 環	(23.8) (2.5)	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナズ。胴部外面はナズ、内面はヘラナズ。	雲母、石英、長 石	5YR4/4(2.5)赤黒 / 5YR4/3(2.5)赤黒	酸化赤 良好	床
3	土師器 環	(23.8) (2.6)	口縁部片、内外面横ナズ。	雲母、石英、長 石	7.5YR5/4(2.5)赤黒 / 10YR6/4(2.5)黄緑	酸化赤 良好	覆土
4	土師器 環	(13.8) (3.2)	口縁部片、内外面横ナズ。	雲母、石英、長 石、砂粒	7.5YR5/2(2.5)赤黒 / 7.5YR5/4(2.5)赤黒	酸化赤 良好	覆土
5	須恵器 環	13.4 3.9 7.2	口縁部～底面、50%存。コロボ壺形。二次底部面を持ち、底面外面にS字で凹彫ヘラケズリ。	石英、調整、白 色粒	5YR5/1R / 5YR5/1R	還元赤 色焼	覆土
6	須恵器 環	(13.8) (4.1)	口縁部～体部片。コロボ壺形。	白色粒、砂粒、 斜状物	5YR5/1R / 5YR5/1R	還元赤 色焼	覆土
7	鉄製品 鏝	長さ：11.6cm、幅：2.6～3.2cm、厚さ：0.2～0.3cm、重量：42.7g。	刀先先端部及び着柄部を欠損。				SI13 溝

### SI13 (第30・31図、第16表、写真図版5・16)

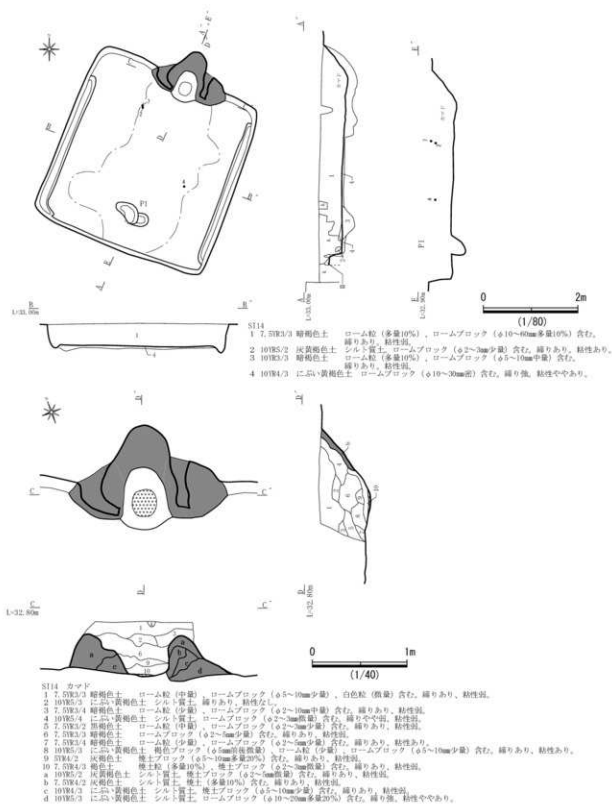
検出位置は6区中央のF10・G10グリッドである。北側がSI12に切れられ、南側ではS108の北壁の一部と東側カマド煙道部を切っていた。西側が調査区外にあるため正確な形状や規模は把握できなかったが、検出された部分から平面形は方形と考えられる。現存値での規模は東西軸が2.30m、南北軸は2.50mを測り、主軸方向はN-3°-Eを示す。壁はやや外傾し、残存する壁高は最大で45cmである。覆土は3層が確認され、自然堆積とみられるが、壁際の層ではロームブロックを多量に含んでいた。床面はほぼ平坦で、全体が顕著な硬化面となっていた。壁溝、貯蔵穴、カマドは検出されなかった。南東隅寄りに検出されたP1は径46×33cm、深さ48cmで、配置から主柱穴の可能性ある。掘り方では、特に深く掘り下げられた部分はなかった。

遺物は、SI12で前述したように重複が認識できていなかったため、SI12 覆土遺物に含まれている。確実に本跡の出土と認められるのは、3点・58gで土師器環・須恵器環の細片とSI12・8の鉄製品・鏝である。

本跡の時期は、S108の7世紀後葉より、SI12の8世紀前葉までの間と考えられる。

S114 (第32・33図、第17表、写真図版5・17)

検出位置は7区東側の19・10グリッドである。南側は耕作によるトレンチャーで攪乱を受けていた。平面形は方形で、規模は東西軸が3.81m、南北軸が3.92mを測り、主軸方向はN-23°-Eを示す。壁は

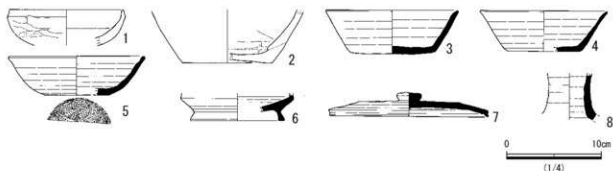


第32図 S114 遺構実測図

やや外傾し、残存する壁高は50 cmである。覆土は2層に分層されるが、ロームブロックを多量に含んだ1層目が主体の人為的な堆積である。床面は平坦に貼り床が施され、カマド前面から南壁にかけての中央部に顕著な硬化面が認められた。壁溝は東西の壁側でのみ確認され、幅12～16 cm、深さ5～10 cmである。貯蔵穴、支柱穴はなく、南西壁寄り中央に長軸が67 cm、短軸が26 cm、深さ28 cmの不整形形状をしたP1があり、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。掘り方は、中央部分を高く残し四隅を深く掘り下げていた。カマドは北東壁の中央に付設され、煙道部は壁を60 cm程大きく掘り込んでいる。焚口部から煙道部までの全長は110 cm、袖部の最大幅は168 cmである。袖部の構築材は灰黄褐色粘質土と砂質土の混土で、煙道部まで被覆していた。火床部は長さ67 cm、幅47 cm、深さ7 cm程の楕円形で浅く掘り窪められ、中央が赤変硬化していた。

遺物は、147点・2,588gが出土した。土師器は110点で、坏類が6点、甕類が104点、須恵器は37点で坏・蓋類が18点、甕・壺類が19点である。1は無段有種丸底形態の土師器坏で、やや小振りである。3～5は須恵器坏でいずれも底面が回転ヘラ切りで、3はヘラ切り後手持ちヘラケズリの調整が行われているが、4・5は無調整である。7の須恵器蓋は器高が低く、口端部の屈曲がほとんど認められない。

出土遺物から推定される本跡の時期は、須恵器坏の底径が小さ目で、回転ヘラ切りによる技法が主体であることや、須恵器蓋の退化傾向が認められることから、8世紀後半～9世紀前半と考えられる。



第33図 S114 遺物実測図

第17表 S114 遺物観察表

図表番号	種類 器類	口径 器高 底径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 坏	(12.0) (3.8) —	口縁部～体部片。口縁部は内外面積ナデ、体部の外面はヘラケズリ後ミガキ、内面は積ナデ。	雲母、白色粘	01R5/2(赤)黄褐 / 01R5/2(赤)黄褐	酸化赤 黒褐	カマド
2	土師器 甕	(5.0) 9.5	胴部～底部片。外面には焼砂が多量に付着。内面はヘラナデ。	雲母、石膏、長 石	01R5/4(赤)赤褐 / 7.5R5/3(赤)赤褐	酸化赤 青褐	①区雑土
3	須恵器 坏	14.0 4.6 9.0	口縁部～底部、80～90%存。ロケロ整形。底面外面は回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリ。	雲母、白色粘	2.5R8/1(黄白) / 2.5R7/2(黄)	還元赤 紫褐	①区雑土
4	須恵器 坏	(13.3) 4.3 (7.0)	口縁部～底部、30～40%存。ロケロ整形。底面外面は回転ヘラ切りで無調整。	雲母、石膏、白 色粘	01G/1(灰) / 01G/1(灰)	還元赤 紫褐	②区雑土
5	須恵器 坏	(14.2) 4.1 (6.8)	口縁部～底部、20%存。ロケロ整形。底面外面は回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリでヘラ積みあり。	白色粘、黑色粘 少量、クセート 微量	01G/1(灰) / N5/ 灰	還元赤 紫褐	カマド
6	須恵器 高台付杯	— (2.9) 9.0	底面片。ロケロ整形。高台部は貼り付け後ナデ。	石膏、白色粘	N5/ 灰 / N1/ 灰	還元赤 紫褐	雑土
7	須恵器 蓋	(16.0) 2.5 —	口縁部～縁み部、30～40%存。ロケロ整形。口縁部は短く屈曲・垂下、天井部は回転ヘラケズリ。縁み部は扁平な碗空珠状で、貼り付け後ナデ。	長石、白色粘、 針状物	N5/ 灰 / 01G/1(灰)	還元赤 紫褐	①区雑土
8	須恵器 長頸甕	— (5.0)	胴部片。ロケロ整形。	白色粘、砂焼	N4/ 灰 / 01G/1(灰)	還元赤 紫褐	①区雑土

S I 1 5 (第34図、第18表、写真図版5・17)

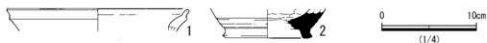
検出位置は、7区東端のI 10グリッドである。南東側ではSK24に少し切られている。平面形はやや南北に長い方形で、四隅がやや丸みを持つ。規模は東西軸で2.34 m、南北軸で3.00 mを測り、主軸方向はN-23°-Eを示す。壁はほぼ直立し、残存する壁高は23 cmである。覆土は2層に分層されるが、ともにロームブロックを多量に含んだ人為的な堆積である。床面は平坦に貼り床が施されるが、顕著な硬化面は認められず、掘り方は中央部分を深く掘り下げていた。壁溝、貯蔵穴、主柱穴、カマドはいずれも検出されなかった。

遺物は、18点・325gが出土した。1・2はいずれも覆土でも上面からの出土である。

出土遺物が少なく、時期は不明瞭であるが、土師器甕の口縁部の形態などから8世紀後半～9世紀後半と考えられる。



- SI15  
 1. 7.5R3/3 暗褐色土 ローム粒(重量10%)、ロームブロック(φ2~5mm程度)含む。細りあり。粘性弱。  
 2. 7.5R4/3 褐色土 ローム粒(重量20%)、ロームブロック(φ20~50mm程度)含む。細りあり。粘性強。  
 3. 10R4/3 に5色黄褐色土 ロームブロック(φ20~50mm)含む。細りあり。粘性ややあり。



第34図 SI15 遺構及び遺物実測図

第18表 SI15 遺物観察表

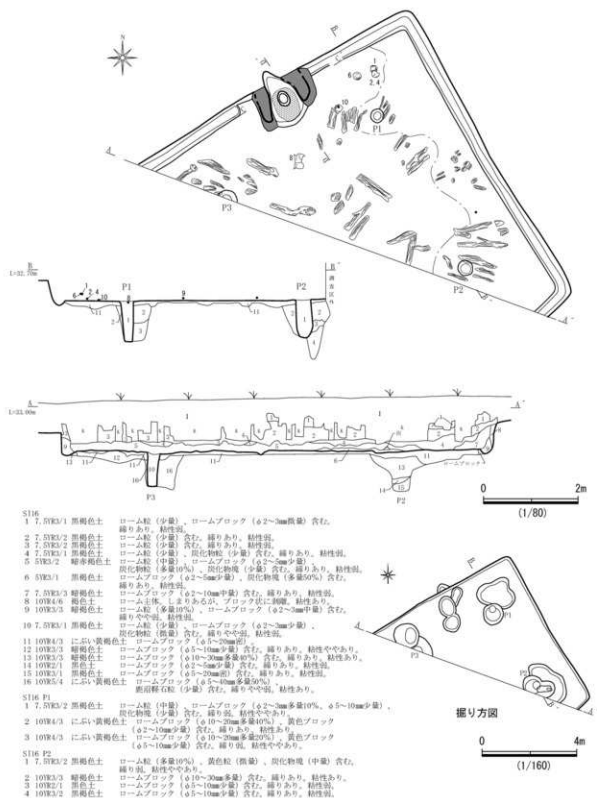
調査番号	種類 器種	口縁 高さ 直径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 甕	(18.0) (2.4) (—)	口縁部片。内外面積ナズ。	雲母、長石、砂	7.5R3/4に5色1層 / 7.5R3/4に5色1層	焼成良好	覆土上面
2	土師器 甕類	(3.1) (6.3)	底面片。胴部下端の外側はヘラケズリ、内側はヘラナダ。高台部は貼り付けた後、接地部をヘラケズリ。	石灰、砂焼	N4 / 灰 / 7.5R6/1灰	還元焼 良好	覆土上面

S I 1 6 (第35・36図、第19表、写真図版5・17)

検出位置は、7区南側のH 6グリッドである。全体に耕作によるトレンチャーで攪乱を受けているが、床面までは達していない。南西側の約半分が調査区外になるため、正確な形状や規模は把握されなかったが、検出された部分や主柱穴の配置から、平面形は方形を呈し、やや南北に長い形状である。その規模は東西軸が現存値で6.60 m、南北軸が7.20 mと推定される。主軸方向はN-30°-Wを示す。壁はほぼ直立し、壁高は40～54 cmである。覆土は9層に分層される自然堆積である。床直上には炭化材が散在し、焼失家屋であることがわかった。炭化材は特に主柱穴周辺でやや集中する傾向にある。床面は平坦に貼り床が施され、主柱穴間の住居中央部に顕著な硬化面が認められた。掘り方は、主柱穴周辺が深く掘り下げられ、主柱穴自体にも掘り方を持っている。壁溝は、幅18～22 cm、深さ4～6 cmでほぼ全周するとみられる。貯蔵穴は検出されなかった。ピットはP 1～3の3本が確認され、いずれも主柱穴である。P 1は柱底の径27 cm、深さ82 cmで、南側に径90 cmの掘り方を持つ。P 2は柱底の径34 cm、深さ64 cmで、東側に径82 cmの掘り方を持つ。掘り方の上部は漏斗状に広がっている。また、P 2の東側では径68 cm、深さ121 cmのピットが検



出され、主柱穴の付け替えが行われたようである。P 3は南西側半分が調査区外に延びるが、柱底の径27cmが東側に寄り、径66cmの掘り方を持ち、深さは74cmである。カマドは北東壁の中央に付設され、煙道部は壁を27cm程掘り込んでいる。焚口部から煙道部までの全長は129cm、袖部の最大幅は134cmである。袖部の構築材は灰黄褐色粘質土と砂質土の混土で構築され、粘質土の割合がかなり高い。火床部は長さ71cm、

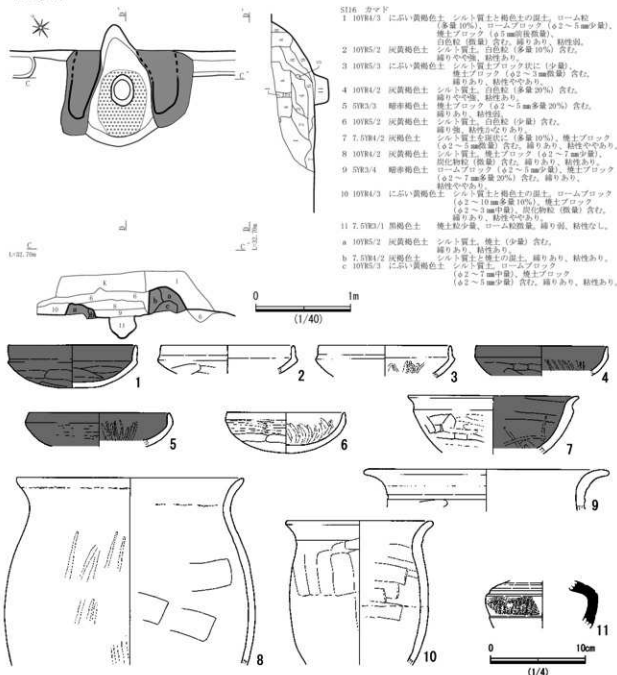


第35図 S116 遺構実測図(1)

幅62cm、深さ3cm程の楕円形で浅く掘り窪められ、中央が赤変硬化していた。また、火床部の中央には径32×24cm、深さ30cm前後の小ピットが認められた。

遺物は、419点・7.497gが炭化材と混在して出土している。その内、須恵器が甕・壺類11点で、それ以外は土師器である。土師器では坏類が141点と比較的多い。1～3の坏は須恵器模倣形態で口縁部直下に段を持つが、口縁部は直立気味で段も明瞭さに欠ける。1のみが内外面に漆塗りの黒色処理である。4～6の坏は無段有種丸底形態で、こちらも内湾度が弱まっている。いずれも内外面に漆塗りの黒色処理である。7の鉢にも内面に漆仕上げである。8～10は土師器の甕で、8は胴部外面に、9は口縁部にミガキの痕跡があり、甕の可能性もある。10の土師器甕はやや小型である。11は甕の破片で、櫛歯状工具で細かく波状の

### S116 カマド



第36図 S116 遺構実測図(2)及び遺物実測図

文様が施されている。器壁は厚いが胎土があまり精良ではない。

土師器坏をみると、全体にSI09の坏群よりは器高が低目で、1～3などは口縁部直下の段が弱まっていることに加え、須恵器産の時期を併せて考えると、本跡の時期は7世紀中葉～後葉であろう。

第19表 SI16 遺物観察表

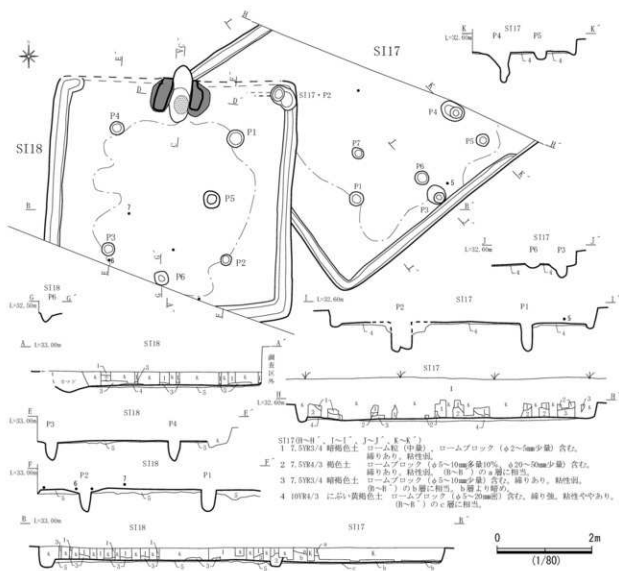
図面番号	種類 器種	口縁 器高 底径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 杯	13.5 4.6	口縁部～底面、約90%存。内外面滑塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。底部～底部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナズ。	雲母、石英微量、長石微量	7.53R1/2肌色 / 7.53R2/1肌	酸化鉄 良好	埋土
2	土師器 杯	(14.0) 5.0	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナズ。体部の外面はヘラケズリ。内面は横ナズ。	雲母、石英、長石	10YR5/3肌色・黄褐色 / 10YR4/2肌灰褐色	酸化鉄 良好	埋土
3	土師器 杯	(14.0) 5.4	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナズ。体部の外面はヘラケズリ。内面は放射状の線なミガキ。	雲母、石英	7.53R6/4暗 / 7.53R6/4に灰い肌	酸化鉄 良好	埋土
4	土師器 杯	(13.8) 5.1	口縁部～体部片。内外面滑塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。体部の外面はヘラケズリ。内面は螺旋状の線なミガキ。	雲母、砂粒	7.53R2/2肌褐色 / 7.53R2/1肌褐色	酸化鉄 普通	埋土
5	土師器 杯	(15.0) 5.6	口縁部～体部片。内外面滑塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。体部の外面はヘラケズリ後横位のミガキ。内面は放射状の線なミガキ。	雲母、砂粒、砂 粒少量	10YR3/2肌褐色 / 10YR4/2肌灰褐色	酸化鉄 普通	埋土
6	土師器 杯	12.5 4.3	ほぼ完整。口縁部をわずかに欠損。口縁部は内外面横ナズ。底部～底部の外面はヘラケズリ後体部のみ横位のミガキ。内面は螺旋状のミガキが深めに入る。	雲母、石英、白 色粒	7.53R2/1肌褐色 / 7.53R2/2肌褐色	酸化鉄 良好	埋土
7	土師器 鉢	(17.8) 6.9	口縁部～体部片。内面の黒色処理は滑塗りに。口縁部は内外面横ナズ。体部の外面はヘラケズリ後ミガキ。内面はヘラナズ後まばらなミガキ。	雲母、砂粒	2.53R5/2肌灰黄 / 10YR1/7肌	酸化鉄 普通	埋土
8	土師器 環	(24.0) (19.8)	口縁部～胴部。29%存。口縁部は内外面横ナズで輪溝縁が浅く。胴部の外面はまばらなミガキで焼砂が多量に付着。内面はヘラナズ。	雲母、石英、長 石、白色粒	10YR6/4に灰い肌 / 10YR1/7肌	酸化鉄 良好	床
9	土師器 環	(25.8) 6.3	口縁部片。内外面横ナズで内面にわずかなミガキ。胴部上面の外面にヘラケズリ。	雲母、石英、長 石、白色粒	7.53R2/2肌褐色 / 7.53R2/2肌褐色	酸化鉄 良好	埋土
10	土師器 環	15.0 5.3	口縁部～胴部。29～30%存。口縁部は内外面横ナズ。胴部の外面は横位のヘラケズリ。内面は横位のヘラナズ。	雲母、白色粒、 砂粒	7.53R6/4に灰い肌 / 7.53R6/4に灰い肌	酸化鉄 普通	床
11	須恵器 壺	(5.0) —	体部片。コラロ彫刻。体部上半に2条の沈線と並走。沈線間に細かな波状の彫刻あり。	石英、長石、 チャート	N4 / M5 / N5 / K5	還元鉄 良好	埋土

### S I 1 7 (第37・38図、第20表、写真図版6・17)

検出位置は、7区南側のG5・H5・6グリッドである。全体に耕作によるトレンチャーで攪乱を受けており、床面まで達していた。北東側が調査区外になるため、正確な形状や規模は把握されなかった。また西側でSI18に切り込まれていた。検出された部分や主柱穴の配置から、平面形は方形を呈すると考えられ、規模は東西軸が現存値最大で5.12m、南北軸が5.58mと推定される。主軸方向はN-38°-Wを示す。壁はほぼ直立し、壁高は28～34cmである。覆土は3層に分層される自然堆積である。床面は平坦に貼り床が施され、南西壁際を除き顕著な硬化面が認められた。壁溝は、幅20～26cm、深さ6～8cmでほぼ全周するとみられる。貯蔵穴、カマド等の付帯施設は検出されなかった。ピットは7本が確認され、P1・2・4の3本が主柱穴である。P1は径30cm、深さ60cm。P2はSI18の掘り方から検出され、径25cm、深さ62cmと推定される。北西側で径36cm、深さ56cmと推定されるピットが重複し、P2は付け替えられた柱穴の可能性もある。P4はやや歪な形状で径50×29cm、深さ63cmである。主柱穴以外のピットは4本あり、P3は径42×32cm、深さ28cmで、南東壁の中央にあって、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5～7は径20cm前後、深さ5～12cmの小ピットである。掘り方では、特に深く掘り下げられた部分はなかった。

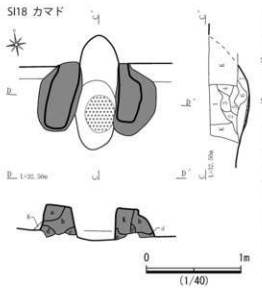
遺物は、63点・1,118gが出土した。土師器が主体であるが小破片が多い。坏類は31点で変類の28点を点数で上回っている。1は須恵器模倣形態の坏、2～4は無段有稜丸底形態の坏で、4は漆塗りの黒色処理がなされず、外面に丁寧なミガキが施されている。5の胎土は精良で、木葉痕が施されている。

土師器坏が全体にやや小振りであることから、本跡の推定される時期は7世紀中葉～後葉と考えられる。

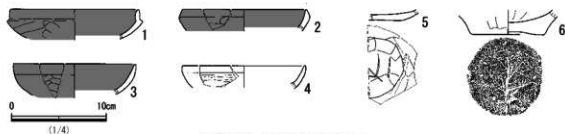


- SI17 (a~h, i~j, k~l, m~n)
- 1 7.5YK3/4 暗褐色土 ローム粒(中量)、ロームブロック(φ2~5mm少量)含む、締りあり、粘性弱。
  - 2 7.5YK4/3 褐色土 ロームブロック(φ5~10mm多量10%、φ20~50mm少量)含む、締りあり、粘性弱、(h~j)のa~cのみに見出。
  - 3 7.5YK3/4 暗褐色土 ロームブロック(φ5~10mm少量)含む、締りあり、粘性弱、(a~h)のa~dのみに見出。b層上層部のみ。
  - 4 10YR4/3 に近い黄褐色土 ロームブロック(φ5~20mm)含む、締り強、粘性中やあり、(h~j)のc層に相当。

- SI18 (a~k, l~n, o~p, q~r, s~t, u~v)
- 1 7.5YK3/3 暗褐色土 ローム粒(少量)、ロームブロック(φ2~3mm少量)、炭化植物(微量)含む、締りあり、粘性弱。
  - 2 10YR5/2 灰黄褐色土 シルト質土、締りあり、粘性弱。
  - 3 10YR3/2 黒褐色土 ローム粒(少量)、ロームブロック(φ2~3mm少量)、炭化植物(少量)、焼土粒(微量)含む、締りあり、粘性弱。
  - 4 5YR4/6 赤褐色土 ロームブロック(φ2~5mm多量10%)、焼土粒(微量)含む、締り中あり、粘性弱。
  - 5 10YR4/3 に近い黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)含む、締り強、粘性中やあり、SI17(h~j)。
  - 6 2.5YR4/6 褐色土 ローム粒(中量)、ロームブロック(少量)含む、締りあり、粘性弱。
  - 7 5YR4/3 褐色土 ローム粒(多量10%)、ロームブロック(φ2~5mm中量)含む。
  - 8 10YR4/3 に近い黄褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)含む、締り強、粘性中やあり、SI18 (a~t)のk~n。
  - 9 10YR4/2 灰黄褐色土 シルト質土、ローム粒(少量)、焼土ブロック(φ2~5mm多量10%)、炭化植物(微量)含む、締りあり、粘性弱。
  - 10 10YR4/2 灰黄褐色土 シルト質土、ローム粒(少量)、ロームブロック(φ2~3mm少量)、焼土粒(微量)含む、締りあり、粘性弱。
  - 11 10YR3/2 黒褐色土 シルト質土、焼土ブロック(φ2~5mm少量)含む、締りあり、粘性あり、ロームブロック(φ2~3mm少量)、焼土ブロック(φ2~3mm少量)含む、締りあり、粘性弱。
  - 12 5YR4/3 暗褐色土 ローム粒(中量)、ロームブロック(少量)含む、締りあり、粘性弱。
  - 13 5YR4/3 褐色土 ローム粒(少量)、ロームブロック(φ2~3mm少量)含む、締りあり、粘性弱。
  - 14 5YR4/6 赤褐色土 シルト質土と焼土の混成土(多量50%)含む、締り中、粘性なし。
  - 15 5YR4/3 褐色土 ロームブロック(φ2~3mm多量10%)、炭化植物(微量)含む、締りあり、粘性中やあり。
  - 16 10YR5/2 灰黄褐色土 シルト質土と褐色土の混成土、焼土(多量10%)、焼土ブロック(φ2~3mm少量)、炭化植物(少量)含む、締りあり、粘性弱。
  - 17 5YR4/3 暗褐色土 シルト質土と暗褐色土の混成土、ロームブロック(φ2~5mm少量)、焼土ブロック(φ2~3mm少量)含む、締りあり、粘性弱。
  - 18 5YR4/3 褐色土 シルト質土と褐色土の混成土、ロームブロック(φ2~10mm中量)含む、締りあり、粘性中やあり。
  - 19 5YR4/6 赤褐色土 シルト質土と焼土の混成土、締りあり、粘性弱。



第37図 SI17・18 遺構実測図



第 38 図 S117 遺物実測図

第 20 表 S117 遺物観察表

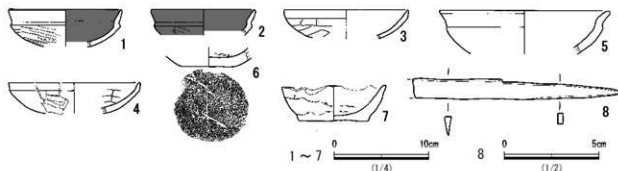
図面 番号	種類 形態	口縁 器高 底径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 片	(13.30 C3.1) —	口縁部～体部片。内外面漆塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。体部の外面はヘラケズリ。内面は横ナズ。	雲母、白色粘	7.00R/1黒焼 7.00R/2黒焼	酸化炭 素焼	2区土壌
2	土師器 片	(13.40 C2.2) —	口縁部片。内外面漆塗りの黒色処理。口縁部の内外面横ナズ。口縁部直下の外面にヘラケズリ。内面は横ナズ。	雲母、石英	7.00R/1黒焼 7.00R/2黒焼	酸化炭 素焼	2区土壌
3	土師器 片	(13.40 — C3.3) —	口縁部～体部片。内外面漆塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズで外面にヘラケズリ。体部の外面はヘラケズリ。内面は横ナズ。	雲母	10YR2/1黒 10YR3/1黒焼	酸化炭 素焼	2区土壌
4	土師器 片	(13.40 C2.4) —	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナズで内面に横ナズ。体部外面は横位のミガキ。内面は横ナズ。	雲母少量	7.00R/4(1.5)黒 7.00R/6黒	酸化 良好	カマド
5	土師器 鉢?	(1.1) —	底面片。体部下縁はヘラケズリ後ミガキ。底部の外面はヘラケズリ後本葉痕。内面はヘラケズリ。	雲母、砂粒	7.00R/4黒 7.00R/6黒	酸化炭 素焼	カマド
6	土師器 蓋	(2.6 8.0)	底面片。胴部下縁はヘラケズリ。底部の外面には本葉痕。内面はヘラケズリ。	雲母、石英、白 色粘	7.00R/3黒 7.00R/3(1.5)黒	酸化炭 素焼	カマド

S I 1 8 (第 37・39 図、第 21 表、写真図版 6・17)

検出位置は、7 区西側の G 5・H 5 グリッドである。全体に耕作によるトレンチャーで攪乱を受けており、床面まで達していた。北壁はこの攪乱によってほとんど消失している。北東側では S117 を切り込んで構築されている。南西隅が調査区外になるが、平面形は方形を呈し、規模は東西軸が 5.18 m、南北軸が 5.08 m を測る。主軸方向は N - 4° - E を示す。壁は直立し、壁高は 30 cm である。覆土は 4 層に分層される自然堆積である。床面は平坦に貼り床が施され、主柱穴間の住居中央部では顕著な硬化面が認められた。床直上に炭化物が散っている部分が認められ、焼失家屋の可能性も考えられるが、炭化物は少量で限定的な範囲に留まる。壁溝は、幅 22 ～ 28 cm、深さ 8 ～ 14 cm でほぼ全周するとみられる。貯蔵穴は検出されなかった。ピットは 6 本が確認され、P 1 ～ 4 が主柱穴である。P 1 は径 35 cm、深さ 48 cm、P 2 は径 25 cm、深さ 47 cm、P 3 は径 28 cm、深さ 38 cm である。P 4 は径 28 cm、深さ 43 cm である。主柱穴以外のピットは、P 5 が径 28 cm、深さ 18 cm で P 2・3 間の南寄りであり、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6 は径 38 cm、深さ 12 cm の小ピットである。掘り方は、北壁際が深く掘り下げられていた。カマドは北壁のほぼ中央に付設され、煙道部は壁を 30 cm 程掘り込んでいた。焚口部から煙道部までの全長は 121 cm、袖部の最大幅は 124 cm である。袖部の構築材は灰黄褐色粘質土と砂質土の混土である。火床部は長さ 72 cm、幅 42 cm の楕円形で、深さ 5 cm 程浅く掘り窪められ、中央が赤変硬化していた。

遺物は、127 点・1,711g が出土した。その内、須恵器は甕類の小破片 8 点のみで、それ以外は土師器坏類が 31 点、甕類が 85 点である。1・2 は須恵器模倣形態、3・4 は無段有稜環で、漆塗りの黒色処理は 1・2 に限られる。5・6 は鉢と思われる、いずれも底部に木葉痕が認められる。

本跡の時期は、S117 との切り合い関係に加え、土師器坏の形態を見ると、S117 と比較してさらに小振りになり、口縁部が開き気味の立ち上がりになっていることを考慮すると、7 世紀後葉と考えられる。



第39図 SI18 遺物実測図

第21表 SI18 遺物観察表

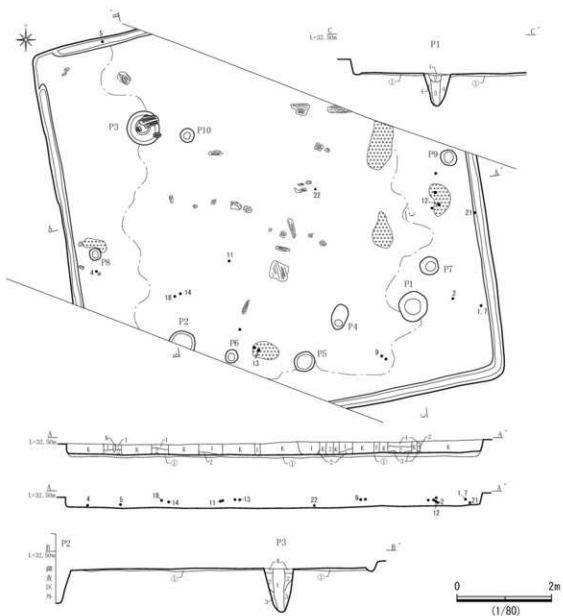
図面番号	種類 品類	口縁 器高 表径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 杯	(12.0) (4.0)	口縁部～体部片。内面は清塗りの黒色処理か。口縁部は内外面横ナデ。体部の外面はヘラズリ後ミガキ。内面は横ナデ。	雲母、石英、砂 礫	10YR3/2黒褐 / 7.5YR4/3褐	酸化赤 良好	②区層土
2	土師器 杯	(11.0) (2.7)	口縁部片。内外面清塗りの黒色処理。内外面横ナデ。	雲母多量、石英	7.5YR3/2黒褐 / 7.5YR2/1黒	酸化赤 良好	②区層土
3	土師器 杯	(13.0) (3.0)	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナデ。体部の外面はヘラズリ。内面は横ナデか。摩耗顕著。	砂粒多量	7.5YR3/6明褐 / 7.5YR5/6明褐	酸化赤 良好	カマド
4	土師器 杯	(14.0) (3.2)	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナデ。体部の外面はヘラズリ後ミガキ。内面はヘラナデ。	雲母	10YR5/4(土)黄褐 / 10YR6/4(土)黄褐	酸化赤 良好	②区層土
5	土師器 鉢V	(18.0) (4.0)	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナデ。体部の外面はヘラズリか。内面はヘラナデか。	雲母、砂礫	7.5YR3/1黒褐 / 7.5YR4/3褐	酸化赤 普通	②区層土
6	土師器 鉢V	(2.0) 6.9	底部片。外面には木炭焼。表面の摩耗顕著。内面は清塗りの黒色処理か。ヘラナデ後ミガキ。	雲母、砂粒	10YR5/2(土)黄褐 / 10YR3/1黒褐	酸化赤 普通	③区層
7	土製品 手捏土器	11.0 3.8 7.5	口縁部～底部。90%存。外面は指間によるナデか。内面はヘラナデか。輪 模痕が顕著に残る。	石英、長石	10YR7/4(土)黄褐 / 10YR7/4(土)黄褐	酸化赤 良好	③区層土
8	鉄製品 刀子	長さ：30.8cm、幅：1.0cm、厚さ：0.2～0.3cm、重量：14.3g。 刃部先端欠損。					③区層土

SI19 (第40・41区、第22表、写真図版6・18)

検出位置は、7区南側のG4グリッドである。全体に耕作によるトレンチャーで攪乱を受け、床面まで達していた。北東側の大部分と南西側が調査区外になるため、正確な形状や規模は把握されないが、検出された部分や主柱穴の配置から、平面形は方形を呈し、規模は東西軸が8.90m、南北軸が推定で8.64mと推定される。主軸方向はN-11°-Wを示す。壁はやや外傾し、壁高は22～25cmである。覆土は3層に分層される自然堆積である。床直上には炭化材が散在し、焼失家屋であることがわかった。北東寄りでは厚さ5～10cmの焼土が堆積していた。床面は平坦に貼り床が施され、東西壁寄りを除く中央部に顕著な硬化面が認められた。壁溝は、幅14～20cm、深さ4～6cmで全周するとみられる。ピットは10本が検出され、P1～3は主柱穴で、北東側の1本は調査区外にあると考えられる。P1の柱痕は径27cm、深さ69cmで、径60cmの掘り方を持つ。P2の柱痕は確認できなかったが、径53cmの掘り方が検出された。P3は柱痕の径26cm、深さ71cmで、南側に径72cmの掘り方を持つ。主柱穴以外では、P4が径44cm、深さ38cmで、南西壁寄り中央にあり、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5は径30cm、深さ42cmの円形、P6は52×30cm、深さ19cmのやや歪な小ピットである。P7～10は径25～40cm、深さ10～15cmで、掘り方調査時に確認された小ピットで、いずれも不規則な配置ではあるが、補助柱穴の可能性はある。掘り方では、特に深く掘り下げられた部分はなかった。調査区内での貯蔵穴やカマド等の付帯施設は検出されな

かったが、調査区外にかかる土層からカマドの構築材と思われる灰黄褐色粘質土がわずかに認められ、カマドが北壁に存在することは間違いないであろう。

遺物は、601点・12,169gが炭化材・焼土と混在して出土した。土器の内訳は、土師器は坏類が171点、甕類が402点、須恵器は坏類が6点、甕類・壺類が13点である。1～5は須恵器模倣形態の段を持つ坏であるが、1以外は扁平気味で、5は平底に近い。6～8の無段有稜丸底坏は、6の体部に丸みが強く口縁部

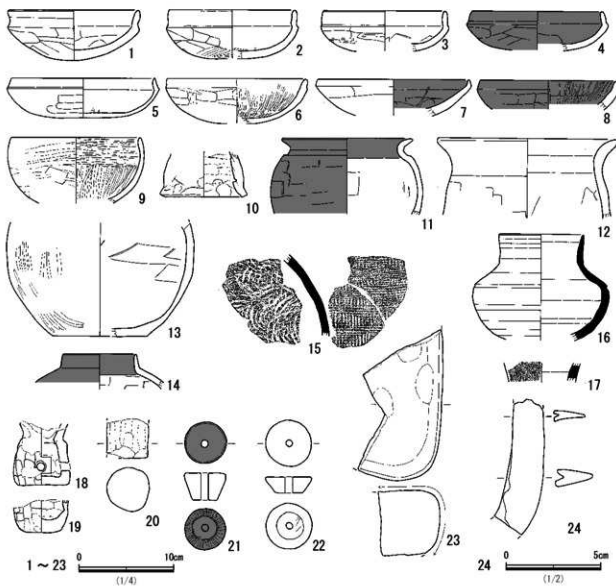


S119	1 7.5BR/2 黒褐色土	ローム粒 (少量)、ロームブロック (φ2~10mm少量)、炭化物粒小〜中塊をそれぞれ (少量)、焼土粒 (少量) 含む。締りや中塊、粘性弱。
	2 7.5BR/3 暗褐色土	ローム粒 (多量20%)、ロームブロック (φ2~10mm少量)、炭化物粒 (少量) 含む。締りあり、粘性弱。
	3 7.5BR/4 褐色土	ローム粒 (少量)、ロームブロック (φ5~10mm少量) 含む。締りややあり。粘性ややあり。
	① 10BR/4 褐色土	ロームブロック (φ10~30mm多量50%) 含む。締り強、粘性あり。締り劣。
S119 P1	1 7.5BR/2 黒褐色土	ローム粒 (少量)、炭化物粒 (微量) 含む。締りやや強、粘性弱。
	2 7.5BR/3 褐色土	ローム粒 (少量)、ロームブロック (φ2~5mm少量)、炭化物粒 (微量) 含む。締りあり、粘性弱。
	3 7.5BR/3 暗褐色土	ロームブロック (φ2~5mm中量) 含む。締りやや強、粘性あり。
	4 10BR/4 褐色土	ローム粒 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm中量) 含む。締りあり、粘性ややあり。
S119 P3	1 7.5BR/2 黒褐色土	ロームブロック (φ2~10mm多量20%) 含む。締りやや強、粘性弱。
	2 7.5BR/6 暗褐色土	ロームブロック (φ2~10mm多量20%) 含む。締りあり、粘性あり。
	3 7.5BR/4 褐色土	ロームブロック (φ5~10mm多量10%) 含む。締りややあり、粘性あり。

第40図 S119 遺構実測図

に厚みを持つものと、体部の立ち上がりが直線的で口縁部が短く先細りになるものがある。7・8は放射状のミガキが施されているが、7は1条のみのミガキ線が直線状に引かれており、S109出土の土師器環(6)同様に十字を施したものと類似する。9は丸く綺麗に内湾し、内外面ともに丁寧なミガキが施された胎土の精良な鉢である。11～13は土師器甕で、11は頸部が大きく括れた形態になり、外面が漆仕上げされた特異な甕である。14は土師器の短頸壺でこちらも打外面に漆が塗られている。15～17は須恵器である。15は平行タキで調整された後、カキメが施された甕類の胴部片である。16は小型で口縁部が直口した壺になるが、胎土があまり精良ではない。17は細片であるが、細かい波状文が丁寧に施され、頸部部片の可能性がある。18のミニチュア土器は須恵器甕を模したものであろうか。19は丸底の手捏土器である。21・22は紡錘車で、ともに床面からの出土である。21は土製で全体に漆が塗られ、孔部中には糸巻き棒の一部が炭化材となって残っていた。24の鉄製品は錐・鎌先の破片と考えられる。

出土遺物から推定される時期は、須恵器を模倣した土師器環の形態が、1のように古い様相はうかがえるものの、全体的には平底を志向していることから、7世紀中葉～後葉と考えられる。



第41図 S119 遺物実測図

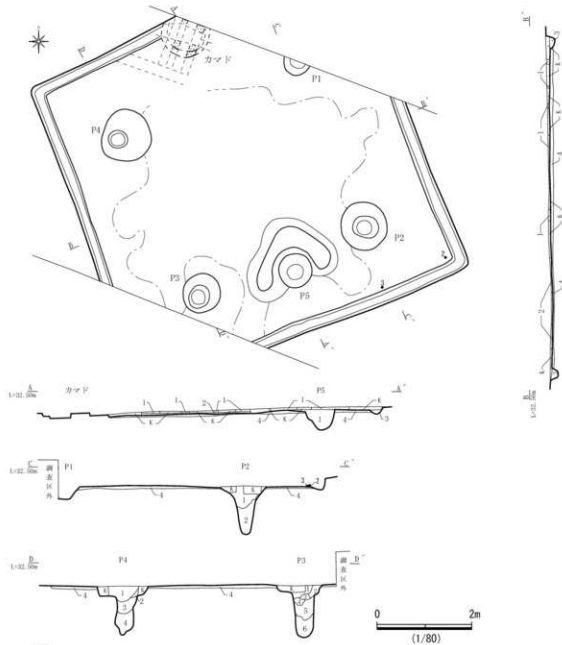


第22表 S119 遺物観察表

調査番号	種類 部類	口縁部 高麗度	部位・残存率・調整技法等	胎土	色澤 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 杯	13.8 5.3	ほぼ定形。口縁部をわずかに欠損。口縁部は内外面横ナズ。体部～底部の外表面はヘラケズリ、内面はヘラナズ。	雲母、砂粒	5YR5/6明赤褐 / 5YR4.6赤褐	酸化赤 良好	②区礎土
2	土師器 杯	(13.2) (5.1)	口縁部～体部、40%存。口縁部は内外面横ナズ。体部～底部の外表面はヘラケズリで底面はくまき。内面は底面のみ一方方向にくまき。	雲母、石英、白 色粒、黒色粒	7.5YR5/6明褐 / 5YR4.6赤褐	酸化赤 普通	②区礎土
3	土師器 杯	(12.80) (4.2)	口縁部～体部片。口縁部は内外面横ナズ。体部～底部の外表面はヘラケズリ後下平はくまき。内面はヘラナズ。	雲母、白色粒	7.5YR4.6赤褐 / 5YR4.6赤褐	酸化赤 良好	②区礎土
4	土師器 杯	(13.6) (4.1)	口縁部～体部、20%存。内外面滑塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。体部～底部の外表面はヘラケズリ後底面はくまき。内面はヘラナズ。	雲母、砂粒	10YR1.7/黒 / 10YR2/黒	酸化赤 良好	②区床
5	土師器 杯	15.0 4.2	口縁部～体部、40～50%存。口縁部は内外面横ナズ。体部～底部の外表面はヘラケズリ後くまき。内面はヘラナズ後底面にくまき。	雲母、石英、白 色粒	5YR5/6明赤褐 / 7.5YR5/6明褐	酸化赤 良好	①・②区 礎土
6	土師器 杯	(14.6) (4.7)	口縁部～体部、20～30%存。口縁部は内外面横ナズで内面は厚肌。体部の外表面はヘラケズリで底面は厚肌。内面は放射状のくまき。	石英数多量、白色 粒少量	10YR5/2に多い黄褐 / 10YR6/2に多い黄褐	酸化赤 良好	②区礎土
7	土師器 杯	(15.9) (3.6)	口縁部～体部、20%存。内面滑塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。体部の外表面はヘラケズリで縁が一部僅かにくまき。内面はヘラナズ後1条のくまき線。	雲母、石英、黒 色粒	10YR7/2に多い黄褐 / 10YR2/黒	酸化赤 良好	①・②区 礎土
8	土師器 杯	(14.4) (3.0)	口縁部～体部片。内外面滑塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。体部の外表面はヘラケズリ。内面は放射状のくまき。	雲母、石英、長 石	10YR3/黒褐 / 5YR2/黒	酸化赤 良好	①区礎土
9	土師器 鉢	(13.5) (7.0)	口縁部～体部、20～30%存。外表面はヘラケズリ後横線の密なくまき。内面は口縁部少横線の密なくまき。体部は放射状の密なくまき。	白色粒数多量、砂 粒少量	5YR6/6褐 / 5YR5/6明赤褐	酸化赤 良好	瓦割取上げ
10	土師器 高杯	— (4.8) 4.0	頸部片。接吻部は折し直し、隙間を面取り。	砂粒多量	7.5YR5/4に多い褐 / 7.5YR5/4に多い褐	酸化赤 良好	②区礎土
11	土師器 甕	(13.4) (8.0)	口縁部～胴部片。外表面は滑塗りの黒色処理で口縁部内面に及ぶ。口縁部は内外面横ナズ。胴部の外表面はヘラケズリ後くまき。内面はくまき	雲母、石英、長 石	7.5YR3/1原褐 / 7.5YR4/2原褐	酸化赤 良好	②区礎土
12	土師器 甕	(18.7) (8.4)	口縁部～胴部片。口縁部～胴部は内外面横ナズ。胴部の外表面はヘラケズリ。内面はヘラナズ。	雲母、石英、長 石	10YR6/2に多い黄褐 / 10YR4/1原赤	酸化赤 良好	②区礎土
13	土師器 甕	— (12.0) (10.0)	胴部～底部片。胴部の外表面は縦位～斜位のくまき。内面はヘラナズ。底部の外表面はヘラナズ。	雲母、石英、白 色粒	10YR6/2に多い黄褐 / 5YR5/4に多い赤褐	酸化赤 良好	②区礎土
14	土師器 短頸甕	(7.4) (3.7)	口縁部～胴部片。外表面は滑塗りの黒色処理で口縁部内面に及ぶ。口縁部は内外面横ナズ。胴部の外表面は丁寧なくまき。内面はヘラナズ。	雲母、石英、長 石	7.5YR1.7/黒 / 10YR4/1原赤	酸化赤 良好	②区礎土
15	褐色器 甕	— (8.6)	胴部片。外表面は平行タタキ後底面定してキメを加える。内面は同心円状の当て具痕。	石英、白色粒	2.5YR1/黄灰 / 5Y5/1灰	還元赤 無染	①区礎土
16	褐色器 甕	— (11.2)	口縁部～体部、30～40%存。コロボ型製。胴部に自然釉がわずかに付着。胴部と体部の風神に成層を認らる。体部下平は回転ヘラケズリ。	石英、長石	N4 / 灰 / N4 / 灰	還元赤 無染	①・②区 礎土
17	褐色器 甕	— (2.1)	胴部片。細く浅い底状文。	雲母少量、石 英、長石	N3 / 灰 / N4 / 灰	還元赤 無染	①区礎土
18	土製品 ミニチュ ア土器	— (6.8) 5.0	ほぼ定形小。胴部は横ナズ。胴部～底部は縦位のヘラケズリ。体部下平に色粒	石英、長石、白 色粒	10YR4/2灰黄褐 / 5YR3/2原褐	酸化赤 普通	②区礎土
19	土製品 半粒土器	— (3.4)	体部～底部片。外表面はヘラケズリと指痕による整形。内面は指痕のみの整形。底面は丸底気味。	雲母、砂粒	10YR3/黒褐 / 10YR3/黒褐	酸化赤 普通	②区礎土
20	土製品 文箱	長さ：(4.2) cm、 幅：4.5～4.7cm、 重量：87.8g、	両側面欠損。表面は縦位のヘラケズリで円柱状に整形。				掘り方
21	土製品 紡輪	外形、上面径：4.4cm、 下面径：2.6cm、 孔径：0.8cm、 厚さ：2.9cm、 重量：96.9g、	全面に滑塗りの黒色処理。胴部に縦位のくまき				②区床
22	土製品 紡輪	外形、上面径：4.9cm、 下面径：2.8cm、 孔径：0.8cm、 厚さ：1.7cm、 重量：51.0g、	石材・滑石製。表面は丁寧に研磨・仕上げみされる。				①区床
23	土製品 磁石	長さ：(16.0) cm、 幅：(8.0) cm、 厚さ：1.7cm、 重量：1370.0g、	石材・砂質。全体に被膜。石蓋状の研削面に指痕の浅い窪みあり。				②区礎土
24	漆製品 鉛・鍍金	長さ：(7.1) cm、 幅：1.7～2.0cm、 厚さ：0.6～0.9cm、 重量：20.9g、	右耳部片。刀痕及び左耳部は欠損。木製枠をはめ込むV字溝残存。				①区礎土

S120 (第42・43図、第23表、写真図版6・18)

検出位置は、7区西側のF2・3、G2・3グリッドである。全体に耕作によるトレンチャーで攪乱を受け、



S120

- 1 7.53K3/3 暗褐色土 ローム粒(少量)、ロームブロック(φ2~5mm中量)含む、締りあり、粘性弱。
- 2 7.53K4/6 褐色土 ロームブロック主体、締り強、粘性弱。
- 3 7.53K3/3 褐色土 ローム粒(中量)、ロームブロック(φ2~3mm少量)含む、締りあり、粘性弱。
- 4 1018K4/3 褐色土 ロームブロック(φ5~20mm多量40%)含む、締り強、粘性ややあり。

S120 P1

- 1 7.53K3/3 暗褐色土 ローム粒(少量)、ロームブロック(φ2~5mm少量)含む、締りやや弱、粘性弱。

S120 P2

- 1 7.53K3/3 暗褐色土 ローム粒(中量)、ロームブロック(φ5~10mm少量)含む、締りやや弱、粘性弱。
- 2 1018K4/3 にごり・黄褐色土 ロームブロック(φ2~5mm多量10%、φ10~20mm少量)含む、締り強、粘性あり。

S120 P3

- 1 7.53K3/3 暗褐色土 ローム粒(中量)、ロームブロック(φ5~10mm少量)含む、締りやや弱、粘性弱。
- 2 7.53K3/3 暗褐色土 ローム粒(多量10%)含む、締りやや弱、粘性弱。
- 3 7.53K3/3 茶褐色土 ロームブロック(φ5~10mm多量10%)、炭化物小塊(少量)含む、締りやや弱、粘性ややあり。
- 4 1018K4/3 にごり・黄褐色土 ローム粒(多量10%)、ロームブロック(φ2~5mm多量10%)含む、締りやや弱、粘性あり。
- 5 1018K4/4 褐色土 ローム粒(少量)、ロームブロック(φ2~5mm少量)含む、締り強、粘性あり。
- 6 1018K4/3 にごり・黄褐色土 ロームブロック(φ2~5mm多量10%、φ20~60mm少量)含む、締り強、粘性あり。

S120 P4

- 1 7.53K3/3 暗褐色土 ローム粒(中量)、ロームブロック(φ2~5mm少量)含む、締りやや弱、粘性弱。
- 2 7.53K4/3 褐色土 ローム粒(少量)、ロームブロック(φ2~5mm少量)含む、締りやや弱、粘性弱。
- 3 1018K4/4 褐色土 ローム粒(少量)、ロームブロック(φ2~5mm少量)含む、締りやや弱、粘性あり。
- 4 1018K4/3 にごり・黄褐色土 ロームブロック(φ2~5mm多量10%、φ10~30mm少量)含む、締り強、粘性あり。

S120 P5

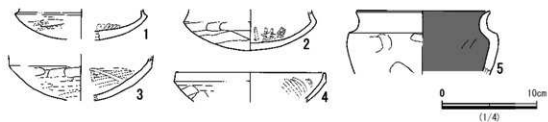
- 1 1018K4/3 褐色土 ロームブロック(φ2~10mm多量10%)含む、締りあり、粘性弱。

第42図 S120 遺構実測図

床面まで達していた。また、西側部分は削平が大きく、壁溝のみの検出である。北東隅と南西隅は調査区外になるが、検出された部分や支柱穴の配置から、平面形は方形を呈し、規模は東西軸が7.36 m、南北軸が推定で7.16 mを測る。主軸方向はN-24°-Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は3~20 cmである。覆土は3層に分層されたが、堆積状況は把握できなかった。床面は平坦に貼り床が施され、東西壁寄りから四隅部分を除く中央部に顕著な硬化面が認められた。壁溝は、幅22~25 cm、深さ5~7 cmで全周するとみられる。ピットは5本検出され、P1~4は支柱穴である。P1は北東側の約半分が調査区外にあり、現存値で径57 cm、深さ42 cmと推定される。P2は径101×94 cm、深さ102 cmで漏斗状の断面になる。P3は径87×78 cm、深さ110 cm、P4は径106×103 cm、深さ103 cmである。いずれの支柱穴も大型であるが柱痕は認められなかった。P5は南西壁寄り中央にあり、径80 cm、深さ43 cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。北西側が馬蹄形状に隆起し、硬化も顕著であった。調査区内で貯蔵穴は検出されなかった。掘り方では、特に深く掘り下げられた部分はなかった。カマドは北東壁の中央に付設されているが、削平と攪乱により火床部の一部と袖部の構築材に用いられた灰黄褐色粘質土がわずかに残存しているに留まり、正確な構造は確認できなかった。

遺物は、115点・1,389gが出土した。覆土があまり残存しなかったため、ほとんどの遺物が床直上または支柱穴覆土中からの出土である。須恵器の細片3点以外は全て土師器であった。土師器の内訳は坏類が19点、甕類が93点であった。土師器坏は坏模倣形態で段を持つ1、段が消滅する2があり、口縁部はともに内傾する。無段有稜坏の口縁部は短く直立する。いずれも胎土が類似し、放射状のミガキが多用される。5は頸部の括れが大きい甕の口縁部で、内面が黒色処理されている。

出土遺物から推定される時期は、土師器坏の内、1の段が強く丸底ではあるがやや浅身であること、2の段が退化していることから、7世紀中葉~後葉と考えられる。



第43図 S120 遺物実測図

第23表 S120 遺物観察表

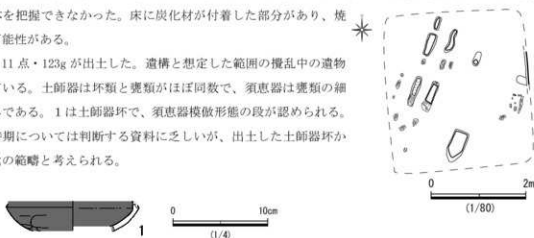
図面番号	輪郭・断面図	口縁部高径	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器坏	(3.3)	口縁部~底部分。口縁部は内外面積ナズ。体部の外面はヘラケズリ後ミガキ。内面は放射状のミガキ。	雲母、白色粘	10YR5/2灰黄褐 / 10YR5/3.1.5.5黄褐	酸化赤黄褐色	P5
2	土師器坏	(4.2)	口縁部~底部分。内外面塗塗りの黒色処理が。口縁部は内外面積ナズ。体部の外面はヘラケズリ後ミガキ。内面は放射状のミガキ後横位の細なミガキ。	雲母、白色粘	7.5YR3/1黒褐 / 7.5YR4/2灰褐	酸化赤黄褐色 良好	②区床
3	土師器坏	(4.8)	口縁部~底部分。内外面塗塗りの黒色処理が。口縁部は内外面積ナズ。体部の外面はヘラケズリ後ミガキ。内面は放射状のミガキ後横位の細なミガキ。	雲母、白色粘	10YR3/2黒褐 / 10YR3/3暗褐	酸化赤黄褐色	②区床
4	土師器坏	(14.8) (5.1)	口縁部~体部分。内外面塗塗りの黒色処理が。口縁部は内外面積ナズ。体部の外面はヘラケズリ。内面は放射状のミガキ。	雲母、白色粘	7.5YR3/2黒褐 / 7.5YR3/1黒褐	酸化赤黄褐色	カマド
5	土師器甕	(14.0) (6.7)	口縁部~頸部分。内面の黒色処理は塗塗り。口縁部は内外面積ナズ。体部の外面はヘラケズリ。内面はヘラナズ。	雲母、6雲	10Y5/2灰黄褐 / 10YR2/1黒	酸化赤黄褐色	P2

S I 2 1 (第44図、第24表、写真図版6・18)

検出位置は、7区西端のF1グリッドである。全体に削平されたうえ、耕作によるトレンチャーで擾乱が激しく、床面の大部分を壊していた。そのため、わずかに残存する床の硬化した部分を検出するのみで、住居跡の全体を把握できなかった。床に炭化材が付着した部分があり、焼失家屋の可能性がある。

遺物は、11点・123gが出土した。遺構と想定した範囲の擾乱中の遺物も含まれている。土師器は坏類と甕類がほぼ同数で、須恵器は甕類の細片1点のみである。1は土師器坏で、須恵器模倣形態の段が認められる。

本跡の時期については判断する資料に乏しいが、出土した土師器坏から7世紀代の範疇と考えられる。



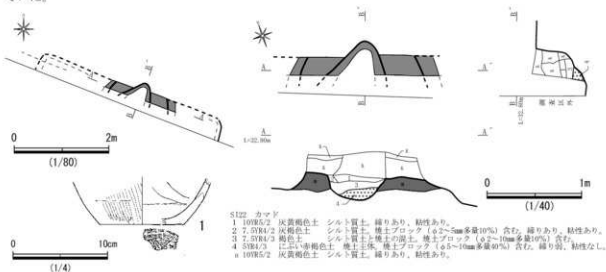
第44図 S121 遺構及び遺物実測図

第24表 S121 遺物観察表

図面番号	種類 器種	口縁 器高 透視	部位・残存率・測繪技法等	粘土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 坏	(C)2 —	体部片、内外面透視の黒色処理。大部の外面はヘラケズリ、内面は横ナズ。	雲母、石英、白 色粘	7. D3K2/2黒褐色 7. D3K3/1黒褐色	酸化系 普通	硬化材上面

S I 2 2 (第45図、第25表、写真図版6・18)

検出位置は、7区東端のJ1グリッドである。大部分が調査区の南東側にあり、正確の規模や形状は把握できなかった。北東・北西隅部分にかかる壁とカマドのみが検出されたが、耕作によるトレンチャーの擾乱が激しく、カマドは袖の一部が辛うじて残存しているに過ぎない。規模は、壁から推定される東西軸が4.10m前後、南北軸は現存値で0.42mである。カマドは北東壁のほぼ中央に付設されたとみられ、袖部の構築材には灰黄褐色粘質土と砂質土の混土が用いられ、火床には焼土ブロックを主体とする層が20cm程堆積していた。



第45図 S122 遺構及び遺物実測図

遺物は、13点・307gが出土した。土師器は甕類が主体で、須恵器は甕類の細片1点のみである。1は土師器甕の底部片で常総甕に特有の縦位ミガキが密に施されている。

本跡の時期は、遺物から判断するには資料に乏しいが、遺構の主軸やカマドの構築状態からSI05・14に類似することから8世紀代の範疇に収まると思われる。

第25表 SI22 遺物観察表

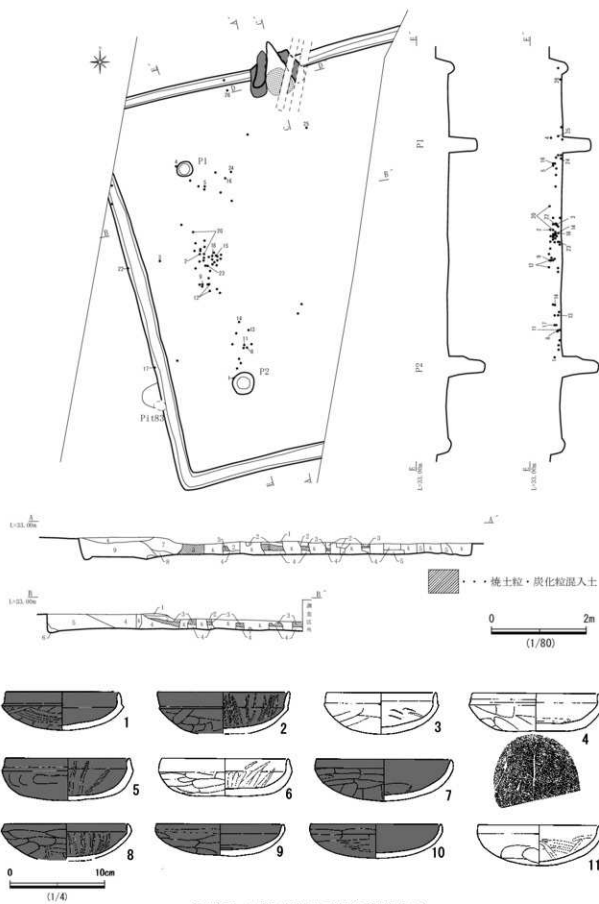
図面番号	種類 器種	口徑 器高 底径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	出土位置
1	土師器 甕	(4.9) (9.0)	胴部～底面片、胴部の外面はミガキ、内面はヘナナザ、底面の外面には本	常陸、石灰、白 色粒	7.0/85/42に濃い焼 /7.0/85/42に濃い焼	酸化赤 普通	炭化材上

### SI23 (第46・47図、第26表、写真図版7・19)

検出位置は、8区ほぼ中央のB2・C2グリッドである。カマドの右袖部から南西隅にかけては耕作によるトレンチャーで攪乱を受け、床面まで達していた。東側の約半分と北西隅が調査区外になるため、正確な形状や規模は把握できなかった。検出された部分や主柱穴の配置から平面形は方形を呈し、規模は東西軸が現存値で5.88m、南北軸が推定で8.36mを測る。東西軸はカマドが中央に付設されると仮定するならば、南北軸とほぼ同様の規模であると推定される。主軸方向はN-17°-Wを示す。壁は直立し、壁高は32cmである。覆土は6層に分層される自然堆積である。3層は焼土・炭化物が多く含まれる層で、遺物の出土はほぼこの層からの出土である。床面は平坦に貼り床が施され、全体に軟弱である。壁溝は、幅21～25cm、深さ4～9cmで全周するとみられる。ピットは2本が検出され、いずれも西側の主柱穴に相当し、東側の2本は調査区外にあると考えられる。P1の柱痕は検出されず径45cm、深さ58cmの掘り方を持つ。P2の柱痕は径23cm、深さ80cmで、径42cmの掘り方を持つ。掘り方では、特に深く掘り下げられた部分はなかった。カマドは北壁の中央に付設されたと考えられ、煙道部は壁を50cm程大きく掘り込んでいる。禁口部から煙道部までの全長は121cm、袖部の最大幅は106cmである。袖部の構築材は褐色粘質土と砂質土の混土が用いられ、砂質土の割合が高い。カマドの掘り方を見ると、凸状に掘り込んだ後、構築材を充填している。火床部は長さ56cm、幅54cm、深さ15cm程の円形で掘り窪められ、焼土が厚く堆積し、底面が赤変硬化していた。

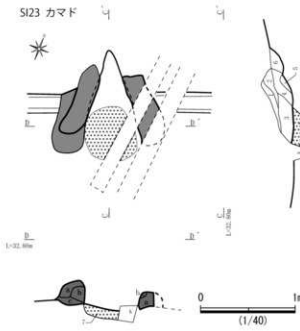
遺物は、866点・16,478gが出土した。土師器が主体で、須恵器は細片11点のみである。土師器の内、坏・鉢類は3層中に集中し、355点が出土している。一方、4・5層で認められるのは土師器の甕類が中心である。1～4は須恵器模倣形態の坏である。5・6も同様の形態とみられるが、ほとんど段が目立たなくなっている。2は口縁部が開き気味になり、4・6は偏平な形態である。7～15は無段有稜丸底形態の坏で、漆塗りによって黒色処理された7・10・13と、黒色処理されない11・12・14・15に大別される。その中で14は半球形態を呈し、15は極端に大振りの平底形態の土器で外面のミガキが非常に丁寧である。これら坏類全体で共通してみられるのは、内面の調整がかなり雑になっていることがうかがわれる。16・17の鉢も大振りで、特に16は外面のミガキ調整が非常に丁寧である。18は形態から甕・甗類の可能性もあるが、器壁が薄手で細かいミガキの調整から鉢であろうか。19～25は甕の破片で、23～25など小型の底部片が目立つ。26は甕の下半部で内外面ともに縦位のミガキが施されている。

出土遺物から推定される本跡の時期は、偏平な坏が認められ、須恵器模倣形態坏の段も退化傾向にあることから、7世紀後葉と考えられる。



第 46 図 S123 遺構及び遺物実測図 (1)

SI23 カマド

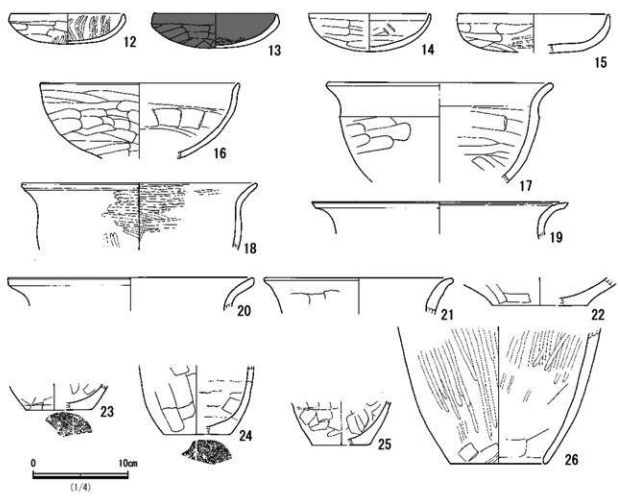


SI23

- 1 100R3/2 暗褐色土 ローム粒 (少量) 含む。締りあり。粘性弱。
- 2 100R3/4 暗褐色土 ローム粒 (少量)、焼土粒 (散見) 含む。締りあり。粘性弱。
- 3 50R3/2 暗赤褐色土 ローム粒 (少量)、焼土粒 (少量)、焼土土ブロック (少量)、炭化物粒 (少量) 含む。締りやや弱。粘性弱。
- 4 7.50R3/4 暗褐色土 ローム粒 (多量10%)、ロームブロック (φ2~5mm中量、φ5~10mm少量) 含む。締りあり。粘性やや弱。
- 5 7.50R4/3 褐色土 ロームブロック (φ2~5mm多量10%、φ5~10mm中量) 含む。締りあり。粘性やや弱。
- 6 7.50R3/4 暗褐色土 ローム粒 (少量) 含む。締りあり。粘性あり。
- 7 7.50R3/8 暗褐色土 やや中心部質土。カマド内部の残れ。締りあり。粘性あり。
- 8 7.50R5/2 灰褐色土 シルト質土層土。カマド内部の残れ。締りあり。粘性あり。
- 9 7.50R4/2 灰褐色土 シルト質土層土。カマド内部の残れ。締りあり。粘性あり。

SI23 カマド

- 1 7.50R4/3 褐色土 砂質土。ローム粒 (少量)、ロームブロック (φ2~5mm少量)、白色粒 (多量10%) 含む。締りあり。粘性弱。
- 2 7.50R3/4 暗褐色土 砂質土と暗褐色土の混在。ロームブロック (φ2~5mm少量)、白色粒 (少量) 含む。締りあり。粘性弱。
- 3 50R3/2 暗赤褐色土 ローム粒 (少量)、焼土粒 (散見)、白色粒 (散見) 含む。締り弱。粘性弱。
- 4 7.50R3/4 暗褐色土 ローム粒 (散見)、焼土土ブロック (φ5~10mm少量) 含む。締り弱。粘性弱。
- 5 50R3/2 暗赤褐色土 焼土粒 (少量)、焼土ブロック (φ5~10mm少量) 含む。締り弱。粘性弱。
- 6 7.50R4/3 褐色土 ローム土 (多量10%) 含む。締りあり。粘性やや弱。
- 7 2.50R4/8 赤褐色土 焼土土層。締りあり。粘性弱。
- a 7.50R4/3 褐色土 砂質土。焼土粒 (少量)、白色粒 (多量10%) 含む。締り弱。粘性弱。
- b 50R4/3 濃い赤褐色土 砂質土と焼土の混在。焼土ブロック (φ2~5mm中量)、白色粒 (少量) 含む。締りあり。粘性弱。
- c 100R4/3 濃い赤褐色土 砂質土。ローム土ブロック (φ5~10mm多量10%)、焼土土ブロック (φ2~5mm少量) 含む。締り強。粘性弱。



第 47 図 SI23 遺構及び遺物実測図 (2)

第26表 S123 遺物観察表

図面番号	種類	目録器高	部位・残存率・調査技法等	粘土	色調 (外面/内面)	構成	出土位置
1	土師器 杯	12.0 4.1	口縁部～底面片、50～60%存。口縁部の一部と内面中央に漆が付着。内外面塗りの黒色処理が剥落小。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ後まばらなタガ。内面は横ナズ。	雲母、長石微塵、白色粒	10YR4/2灰黄褐色 / 7.5YR4/2灰褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
2	土師器 杯	(14.0) (4.4)	口縁部～底面片、40～70%存。内外面塗りの黒色処理が剥落。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ後まばらなタガ。内面は横ナズ。	雲母、長石微塵、白色粒	10YR5/2灰黄褐色 / 10YR4/2灰褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
3	土師器 杯	11.6 4.4	注ほび形。口縁部をわずかに欠損。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ。内面はヘラケズリ。	雲母、石英、砂礫	10YR5/2い・黄褐色 / 7.5YR5/3い・黄褐色	酸化炭素 良好	①区 Ⅰ層土
4	土師器 杯	13.5 4.0	口縁部～底面、70%存。口縁部は内外面横ナズで一部に漆付着。底面～底面の外面はヘラケズリで底面に本葉痕。内面は底面が横ナズ。底面はヘラケズリで一部に漆付着。	雲母、砂粒、砂礫	7.5YR6/4い・黄褐色 / 7.5YR5/3い・黄褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
5	土師器 杯	(13.2) 4.5	口縁部～底面、50%存。内外面塗りの黒色処理で底面外面は剥落小。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ後まばらなタガ。内面はまばらな横ナズ放射状のタガ。	雲母、白色粒	10YR3/1黒褐色 / 10YR4/1褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
6	土師器 杯	(13.3) 4.0	口縁部～底面、40～50%存。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ。内面は横ナズ放射状のタガ。	雲母、砂粒	10YR5/2灰黄褐色 / 10YR4/2灰褐色	酸化炭素 普通	表探
7	土師器 杯	14.3 4.4	口縁部～底面、90%存。内外面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ後まばらなタガ。内面は底面まで横ナズで、底面はヘラケズリ後まばらなタガ。	雲母、白色粒、砂礫	7.5YR3/1黒褐色 / 7.5YR2/1黒	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
8	土師器 杯	(13.0) 3.7	口縁部～底面、40～50%存。内外面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ後まばらなタガ。内面は横ナズ放射状のタガ。	雲母、白色粒少量、砂粒	7.5YR3/1黒褐色 / 7.5YR3/1黒褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
9	土師器 杯	13.5 3.4	口縁部～底面、70～80%存。内外面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ後まばらなタガ。内面は底面が横ナズ。底面はヘラケズリ。	雲母、石英微塵、白色粒	10YR3/1黒褐色 / 10YR2/1黒	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
10	土師器 杯	(14.0) 3.6	口縁部～底面、20～30%存。内外面塗りの黒色処理。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ後まばらなタガ。内面は横ナズ。	雲母、砂礫	10YR3/1黒褐色 / 7.5YR1/1黒	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
11	土師器 杯	13.0 4.3	注ほび形。口縁部の一部を欠損。口縁部は内外面横ナズで一部に漆付着。底面～底面の外面はヘラケズリ。内面は横ナズ放射状のタガ。	雲母、石英、砂礫	10YR5/2い・黄褐色 / 7.5YR6/4い・黄褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
12	土師器 杯	(12.0) 3.3	口縁部～底面、20～30%存。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ後まばらなタガ。内面は横ナズ放射状のタガ。	雲母少量、砂礫少量	10YR4/2い・黄褐色 / 10YR5/2灰黄褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土・ Ⅱ層土
13	土師器 杯	(13.0) 3.7	口縁部～底面、40%存。内外面塗りの黒色処理が剥落。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ。内面は底面が横ナズ。底面はヘラケズリ後まばらなタガで漆付着。	雲母、白色粒	10YR7/2い・黄褐色 / 10YR4/2灰黄褐色	酸化炭素 良好	①区 Ⅰ層土
14	土師器 杯	(12.9) 4.0	口縁部～底面、50～60%存。口縁部は内外面横ナズ。底面～底面の外面はヘラケズリ後まばらなタガ。内面はヘラケズリ。	雲母、白色粒、砂礫微量	10YR5/2い・黄褐色 / 10YR5/2灰黄褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
15	土師器 杯	(16.0) (4.1)	口縁部～底面、40%存。口縁部は内外面横ナズで一部に漆付着。底面～底面の外面はヘラケズリ後底面下半～底面に漆付着。内面は横ナズ。	雲母、白色粒	7.5YR5/6明褐色 / 7.5YR6/4い・黄褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
16	土師器 杯	(21.0) 9(6)	口縁部～底面片、20%存。内面は塗りの黒色処理。外面は口縁部横ナズ後全体にへら面が彫り工具でのヘラケズリ。内面はヘラケズリ後横ナズ。	雲母、白色粒少量、砂礫	7.5YR3/2黒褐色 / 7YR3/6明赤褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
17	土師器 鉢	(23.0) (10.5)	口縁部～底面片。口縁部は内外面横ナズ。底面の外面はヘラケズリ。内面はヘラケズリ。	雲母、石英、長石、砂粒	7.5YR5/4い・黄褐色 / 7.5YR5/3い・黄褐色	酸化炭素 良好	①区 Ⅰ層土
18	土師器 鉢	(25.0) (7.0)	口縁部～底面片。口縁部は内外面横ナズで、一部同一箇所の内外面に漆付着。	雲母、石英微塵、砂礫少量	7YR4/2い・黄褐色 / 7YR3/6明赤褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
19	土師器 鉢	(27.0) 3.9	口縁部片。内外面横ナズ。	雲母、石英、長石、砂粒	7.5YR6/4い・黄褐色 / 7.5YR6/4い・黄褐色	酸化炭素 良好	①区 Ⅰ層土
20	土師器 鉢	(26.0) 3.4	口縁部片。内外面横ナズ。	雲母、石英、長石、砂粒	7.5YR6/4い・黄褐色 / 7.5YR6/6暗	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
21	土師器 鉢	(26.0) (3.7)	口縁部片。外面は横ナズで周部からヘラケズリ。内面は横ナズ。	石英、長石	5YR3/6明赤褐色 / 7YR5/4い・黄褐色	酸化炭素 良好	表探
22	土師器 鉢	(3.0) (10.0)	底面片。胴部下縁の外面はヘラケズリ。内面は横ナズ。	雲母、白色粒、砂礫少量	10YR3/1黒褐色 / 10YR5/2い・黄褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
23	土師器 鉢	(2.7) (7.0)	底面片。胴部下縁の外面はヘラケズリ。底面の外面には本葉痕。内面は横ナズ。24と同一体物。	雲母少量、白色粒	10YR5/6明赤褐色 / 7.5YR5/4い・黄褐色	酸化炭素 良好	①区 Ⅰ層土
24	土師器 鉢	(7.2) (7.6)	胴部～底面片。胴部の外面はヘラケズリ。底面の外面には本葉痕。内面はヘラケズリで輪轆痕が見える。23と同一体物。	雲母少量、白色粒	10YR5/4い・黄褐色 / 7.5YR5/4い・黄褐色	酸化炭素 良好	①区 Ⅰ層土
25	土師器 鉢	(4.5) 6(0)	胴部～底面片。胴部の外面は横ナズで下部は横ナズ。底面の外面はヘラケズリ。内面はヘラケズリ。	雲母、石英、白色粒	10YR5/2い・黄褐色 / 10YR6/4い・黄褐色	酸化炭素 普通	①区 Ⅰ層土
26	土師器 皿	(14.3) (10.2)	胴部～底面。外面はヘラケズリ後やや斜状のタガ。内面は横ナズでヘラケズリ後上半が縦位のタガ。下半はまばらなタガ。	雲母少量、石英、白色粒、砂礫	7.5YR5/6明褐色 / 7YR4/8赤褐色	酸化炭素 良好	①区 Ⅰ層土

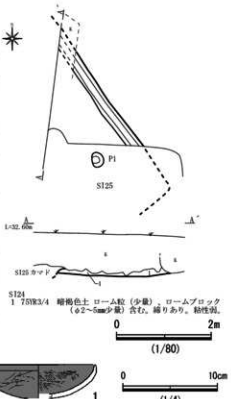


S I 2 4 (第 48 図、第 27 表、写真図版 7・19)

検出位置は、8区南側のD1グリッドである。南側がSI25によって切り込まれている。大部分が西側の調査区外にあり、全体の形状や規模は把握できなかった。現存値での規模は、東西軸が1.42m、南北軸が2.84mである。検出されている東壁が直線状であることから、平面形は方形と考えられる。現存する壁の方向から主軸方向はN-34°-Wを示す。壁は垂直に立ち上がり、壁高は22cmである。覆土のほとんどは攪乱を受け、堆積状況は把握されなかった。床面は平坦とみられ、検出された部分での顕著な硬化面は認められず、掘り方も特に深く掘り下げられた部分は見当たらなかった。主柱穴は、SI24掘り方でP1が検出され、現存値は径30cm、深さ41cmである。検出部分で貯蔵穴、カマド等の付帯施設は確認できなかった。

遺物は、12点・182gが出土した。土師器が主体である。1は無段有稜丸底形態の土師器環は、内外面ともに黒色処理がなされている。

本跡は、検出された部分や出土遺物が非常に少ないことから時期の推定は難しいが、1の土師器環の形態やSI25との重複関係から、時期の7世紀中葉以降であろう。



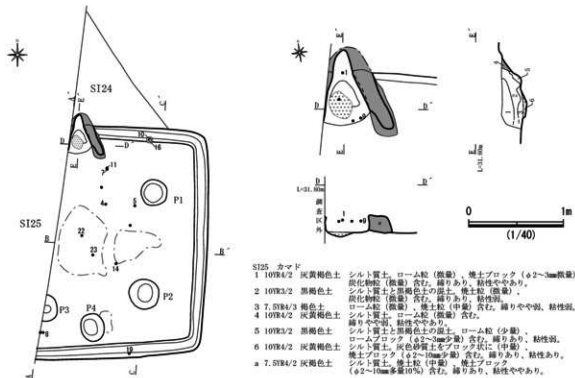
第 48 図 SI24 遺構及び遺物実測図

第 27 表 SI24 遺物観察表

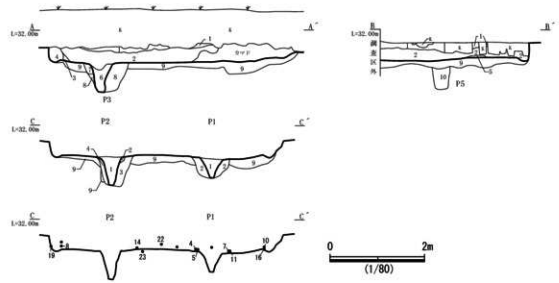
図面番号	種類 特徴	目録 認識 部位	部位・残存率・調整技法等	粘土	色澤 (外面/内面)	構成	出土位置
1	土師器 環	(12.0) (3.6) —	口縁部～底面片、内外面塗塗りの黒色処理。口縁部の外面は横ナブ。存留の外面はヘラケズリ後ミダキ。内面はナブ後磨ミダキ。	灰母、白色粘	07R2/1黒黒 / 7.5R2/2黒黒	粘土系 貝殻	覆土

S I 2 5 (第 49・50 図、第 28 表、写真図版 7・19・20)

検出位置は、8区ほぼ南端のE1グリッドである。北側ではSI24を切り込んでいる。覆土上層は耕作によるトレンチャーで攪乱を受けていたが、床面までは達していない。ただ、カマド左袖部から南西隅にかけて調査区外になるため、正確な形状や規模は把握できなかった。検出された部分や主柱穴の配置から平面形は方形を呈し、規模は東西軸が現存値で3.07m、南北軸は4.97mを測る。主軸方向はN-3°-Wを示す。壁はほぼ直立し、壁高は28cmである。覆土は5層に分層される自然堆積である。床面は平坦に貼りかたが施され、中央部分に顕著な硬化面が認められた。壁溝は、幅18～22cm、深さ3～5cmで全周するとみられる。ピットは4本が検出され、P1～3は主柱穴に相当し、北西側の1本は調査区外にあると考えられる。P1の柱底は径34cm、深さ42cmで、径67cmの掘り方を持つ。P2の柱底は径34cm、深さ60cmで、径77cmの掘り方を持つ。P1の柱底は径36cm、深さ62cmで、径96cmの掘り方を持つ。P4は径68×48cm、深さ34cmで出入口施設に伴うピットと考えられる。また、掘り方から径35cm、深さ44cmのP5が中央部より検出されている。掘り方は、全体が深めに掘り下げられ、特に北壁寄りと隅部分が深く掘り込まれていた。カマドは北壁の中央に付設されたと考えられ、煙道部は壁を26cm掘り込んでいる。焚口部から煙道部までの全長は103cmである。袖部の構築材は灰黄褐色粘質土と砂質土の混土が用いられ、粘質土の割合が高い。火床



- S125 カマド
- 1 10R/4/2 灰黄褐色土 シルト質土、ローム粒（微量）、焼土ブロック（φ2~3mm散見）、炭化物粒（微量）含む。締りあり、粘性ややあり。
  - 2 10R/3/2 黒褐色土 シルト質土と黒褐色土の混成土。焼土粒（微量）、炭化物粒（微量）含む。締りあり、粘性ややあり。
  - 3 7.0R/4/3 褐色土 シルト質土、ローム粒（微量）含む。締りやや弱、粘性弱。
  - 4 10R/4/2 灰黄褐色土 シルト質土、ローム粒（微量）含む。締りやや弱、粘性ややあり。
  - 5 10R/3/2 黒褐色土 シルト質土と黒褐色土の混成土。ローム粒（少量）、ロームブロック（φ2~3mm少量）含む。締りあり、粘性弱。
  - 6 10R/4/2 灰黄褐色土 シルト質土、灰色砂質土をブロック状に（中量）、焼土ブロック（φ2~10mm少量）含む。締りあり、粘性あり。
  - 7 5R/4/2 灰褐色土 シルト質土、焼土粒（中量）、焼土ブロック（φ2~10mm少量20%）含む。締りあり、粘性ややあり。

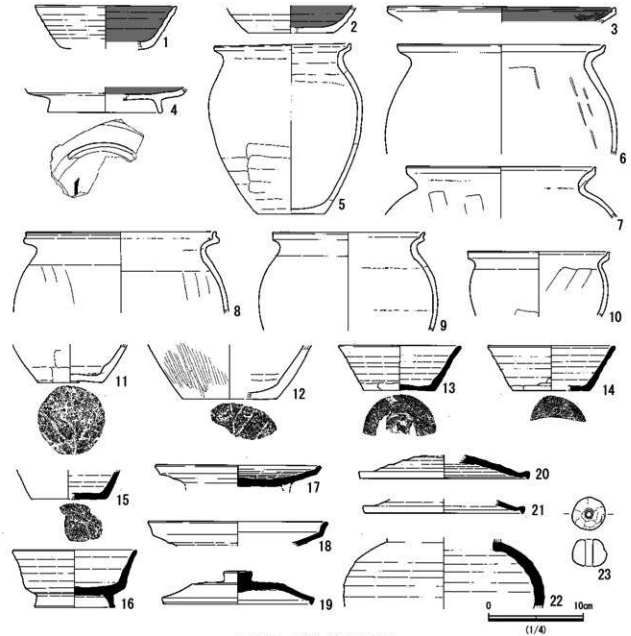


- S125
- 1 7.5R/2/3 暗褐色土 ローム粒（中量）、ロームブロック（φ2~3mm少量）含む。締りあり、粘性弱。
  - 2 7.5R/2/2 暗褐色土 ローム粒（少量）、ロームブロック（φ2~3mm少量、φ10~15mm散見）含む。締りあり、粘性弱。
  - 3 7.5R/2/3 暗褐色土 ローム粒（微量）含む。締りあり、粘性弱。
  - 4 7.5R/2/3 暗褐色土 ローム粒（少量）、ロームブロック（φ2~3mm散見）含む。締りあり、粘性弱。
  - 5 7.5R/1/4 褐色土 ロームブロック（φ5~20mm少量）含む。締りあり、粘性弱。
- S125 P3
- 6 7.5R/2/3 暗褐色土 ローム粒（少量）、ロームブロック（φ20mm散見）含む。締りあり、粘性弱。
  - 7 10R/3/3 暗褐色土 ロームブロック（φ5~10mm少量）含む。締りあり、粘性弱。
  - 8 10R/4/3 二色灰褐色土 ローム粒（多量10%）、ロームブロック（φ2~10mm多量10%）含む。締りあり、粘性弱。
  - 9 10R/4/3 二色灰褐色土 ロームブロック（φ10~20mm多量20%）含む。締りあり、粘性ややあり、締り弱。
- S125 P5
- 10 10R/3/3 暗褐色土 ローム粒（多量10%）、ロームブロック（φ2~10mm多量20%）含む。締りあり、粘性あり。
- S125 P1
- 1 7.5R/2/3 暗褐色土 ローム粒（少量）、ロームブロック（φ2~3mm散見）含む。締りあり、粘性弱。
  - 2 10R/4/3 二色灰褐色土 ロームブロック（φ10~30mm多量20%）含む。締りあり、粘性弱。
- S125 P2
- 1 7.5R/2/3 暗褐色土 ローム粒（少量）、ロームブロック（φ2~3mm散見）含む。締りあり、粘性弱。
  - 2 10R/4/2 灰黄褐色土 ローム粒（微量）含む。締りあり、粘性弱。
  - 3 10R/4/3 二色灰褐色土 ロームブロック（φ5~30mm多量10%）含む。締りあり、粘性弱。
  - 4 10R/4/3 二色灰褐色土 ロームブロック（φ5~20mm多量20%）含む。締りあり、粘性弱。

第49図 S125 遺構実測図

部は長さ40cm、幅31cm、深さ4cmの範囲で掘り窪められ、赤変硬化した部分と赤色化していない硬化部分双方が認められた。

遺物は、342点・8,044gが出土した。その内、土師器が259点、須恵器が80点で、須恵器の出土量が目立ち、坏類では点数比で土師器を上回る。1・2はロクロ整形で作られた土師器坏で内面に黒色処理を施している。3・4は土師器の整類の破片で、3の口縁部口径はかなり大振りである。高台部が貼り付けられた4の底部面には、墨書の痕跡がわずかに認められた。これら土師器坏・整類はいずれも内面に丁寧な黒色処理がなされている。5～12は土師器甕で、カマド周辺からの多く出土する。口縁部がつまみ上げ形態のものが主体で、10は小型とみられる。13～15の須恵器坏は底部が回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリの調整が行われている。16は高台付坏、17・18は須恵器高台付甕で、16は高台部が開き気味の作りで、端部が張り出している。19～21の須恵器蓋は、口端部の屈曲が強い。22は須恵器蓋の口縁部断面図、23は須恵器蓋の口縁部断面図。



第50図 S125 遺物実測図

出土遺物から推定される本跡の時期は、併存する須恵器環の調整技法が手持ちヘラケズリを採用していることや須恵器盤が出土していることなどをみると、8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。

第28表 S125 遺物観察表

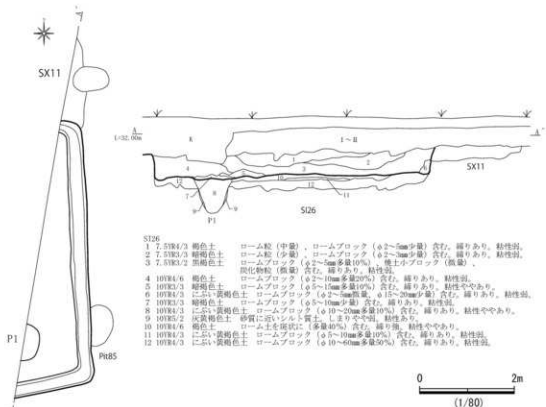
図面番号	種類 説明	目録 記号 位置	部位・残存率・調整技法等	胎土	色調 (外装/内装)	焼成	出土位置
1	土師器 杯	(15.0) 4.5 —	口縁部～底部、20%存。口クロ整形。内面は黒色処理後丁寧なミガキ。	雲母、砂粒、針状物	7.5B95/4にぶい黄褐/10YR1.7/1黒	酸化炭素普通	カマド
2	土師器 杯	(2.8) 8.5 —	体部～底部片、10～20%存。口クロ整形。体部下部～底部にかけての外面は同輪ヘラケズリ。内面は黒色処理後丁寧なミガキ。	雲母少量、白色粘土	7.5B95/4にぶい黄褐/3YR3/1黒褐	酸化炭素良好	②区礎土
3	土師器 飯・皿類	(24.0) 1.7 —	口縁部片。外面は横ナデ。内面は縁部だけの黒色処理後密なミガキ。	雲母、砂粒	7.5B95/3にぶい黄褐/7.5B2/1黒	酸化炭素良好	②区礎土
4	土師器 高台付杯	(2.7) 12.0 —	底部片。外面は同輪ヘラケズリ後高台部を貼り付けナデ調整。墨書あり。内面は黒色処理後丁寧なミガキ。	雲母、長石、白色粘	10YR6/3にぶい黄褐/7.5B2/1黒	酸化炭素良好	①区礎土
5	土師器 甕	14.5 18.0 7.0	口縁部～底部、80%存。口縁部は内外面横ナデ。胴部の外面は上半がナデ、下半が横位のヘラケズリ。底部の外面はナデ。内面はヘラナデで上部に輪轆痕が残る。	雲母、石英多量、長石多量	5YR3/4にぶい赤褐/5YR5/6明赤褐	酸化炭素良好	①区礎土
6	土師器 甕	(22.0) 11.6 —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナデ。胴部の外面はナデ。内面はヘラナデ。	雲母、石英、長石	7.5B95/4にぶい黄褐/7.5B5/2灰黄褐	酸化炭素普通	カマド廻り方
7	土師器 甕	(20.0) 5.0 —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナデ。胴部の外面はヘラケズリ。内面は縁部により部分的に剥離。	雲母、石英、長石	2.5B8/6明赤褐/2.5B4/6赤褐	酸化炭素良好	①区床
8	土師器 甕	(20.0) 8.7 —	口縁部～胴部片。口縁部～頸部にかけて内外面横ナデ。胴部は内外面ヘラナデ。	雲母、石英、長石	7.5B96/4にぶい黄褐/5YR6/6褐	酸化炭素良好	②区礎土
9	土師器 甕	(16.0) 10.0 —	口縁部～胴部、20%存。口縁部～頸部は内外面横ナデ。胴部は内外面ヘラナデで内面には輪轆痕が残る。	雲母、石英、長石	5YR4/4にぶい赤褐/5YR4/3にぶい赤褐	酸化炭素良好	カマド
10	土師器 甕	(15.0) 6.6 —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナデ。胴部の外面は上半がナデ、下半がヘラケズリか。内面はヘラナデ。	雲母、石英、長石	5YR3/3暗赤褐/7.5B3/6明赤褐	酸化炭素良好	①区礎土・カマド廻り方
11	土師器 甕	(4.0) 6.8 —	底部片。焼物残。胴部下部の外面は横位のヘラケズリ。底部の外面には本葉痕。瓶で使用が多量に付着。内面はヘラナデか。	雲母、石英、長石	2.5B8/4赤褐/2.5B4/6赤褐	酸化炭素良好	①区床・カマド廻り方
12	土師器 甕	(5.7) 10.0 —	胴部～底部片。胴部の外面は縁部の密なミガキ。底部の外面には本葉痕。内面はヘラナデ。	雲母、石英、長石	5YR4/4にぶい赤褐/5YR4/6赤褐	酸化炭素普通	廻り方
13	須恵器 杯	12.8 4.8 7.5	口縁部～底部、40～50%存。口クロ整形。底部は同輪ヘラ切りで体部下部～底部を保持しヘラケズリ。	白色粘、黒色粘	7.5B6/1灰 / 5Y6/2暗灰ナデ	還元炭素明焼	①区礎土
14	須恵器 杯	(13.1) 4.7 (8.0)	口縁部～底部、10～20%存。口クロ整形。底部は同輪ヘラ切りで体部下部～底部を保持しヘラケズリ。	雲母、石英	5Y6/1灰 / 5Y6/2暗灰ナデ	還元炭素明焼	②区床
15	須恵器 杯	(3.1) 8.0 —	体部～底部片。口クロ整形であるが外面は目立たず内面も不明瞭。底部は同輪ヘラ切り後手持ちヘラケズリ。	雲母、石英	2.5B8/1灰白 / 2.5B8/2灰白	還元炭素良好	②区礎土
16	須恵器 高台付杯	13.0 6.1 8.5	口縁部～底部、90%存。口クロ整形。底部は同輪ヘラケズリ。高台部は貼り付け後ナデで縁部は面取り。	石英多量、白色粘、黒色粘	7.5B5/1灰 / 7.5B5/1灰	還元炭素明焼	①区床
17	須恵器 高台付甕	(17.5) 2.3 —	口縁部～底部、30～40%存。口クロ整形。底部は同輪ヘラケズリ後高台部を貼り付けるが高台部は欠損し、貼り付け部に墨書が残る。	雲母、石英、砂粒	2.5Y7/2灰黄 / 2.5Y7/2灰黄	還元炭素普通	礎土
18	須恵器 甕	(19.0) 2.5 —	口縁部片。口クロ整形。	石英多量、白色粘	N4 / 灰 / N4 / 灰	還元炭素明焼	表採
19	須恵器 甕	15.7 3.5 —	天井部～口縁部、90～60%存。口クロ整形。編み部は規定形状で貼り付け後ナデ。天井部は同輪ヘラケズリ。口縁部は縁出しナデ調整。内面縁部に自然な輪轆付着。	石英、黒色粘	N4 / 灰 / N4 / 灰	還元炭素明焼	②区礎土
20	須恵器 甕	(17.7) 2.5 —	天井部～口縁部片。口クロ整形。天井部は同輪ヘラケズリ。口縁部は縁出しナデ調整。	雲母、石英、白色粘	5Y5/1灰 / 5Y7/3灰白	還元炭素普通	廻り方
21	須恵器 甕	(16.8) 1.0 —	口縁部片。口クロ整形。口縁部は縁出しナデ調整。	石英、砂粒多量、黒色粘	N5 / 灰 / N5 / 灰	還元炭素明焼	②区礎土
22	須恵器 短頸甕	(7.3) — —	体部片。口クロ整形。胴部に自然輪がみえる。	石英少量、長石、黒色粘多量	10YR5/3にぶい黄褐 / 10YR6/2灰黄	還元炭素普通	①・②区礎土
23	土製品 土瓦	径：3.5cm、 孔径：0.8cm、 重量：30.3g	完整。指図によるナデ調整。穿孔は地成陶。	雲母、砂粒	7.5B95/6明赤褐 / —	酸化炭素良好	②区床

S I 2 6 (第51・52図、第29表、写真図版7・20)

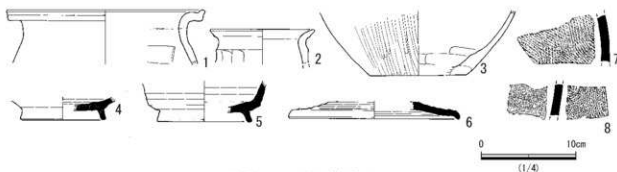
検出位置は、8区南側のD1グリッドである。南側でS124と重複していると思われるが、調査区内での確認はできなかった。また、西側の大部分が調査区外にあり、全体の形状や規模は把握できなかったが、東西軸は現存値で1.60m、南北軸は5.60m前後である。検出されている東壁が直線状であることから、平面形は方形を呈すると考えられる。現存する壁の方向から主軸方向はN-3°-Wを示す。壁は直立し、壁高は53～59cmである。覆土は7層に分けられる自然堆積である。床面は平坦とみられ、検出された部分での顕著な硬化面は認められなかった。壁溝は22～30cmとやや広く、全周しているものと考えられる。主柱穴は、調査区外に接しているため床面を検出した際には認識されなかったP1が相当し、柱痕は認められなかったが、掘り方の径80cm、深さ73cmで、中心は調査区外にあると考えられる。調査区内での貯蔵穴、カマドは確認できなかった。掘り方は、壁際内側が深く掘り下げられているようである。

遺物は、112点・2,175gが出土した。その内、土師器は76点、須恵器は36点である。坏類では点数比で須恵器が上回る。1～3は土師器甕で、1の口縁部はつまみ上げの口縁部、2はかなり小型である。3は胴部下半に密なミガキが施される。4・5は高台付坏で、胎土から木葉下窯の所産である可能性が高い。一方、5の須恵器蓋、7・8の須恵器甕は炭母を含む胎土から新治窯産と考えられ、特に8は胴部外面に同心円状のタキが施された同窯特有の技法もみられる。

出土遺物から推定される本跡の時期は、高台付坏の高台部が開いた形態などから、8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。(高野)



第51図 S126 遺構実測図



第52図 S126 遺物実測図

第29表 S126 遺物観察表

図面番号	種類 部材	口縁部高 直径	形状・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外面/内面)	構成	出土位置
1	土師器 甕	(21.0 15.7) —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナゲ。胴部の外面はナゲ。内面はヘラナゲ。	雲母、石英、 長石	10YR7/4に赤い異相 10YR6/3に赤い異 相	酸化炭 良好	罐土
2	土師器 甕	(11.0 9.7) —	口縁部～胴部片。口縁部は内外面横ナゲ。胴部の外面はヘラケズリ。内面はナゲ。	雲母少量、砂 粒多量	7.5YR4/3焼 7.5YR3/3焼	酸化炭 良好	罐土
3	土師器 甕	(16.7 10.0) —	口縁部～底部分。胴部の外面は腰位の密なモザイク。内面はヘラナゲ。	雲母、石英、 長石	7.5YR5/4に赤い焼 7.5YR5/4に赤い焼	酸化炭 普通	罐土
4	須恵器 高台付杯	(2.4 09.0) —	胴部片。コタロ型。底部の外面は回転ヘラケズリ。高台部は貼り付 け後ナゲ。	石英、白色 粒状物	7.5YR4/1焼 5Y6/1焼	還元炭 質	罐土
5	須恵器 高台付杯	(4.3 10.0) —	胴部～底部分。コタロ型。底部の外面は回転ヘラケズリ。高台部は 貼り付け後ナゲ。	黒色粒 チャート、針 状物	5Y5/1焼 N7 / 灰白	還元炭 質	瓶口方
6	須恵器 蓋	(18.0 13.8) —	口縁部片。コタロ型。口縁部は短く巻出し横ナゲ調整。	雲母、石英	2.5Y7/1灰白 2.5Y7/2灰	還元炭 普通	罐土
7	須恵器 甕	(5.0) —	胴部片。外面は多方向の平行タタキ。内面はナゲ。	雲母多量、石 灰、砂粒	2.5Y3/1黒 2.5Y4/1黄	還元炭 普通	罐土
8	須恵器 甕	(3.3) —	胴部片。外面は同心円状のタタキ。内面はヘラナゲ。	雲母、黒色粒	10YR5/1焼 10YR6/1焼	還元炭 普通	罐土

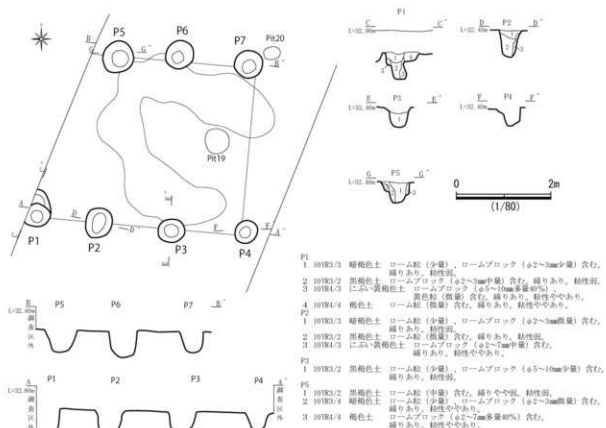
## 第4節 掘立柱建物跡

### SB01 (第53図、写真図版8)

検出位置は、2区西側のE16・17グリッドである。風倒木痕を切り込んで構築され、南北の調査区を区断する形で検出されている。西側の調査区外に延びているため、全体は把握できなかった。調査区内で検出された部分での柱穴は7基で、平面規格は側柱構造の建物跡と考えられる。桁行は3間以上、梁行は1間の東西棟である。規模は、桁行長が現存値で4.38m、梁行長は3.50mを測る。梁行側では柱筋上にはないが、P4・7間のほぼ中央にPit19が位置しており、本建物跡に関連した可能性がある。柱筋から求められる主軸方向はN-87°-Wを示す。各柱穴の規模は、P1がわずかに調査区外にかかるものの径50cm前後のほぼ円形で、深さは53cm、P2は62×51cmのやや楕円形で、深さ56cm、P3は54×51cmのほぼ円形で、深さ42cm、P4は径49cmの円形で、深さ40cm、P5は径65cmの円形で、深さ43cm、P6は61×57cmのほぼ円形で、深さ53cm、P3は61×58cmのほぼ円形で、深さ42cmである。柱廻り方から計測される柱間寸法は、P1～2間が1.30m、P2～3間が1.58m、P3～4間が1.50m、P5～6間が1.26m、P6～7間が1.58mである。柱穴の規模では、若干の差が認められるもののほぼ近似した数値を示している。一方、柱間寸法

では1.50 mを超える数値と1.30 m以内の数値に分かれた。いずれの柱穴からも底面での硬化した部分は認められないが、覆土は含有物がまばらな黒褐色土とローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土とに大別できる。黒褐色土は主に柱痕の層と考えられ、P1・2・5で明瞭な柱痕が確認されている。

遺物は、4点・75gが出土した。図示できない小破片ばかりで年代を推定は難しいが、P5から内面黒色処理の土師器杯・椀類が出土しており、7世紀後葉～8世紀前葉頃の可能性がある。（高野）



第53図 SB01 遺構実測図

## 第5節 土坑

### 1. 陥穴状土坑

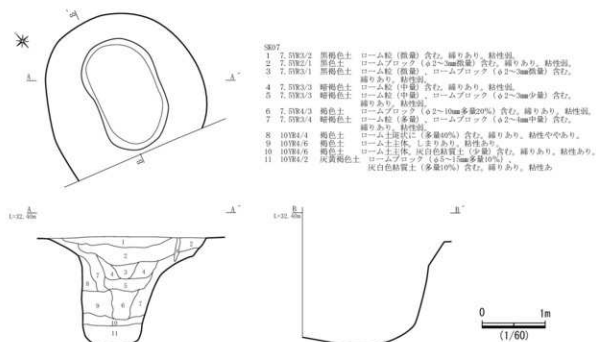
#### SK07（第54図、写真図版8）

検出位置は、1区東端のB23グリッドである。南側の一部が調査区外にある。平面形は楕円形で、中位程で短軸方向が若干括れている。規模は、長軸方向が現存値で2.27 m、短軸方向で2.49 m、深さは132 cmを測る。底面は平坦で、壁は底面からはほぼ垂直に立ち上がり、上部で大きく開口する形状である。長軸方向はN-16°-Eを示す。覆土は11層に分層される自然堆積である。

遺物は出土しなかった。遺構の時期は、形態や覆土の状態から縄文時代と考えられる。

#### SK13（第55図、写真図版8）

検出位置は、6区北端のE11グリッドである。北東側が調査区外にあり、北側の一部がSK14と重複している。重複部分で本跡の土層が認められないことから、SK14に切り込まれていると考えられる。検出当初、双方の底面がほぼ同じ深さの平坦面になっているため、ひとつの遺構として捉えていたが、長軸方向が異なる



第54図 SK07 遺構実測図

ることから別遺構と判断した。平面形は楕円形とみられ、中位程で短軸方向が括れた細長い形状である。規模は、長軸方向が3m前後、短軸方向の現存値は1.38mで、下端は0.43mと狭く、深さは171cmを測る。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部で大きく開口する形状で、長軸側の壁面は括られてオーバーハングする。長軸方向はN-1°-Wを示す。覆土は、土層観察位置がSK14の覆土であったため図示できなかったが、掘り下げを行った過程で、自然堆積の埋没を確認している。

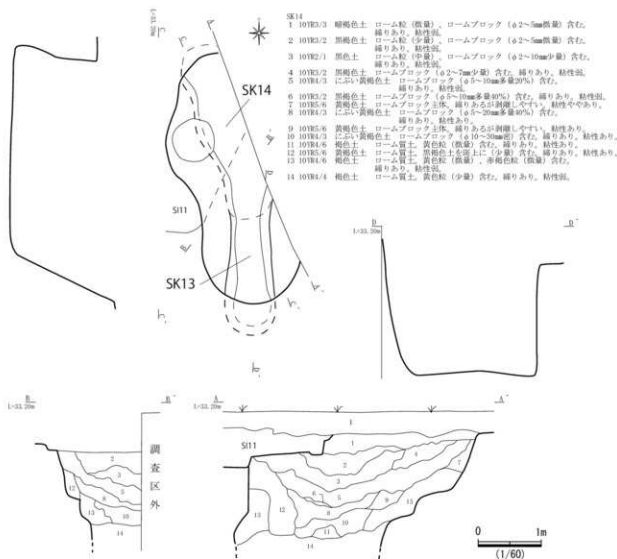
遺物は出土しなかった。遺構の時期は、形態や覆土の状態から縄文時代と考えられる。

#### SK14 (第55図、写真図版8)

検出位置は、6区北端のD11・E11グリッドである。北東側が調査区外にあり、南側の一部がSK13と重複している。重複部分で本跡のみの土層しか認められなかったことから、SK13を切り込んでいると考えられる。検出当初、双方の底面がほぼ同じ深さの平坦面になっているため、ひとつの遺構として捉えていたが、長軸方向が異なることから別遺構と判断した。また、覆土上面がSI11に切り込まれ、床面が構築されていた。平面形は楕円形とみられ、中位程で細長い形状になる。規模は、長軸方向が現存値で3m前後、短軸方向の現存値は1.32mで、下端は0.64m、深さは173cmを測る。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部で大きく開口する形状で、長軸側の壁面は括られてオーバーハングする。長軸方向はN-18°-Wを示す。覆土は、14層に分層された自然堆積である。

遺物は出土しなかったが、やや大きめの礫が出土した。遺構の時期は、形態や覆土の状態から縄文時代と考えられる。





第55図 SK13・14 遺構実測図

## 2. 地下式坑

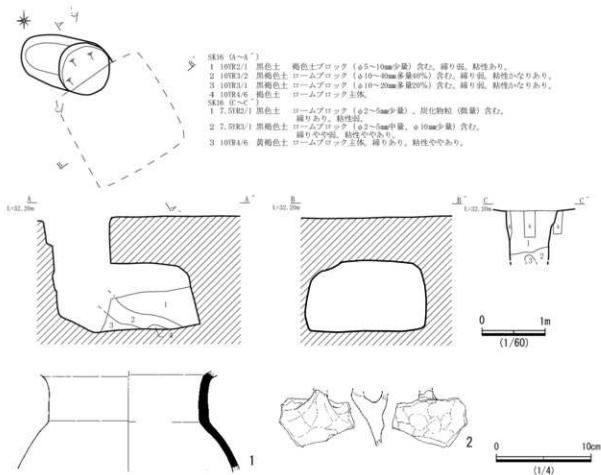
### SK16 (第56図、第30表、写真図版8・20)

検出位置は、7区西端のF2グリッドである。上部は耕作によるトレンチャーで攪乱を受けていた。天井部は厚さ0.64mが残存し、XII層(鹿沼軽石層)下部を境にしてアーチ状に掘り込まれていた。平面形は方形単室の主室に半円形の堅坑を伴った形状である。堅坑は主室の北東側に接続し、さらにその東側には、80×72cm、深さ38cmの浅い掘り込みがある。土層の状態が堅坑上層と一致することから本遺構に伴うと判断し、堅坑への昇降口として使用されたのではないかと考えられる。また、堅坑の側面には足掛けに利用したと思われる窪みが数か所検出されている。規模は堅坑を基準にした主軸長が2.26mを測る。堅坑は径1.32mの円形で、底面が主室に向かってスロープ状になっており、深さはスロープの上端で150cm、下端で173cmの差がある。主室の規模は、下端で長軸1.68m、短軸1.62m、高さは96×106cmで、主室の壁はやや内傾し、側面壁では工具痕と思われる凹凸が認められる。主軸方向はN-32°-Wを示す。主室の底面はほぼ平坦であるが、奥壁側が若干高くなっている。覆土は堅坑上層部が粒状のきめ細かい黒色土、下層部でロームブロックを含む埋め戻された層になり、主室まで流入していた。主室では、埋め戻された後に黒色土が自然堆積し

ているが、室内全ては埋没しなかったようで、天井部との間には空洞があった。

遺物は、土器 14 点・270g が出土し、形状は留めていなかったが粘板岩性の片岩も含まれていた。1 は須恵質の壺型土器で、中世遺物の可能性があるもの、直行する頸部から口縁部が外反する器形のため奈良・平安時代の所産と思われる、2 次的混入と考えられる。2 は内耳土鍋口縁部の小破片で、耳部が大きめである。

本跡は、遺構の形態から中世と考えられるが、該期の遺物は 2 のみであるため、詳細な時期までは把握できなかった。



第 56 図 SK16 遺構及び遺物実測図

第 30 表 SK116 遺物観察表

調査番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外壁/内面)	焼成	出土位置
1	褐色器 壺	(10.6)	頸部へ胴部片。頸部は内外面種ナダで内面は一部へラ跡が残る。胴部の外面はナダ。内面はへラナダ。	雲母、石英、長石	10YR7/2(ふい)黄褐色 / 10YR6/2(ふい)黄褐色	還元炎	遺16 覆土
2	土師質土器 内耳土鍋	(5.7)	口縁部下縁の耳部片。内外面は指痕によるナダで外面全体に覆付着。	雲母、石英、砂粒	7.5YR1/1(黒) / 10YR3/4(ふい)黄褐色	還元炎 普通	遺16 覆土

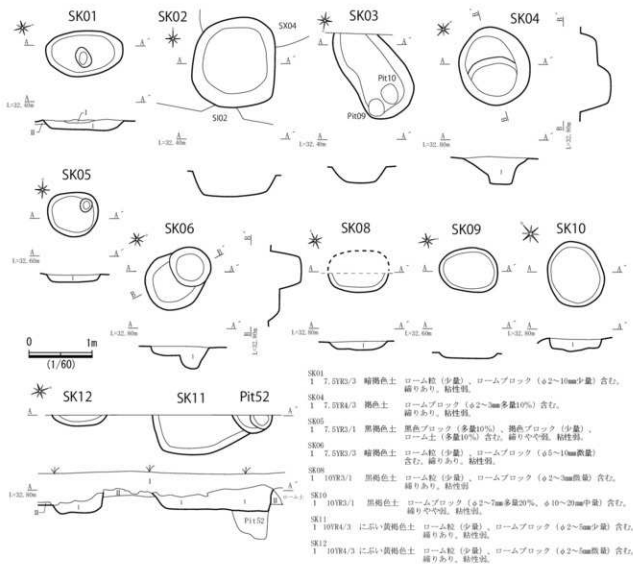
### 3. その他の土坑 (第 57・58 図、第 31・32 表、写真図版 20)

検出された土坑の内、陥穴状土坑 3 基と地下式坑 1 基を除いた土坑の数は 28 基である。各土坑の詳細については第 31 表にまとめた。これらをもとに概観すると、形態や覆土から主に 2 種類に大別できる。

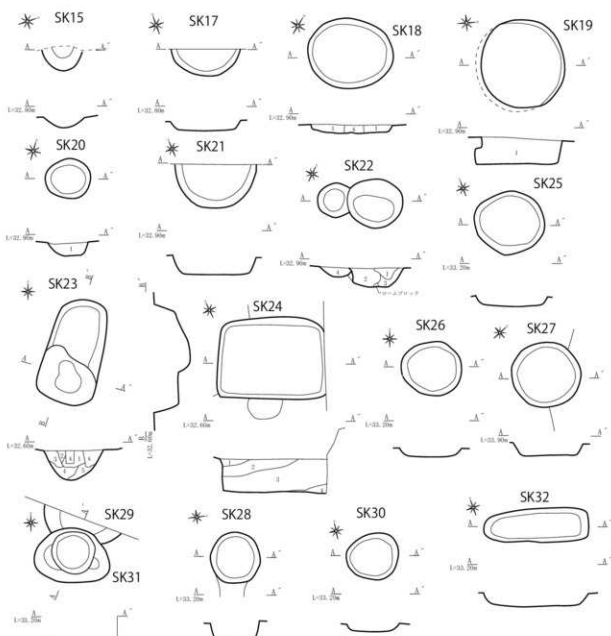
ひとつは、円形を基調とするものやや不安定な形状で、覆土は暗褐色土または明るめの黒褐色土を主体とする土坑群である。SK01 ~ 04・06・11 ~ 12・15・17・18・20・22・28 ~ 32 の 18 基が相当し、比較的小

規模なものが目立つ。この種類の土坑からは、小破片ではあるが、土師器・須恵器 50 点・1,172g が出土することから、堅穴住居跡が構築された時期の土坑と考えられる。

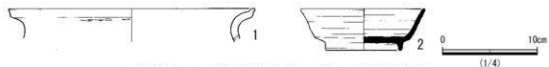
もうひとつは、覆土が黒色土または暗い黒褐色土を主体とする土坑群である。これらをさらに細分化すると、SK08・09・23 は、覆土中に含有物がほとんど認められない土坑である。その内、SK16（地下式坑）の堅坑上層部の覆土に類似している、SK08・09、SK23 は中世の可能性が高い。一方、SK05・10・19・21・25～27 の 6 基は整った円形を呈し、ロームブロックを多量に含んだ人為的堆積で、SK05 を除いて 7 区 H 7～8・I 8～10 グリッド内に集中する。SK24 は大型の方形状を呈した土坑で、こちらも覆土にロームブロックを多量に含む人為的な堆積で埋没している。SK19・21・25～27 は、現代の耕作によるトラクターを避けて掘り込まれており、SK24 も現在使用されている農道と直交して関連性がうかがえることから、この種類の土坑は新しい時期に掘り込まれたと考えられる。この種類の土坑からも土師器・須恵器 21 点・210g が出土するが、摩耗した細片が多く、二次的に混入した可能性が高いと思われる。（高野）



第 57 図 その他の土坑実測図 (1)



- SK15 1 7. 暗褐色土 黒褐色土を境状に (多量40%)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK17 1 7. 暗褐色土 ロームブロック (φ5~10mm多量50%以上) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK19 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK20 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK21 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK22 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK23 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK24 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK25 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK26 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK27 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK28 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK29 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK30 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK31 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。
- SK32 1 7. 暗褐色土 ローム土 (少量)、ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む。縞りあり。粘性弱。



第58図 その他の土坑実測図 (2) 及び遺物実測図

第31表 その他の土坑 一覧表

遺構名	位置 (グラッド)	形状	規模(m)			長軸方向	遺土・特徴	出土遺物
			平面・断面	長軸	短軸			
SK01	A21・B21	楕円形・ 皿状	160	135	44	N-30°-W	層土は黒褐色土の単層。東寄り底部に径30×24cm、深さ35cmの小ピットあり。	なし
SK02	A18	ほぼ円形・ クワイ状	151	129	41	N-38°-W	南側で100カマド跡部の一部を切り、北側でSK04に切りられる。層土は黒褐色土の単層でロームブロックを少量含む。	なし
SK03	A17	不整形な 円形	(163)	85	27	N-48°-W	P109・110と重複。新石器期は把握できず。南側の一部が調査区外。層土は黒褐色土の単層。	なし
SK04	A15	ほぼ円形・ 有段状	124	113	30	N-55°-W	層土は黒褐色土の単層。	なし
SK05	A18	ほぼ円形・ 皿状	80	70	14	N-66°-W	層土はローム土を少量含む黒褐色土の単層。北東部に径20cm、深さ30cmの小ピットあり。	なし
SK06	A15	楕円形・ 有段状	110	72	32	N-14°-W	層土は黒褐色土の単層。	なし
SK08	J11	楕円形・ 皿状	(95)	—	13	N-65°-W	層土は黒褐色土の単層で含有物はローム粒など微量。北側半分は埋没で消失。	土師器片3
SK09	H0	楕円形・ 皿状	93	64	8	N-70°-W	層土は黒褐色土の単層で含有物はローム粒など微量。	なし
SK10	E11	ほぼ円形・ 皿状	104	86	24	N-27°-E	層土は黒褐色土の単層で、ロームブロックを少量含む。しまりがあまりない。	土師器片1、土製品(支脚)1
SK11	E10	不整形な クワイ状	126	(63)	29	N-20°-E	P1152と重複し、本跡が新しい。層土はほぼ黒褐色土の単層。	なし
SK12	E10	— クワイ状	(84)	(17)	14	N-21°-E	層土は黒褐色土の単層。大部分は西側調査区外にない。	土師器片3、銅器片2
SK15	P10	— 皿状	63	(30)	18	N-30°-E	S112・113と重複。新石器期は把握できず。層土は黒褐色土の単層で、炭化物を少量含む。隣接するS112・113に隣接したもの。	土師器片6、銅器片5
SK17	H7	—	(116)	(45)	17	N-70°-W	層土は黒褐色土の単層で含有物はローム粒など微量。	土師器片2
SK18	H7	楕円形・ 皿状	134	112	15	N-60°-E	層土は黒褐色土の単層。	なし
SK19	H7	円形・ 有段状	147	138	43	N-26°-E	東側半分が消失し、わずかに土師器片が残る。層土は黒褐色土の単層でロームブロックを少量含む。人為的な堆積。	土師器片3、銅器片2
SK20	H7	ほぼ円形・ クワイ状	72	62	33	N-72°-E	層土は黒褐色土の単層。	土師器片1、土師器片2
SK21	H8	円形・ クワイ状	130	(120)	30	N-68°-W	層土は黒褐色土の単層でロームブロックを少量含む。	土師器片2、銅器片2
SK22	H7・8	楕円形・ 有段状	132	78	34	N-63°-E	2基の重複の可能性もあるが、層土の切り合いが不明瞭なため1基の土坑とした。層土は本層に分類される複雑な堆積層。	なし
SK23	H6	楕円形・ 有段状	173	95	40	N-14°-E	層土は5層に分類される複雑な堆積層である。1層目は地味土SK100並に上層部の堆積土に類似。	なし
SK24	I10	方形・ 陥形	168	130	54	N-63°-W	P1176と重複し、本跡が新しい。層土は4層に分類され、ロームブロックを少量含む。土師器片の人為的な堆積。地下式土坑の土師器片の跡に類似する。	なし
SK25	I9	ほぼ円形・	112	96	17	N-62°-W	層土は黒褐色土の単層で、ロームブロックを少量含む。	土師器片7、銅器片1
SK26	I8	ほぼ円形・	97	87	14	N-66°-W	層土は黒褐色土の単層で、ロームブロックを少量含む。	なし
SK27	I18・I8	ほぼ円形・	112	105	36	N-53°-E	層土は黒褐色土の単層で、ロームブロックを少量含む。人為的な堆積。風倒木痕跡10上を掘り込む。	なし
SK28	H8	ほぼ円形・	82	80	35	N-64°-W	層土は黒褐色土の単層。風倒木痕跡10の一部を掘り込む。	土師器片1
SK29	H7	円形・	(126)	(10)	34	N-69°-W	SK31と重複。新石器期は把握できず。層土は黒褐色土の単層。	土師器片3、土師器片4
SK30	I9	ほぼ円形・	84	74	13	N-60°-E	層土は黒褐色土の単層で、ロームブロックを少量含む。	なし
SK31	H7	楕円形・ 皿状	121	87	73	N-80°-W	SK29と重複。新石器期は把握できず。ピット状の掘り込み。層土は単層。	なし
SK32	I9	楕円形・ 皿状	166	30	21	N-72°-W	層土は黒褐色土の単層でロームブロックを少量含む。	なし

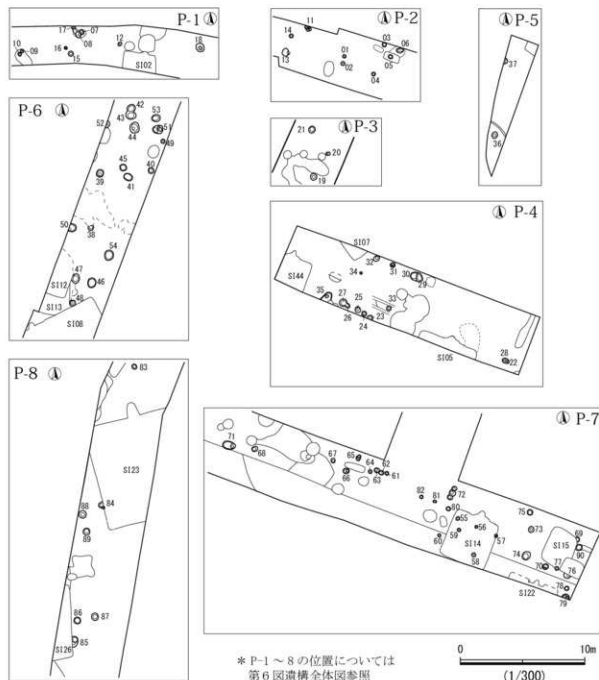
第32表 SK15 遺物観察表

調査番号	種類 説明	口縁部 高さ 底径	部位・残存率・調査技法等	胎土	色調 (外壁/内壁)	焼成	出土位置
1	土師器 片	口縁部 高さ 底径 13.4 9.0	口縁部片、内外面は鏡子で内面にはツバムに備付着。外面にはワザムにヘラ状工具のあたり痕あり。	黄白、石英、長石	10R5/3.10-10R6 7.0R5/3.10-10R6	酸化表 良好	SK13 層土
2	銅器 高台片群	13.1 4.4 8.0	口縁部～底部、80%存。コロボ形。底部は同軸ヘラクスリ、高台部を彫り付け残す。	石英多量、白鉄 と少量	7.0R5/1R 7.0R4/1R	還元表 普通	SK15 層土

## 第6節 ピット (第59～63図、第33・34表、写真図版20)

検出したピットの数は90基である。各ピットの詳細については第33表にまとめた。これらは覆土の状態や規模から2種類に大別できる。

ひとつは径が40～80cmと比較的大型のピットで、覆土が暗褐色土・褐色土を主体とするものである。2区のPit20や4区のPit25、6区のPit39～41・44・48、8区のPit84・85など柱痕が認められるピットもある。配置状況をみると、比較的集中する地点が認められる。2区・Pit19～21の場合は、SB01周辺に散在



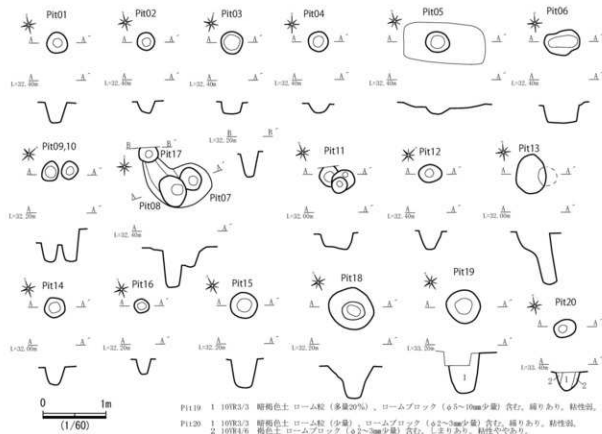
\* P-1～8の位置については  
第6図遺構全体図参照

第59図 Pit配置図

するが、関連性は捉えられない。6区北側のE10・11グリッドではPit39～45・49・51～53が集中して検出されている。Pit44・51・52は底面に硬質面が認められ柱筋上に並ぶようである。周辺のピットと合わせて掘立柱建物跡になる可能性もあるが、これ以外に柱筋の通る柱穴列は認められず、規模等もばらつきがあった。その内、Pit39～41・47・48・51では覆土中に砂質土が混入していた。4区及び7区東端ではPit22～35・70・73～79・90がI10・J10～12グリッドでややまとまって検出されている。ここでもやはり規則性は見出せないものの、これらはピットの掘り込みから柱穴の可能性は高いと思われる。

もうひとつは径が30cm前後の小規模なピットで、覆土が黒色土又は黒褐色土を主体とするものである。主に1区の中央部及び7区東側で検出されている。1区では、A18グリッド地点を中心に、9基が散在しているが規則性はうかがえない。その内Pit06・07・10・12・15～17は、黒色土・黒褐色土を主体としてロームブロックを比較的多く含み、しまりも弱い覆土で、新しい時期の構築と考えられる。7区では、I9グリッドにSI14の覆土を切り込むPit55～60があり、いずれも黒色土を呈したピットである。1区のピットはまばらであったが、Pit55～57・80～82とは直線上に並ぶことから櫛列の可能性もある。ただ、列の軸が現在使用されている農道とほぼ直交していることから、この種類のピットは新しい時期の可能性もある。

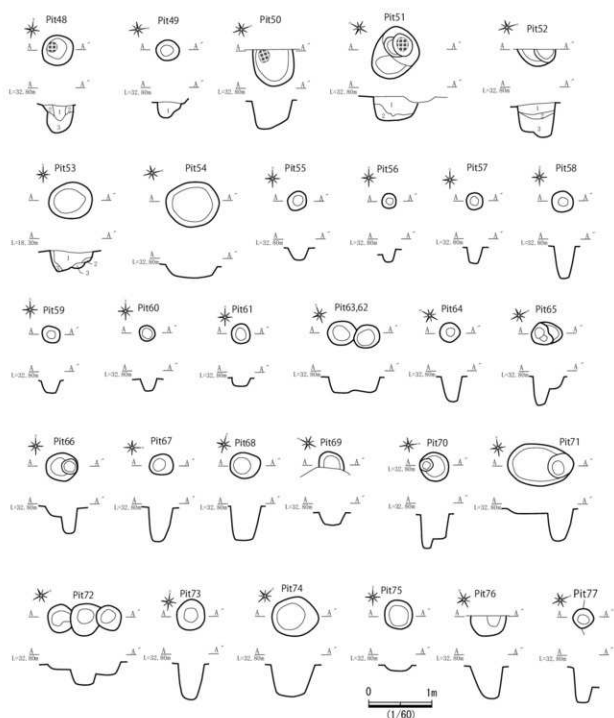
遺物が出土したのは27基で、全体の出土量は96点・1,246gである。その内、土師器は71点、須恵器は23点で、須恵器のみまたは須恵器を伴うピットは10基である。いずれも小破片であるが、全てが大型の属するピットから出土しており、遺物から推定される時期は古墳時代から奈良・平安時代の住居跡とともに構築されたと考えられる。Pit36からは中世以降の遺物が混入しているが、二次的混入と思われる。(高野)



第60図 Pit遺構実測図(1)

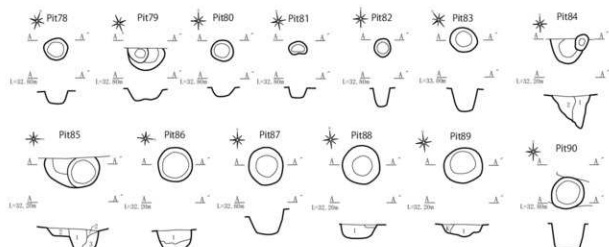




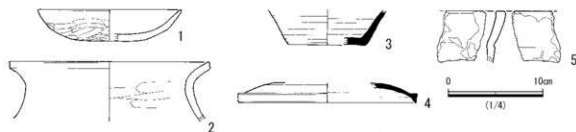


- |   |  |
|---|--|
| <p>Pit48 1 10R4/2 灰黄褐色土 砂質土混入、ロームブロック（φ2~5mm程度）含む。<br/>         2 10R4/3 に5A-黄褐色土、ロームブロック（φ2~5mm少量）含む。<br/>         3 10R3/3 暗褐色土 ローム土塊（少量）、ロームブロック（φ2~5mm程度）含む。</p> <p>Pit49 1 10R3/3 暗褐色土 羅りあり、粘性弱。<br/>         2 10R4/2 灰黄褐色土 砂質土混入、ローム土塊（少量）、ロームブロック（φ2~5mm程度）含む。<br/>         3 10R3/3 暗褐色土 ローム土塊（少量）、ロームブロック（φ2~5mm程度）含む。羅りあり、粘性弱。</p> | <p>Pit50 1 10R3/2 灰褐色土 ロームブロック（φ5~10mm中量）含む。<br/>         2 10R3/2 灰黄褐色土、砂質土混入、粘性弱。<br/>         3 10R4/3 に5A-黄褐色土、ローム土塊（少量）含む。</p> <p>Pit51 1 10R3/4 暗褐色土 ローム土塊（少量）、ロームブロック（φ2~5mm程度）含む。羅りあり、粘性弱。<br/>         2 10R3/3 暗褐色土 ローム土塊（少量）、ロームブロック（φ5~10mm程度）含む。羅りあり、粘性弱。</p> <p>Pit52 1 10R4/6 暗褐色土 ローム土塊（中量）含む。羅りあり、粘性ややあり。</p> |
|---|--|

第 62 図 Pit 遺構実測図 (3)



- Pit84 1 7.53R/3 暗褐色土 ロームブロック (φ2~3mm多量20%, φ5~20mm少量) 含む, 縞りあり, 粘性弱。  
 2 7.53R/3 褐色土 ローム粒 (多量10%), ロームブロック (φ2~10mm少量) 含む, 縞りあり, 粘性弱。
- Pit85 1 7.53R/3 暗褐色土 ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む, 縞りあり, 粘性弱。  
 2 7.53R/4 暗褐色土 ロームブロック (φ5~10mm少量) 含む, 縞りあり, 粘性弱。  
 3 7.53R/4 褐色土 ロームブロック (φ5~10mm少量) 含む, 縞りあり, 粘性弱。
- Pit86 1 7.53R/4 暗褐色土 ロームブロック (φ2~3mm少量, φ5~10mm中量) 含む, 縞りあり, 粘性弱。  
 2 7.53R/3 褐色土 ローム粒 (少量), ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む, 縞りあり, 粘性弱。
- Pit88 1 7.53R/3 暗褐色土 ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む, 縞りあり, 粘性弱。
- Pit89 1 7.53R/3 暗褐色土 ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む, 縞りあり, 粘性弱。
- Pit90 1 7.53R/3 暗褐色土 ロームブロック (φ2~3mm少量) 含む, 縞りあり, 粘性弱。



第63図 Pit 遺構実測図 (4) 及び遺物実測図

第33表 Pit 一覧表

遺構	位置 (グリッド)	形状	規模 (cm)			層土・状態等	出土遺物
			長	幅	深さ		
Pit01	A22	11x17円形	24	12	36	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒少量含む。	なし。
Pit02	A21~22	円形	28	27	30	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒少量含む, ローム小ブロック少量含む。	なし。
Pit03	A22	円形	35	35	18	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒少量含む。	なし。
Pit04	B22	円形	37	32	17	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒少量含む。	なし。
Pit05	A22	11x17円形	35	30	18	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒多量, ローム小ブロック少量含む。	なし。
Pit06	A22	横円形	56	35	28	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒少量, ローム小ブロック少量含む。	なし。
Pit07	A18	11x17円形	36	30	34	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒少量, ローム小ブロック少量含む。	なし。
Pit08	A18	横円形	52	39	65	単層・褐色土 (7.53R/4) ローム粒少量, ローム大ブロック少量含む。	なし。
Pit09	A17	11x17円形	30	25	53	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒中量, ローム小ブロック少量含む。	なし。
Pit10	A17	11x17円形	31	25	53	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒少量, ローム小ブロック多量含む, 土質が強い。	なし。
Pit11	A18	六角形	55	25	27	単層・暗褐色土 (7.53R/4) ローム粒少量, ローム小ブロック少量含む, 本層の可能性あり。	なし。
Pit12	A18	横円形	35	24	31	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム大ブロック多量含む, 土質が強い。	なし。
Pit13	A21	横円形	61	51	83	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム小ブロック少量含む, 本層の可能性あり。	なし。
Pit14	A21	11x17円形	33	31	33	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒多量含む。	なし。
Pit15	A18	円形	43	41	47	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒多量, ローム大ブロック少量含む, 土質が強い。	なし。
Pit16	A18	円形	24	21	24	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒多量, ローム大ブロック少量含む, 土質が強い。	なし。
Pit17	A18	11x17円形	29	26	36	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒多量, ローム大ブロック少量含む, 土質が強い。	なし。
Pit18	A19	11x17円形	73	63	52	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒多量, ローム小ブロック少量含む。	なし。
Pit19	E17	11x17円形	54	52	80	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒多量, ローム小ブロック少量含む。	なし。
Pit20	E17	横円形	34	29	29	2層 (第0100層部), 程度小。	なし。
Pit21	E17	11x17円形	55	52	66	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒多量, ローム小ブロック少量含む。	土師器環1, 銅器器環1
Pit22	J12	横円形	25	21	32	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム小ブロック少量含む。	なし。
Pit23	I11	11x17円形	47	37	27	4層 (第1100層部)。	土師器環1, 銅器器環1
Pit24	J11	横円形	42	36	8	2層 (第1100層部)。	土師器環1
Pit25	J11	横円形	40	43	31	3層 (第1100層部), 程度小。	なし。
Pit26	J11	円形	150	33	28	2層 (第1100層部), Pit25と連続。	なし。
Pit27	J11	円形	42	59	35	3層 (第1100層部), Pit26と連続。	土師器片環6
Pit28	I12	円形	31	31	47	単層・褐色土 (7.53R/4) ローム粒少量, ローム小ブロック少量含む。	なし。
Pit29	J12	横円形	79	51	32	単層 (第1100層部), Pit28と連続。	土師器環7
Pit30	J12	横円形	49	49	30	2層 (第1100層部), Pit29と連続。	土師器環2, 銅器器環1
Pit31	J11	横円形	49	38	19	単層・暗褐色土 (7.53R/3) ローム粒少量, ローム小ブロック少量含む。	土師器環2

遺構	位置 (クワット)	形状	規模(m)			覆土・状態等	出土遺物
			長径	短径	深さ		
Pr32	11	構内扉	47	39	35	単層・埴輪土・0.9Vx3.41ローム小フロック少量含む。	土師器27、漆器1
Pr33	11	土師器	40	36	26	単層・埴輪土・0.9Vx3.31ローム中量、ロームへ大フロック少量含む。	なし
Pr34	11	土師器	20	18	13	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。	なし
Pr35	11	門扉	30	29	28	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量、ローム大フロック少量含む。	なし
Pr36	11	門扉	53	45	35	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量、ロームへ大フロック少量含む。	土師器11・漆土、磁器器器、内服1
Pr37	C11	門扉	43	(26)	24	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量、ローム小フロック少量含む。西側調査区外。	土師器11・漆土、磁器器器1
Pr38	F10	土師器	47	43	32	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。	なし
Pr39	F10	構内扉	62	54	47	3層(第6100層部)、柱根跡、底面に硬質部分あり。	なし
Pr40	F11	土師器	48	46	24	3層(第6100層部)。	なし
Pr41	F10	構内扉	70	56	59	4層(第6100層部)。	なし
Pr42	F10	門扉	68	(63)	30	4層(第6100層部)、P9432直横。	なし
Pr43	F10	門扉	85	(58)	41	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。P942と直横。	なし
Pr44	F10	構内扉	89	73	47	3層(第6100層部)、柱根跡、底面に硬質部分あり。	土師器27・漆土、銅器器器1
Pr45	F10	門扉	57	54	40	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。	なし
Pr46	F10	土師器	78	65	50	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ロームへ大フロック少量含む。底面に硬質部分あり。	土師器器器1
Pr47	F10	構内扉	79	59	49	3層(第6100層部)、柱根跡。	磁器器器1
Pr48	F-G10	土師器	52	48	47	3層(第6200層部)、柱根跡、底面に硬質部分あり。	なし
Pr49	F11	構内扉	39	33	33	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム・ローム小フロック少量含む。	土師器器器5
Pr50	F10	(構内扉)	49	(49)	45	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ロームへ大フロック少量含む。底面に硬質部分あり。西側調査区	なし
Pr51	F10	土師器	85	63	33	2層(第6200層部)、右段、底面に硬質部分あり。	土師器器器2・漆土
Pr52	F10	(門扉)	66	(26)	37	上部名5K11に即対応。3層(第6200層部)、砂質土あり。上部名5K11のみをとり、右段、底面に硬質部分あり。西側調査区外。	なし
Pr53	F11	構内扉	70	56	35	3層(第6200層部)。	土師器器器2
Pr54	F10	門扉	68	71	30	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ロームへ大フロック少量含む。	なし
Pr55	F10	門扉	34	26	20	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。S114層と直横。	なし
Pr56	F10	門扉	24	22	22	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。S114層と直横。	なし
Pr57	F10	門扉	27	26	26	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。S114層と直横。	なし
Pr58	F10	門扉	35	34	32	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。S114層と直横。	なし
Pr59	F10	門扉	29	25	23	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。S114層と直横。	なし
Pr60	F10	土師器	25	23	23	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。	なし
Pr61	F10	門扉	30	29	14	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。	土師器器器4
Pr62	F10	門扉	41	36	25	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。P9432直横。	なし
Pr63	F10	門扉	42	40	25	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。P942と直横。	なし
Pr64	F10	門扉	31	30	41	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。	土師器器器1
Pr65	F10	門扉	30	35	47	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。	なし
Pr66	H-39	構内扉	50	43	44	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ロームへ大フロック少量含む。	土師器器器1
Pr67	H	門扉	37	32	57	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ロームへ大フロック少量含む。	土師器器器1、磁器器器器1
Pr68	H-39	門扉	47	39	55	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ロームへ大フロック少量含む。	土師器器器3
Pr69	F10	門扉	47	39	55	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。S114に即対応。	なし
Pr70	F10	土師器	42	(31)	27	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ロームへ大フロック少量含む。	なし
Pr71	H	門扉	47	45	60	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。上部名5K11と直横。	土師器器器1
Pr72	F10	土師器	65	(42)	53	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ロームへ大フロック少量含む。上部名5K11と直横。	土師器器器1
Pr73	F10	門扉	49	43	57	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ローム小フロック少量含む。	なし
Pr74	F10	門扉	75	62	51	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ロームへ大フロック少量含む。	なし
Pr75	F10	門扉	47	42	9	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ローム小フロック少量含む。	なし
Pr76	F10	(門扉)	53	(33)	51	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。S114に即対応。	なし
Pr77	F10	土師器	33	30	57	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ローム小フロック少量含む。	なし
Pr78	F10	門扉	36	35	19	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ローム小フロック少量含む。	なし
Pr79	F10	門扉	58	(35)	41	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ローム小フロック少量含む。東側調査区外。	なし
Pr80	F10	土師器	35	32	14	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ローム小フロック少量含む。	なし
Pr81	F10	土師器	29	20	16	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ローム小フロック少量含む。	なし
Pr82	F10	門扉	30	36	30	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ローム少量含む。ローム小フロック少量含む。	なし
Pr83	H2	門扉	41	36	37	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ロームへ大フロック少量含む。	なし
Pr84	C2	土師器	58	(40)	29	2層(第6300層部)、柱根跡、底面に硬質部分あり。	なし
Pr85	D1	門扉	88	(17)	42	3層(第6300層部)、柱根跡、底面に硬質部分あり。	磁器器器器4・漆土
Pr86	D1	門扉	55	54	40	2層(第6300層部)、柱根跡。	土師器器器2
Pr87	D2	門扉	61	53	42	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ロームへ大フロック少量含む。	土師器器器2、磁器器器器1
Pr88	C1	門扉	60	58	24	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ロームへ大フロック少量含む。	土師器器器1・漆土
Pr89	C1	土師器	55	52	23	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ロームへ大フロック少量含む。	なし
Pr90	F10	門扉	55	50	59	単層・埴輪土・0.9Vx3.21ロームへ大フロック少量含む。S114に即対応。	なし

第34表 Pit 遺物観察表

調査番号	種類 説明	白磁器 器高 器径	部位・残存率・調整技術等	胎土	色調 (外/内/底)	焼成	出土位置
1	土師器 杯	15.9 3.4	白磁器一底面。90%存。白磁器へ外面は横ナゲ後、体部下端へ底面を へタケズリ。内面は白磁器一底面に5に付てナゲ。	雲母、白磁土	10YR5/20K黄緑 7.5YR5/20K黄	酸化赤 普通	P151 層土
2	土師器 環	(21.0) 6.3	白磁器一側面片。白磁器は内外面横ナゲ。側面の外面は横ナゲ。内面はへラナ ゲ。	雲母、石英、長 石	7.5YR5/42.5L黄 7.5YR6/6K黄	酸化赤 良好	P149 層土
3	磁器器 杯	(1.8) (8.0)	体部一底面片。ロウ整形。底面外面はへラナゲナ。	雲母、石英	5B6/10K 5B6/10K	還元赤 良好	P137 層土
4	磁器器 蓋	(18.0) (2.1)	天井部へ白磁器片。ロウ整形。天井部の外面は回転へタケズリ。白磁器は 底出し、横ナゲ。	雲母、石英	2.5YR5/20K黄 2.5Y7/30K黄	還元赤 普通	P147 層土
5	土師器土器 内瓦土器ナ	(5.4)	白磁器片。白磁器は内外面横ナゲ。外面全体に底付着。	雲母、針状物	10YR2/10 10YR6/20.5L黄緑	酸化赤 普通	P138 層土

## 第7節 溝 (第64・65図、第35表、写真図版8)

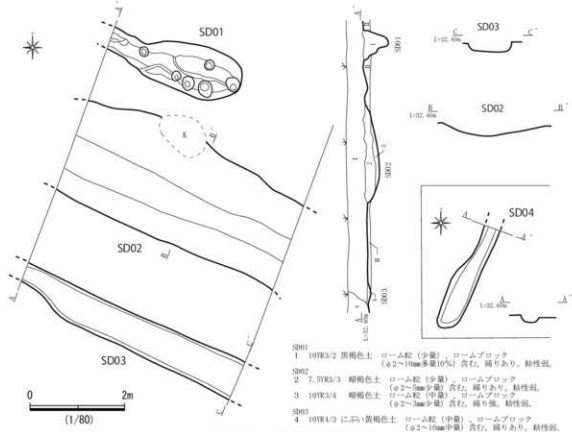
溝は3区で3条、4区で1条、8区で4条が検出された。各溝路の詳細については第35表にまとめた。これをもとに概観する。

3区で検出されたSD01～03は、調査区の中央部から南側にほぼ同じ方向で並走する。その内、最も幅の広いSD02は、覆土が2層に分層され、2層目は固く締まった暗褐色土であった。この硬質層が底面全体に認められることから、道として機能していた可能性がある。いずれの溝路もⅡ層を切り込んでいることから新しい時期の遺構と考えられる。

4区のSD04は、調査区の東端に堅穴状に落ち込む際で検出されている。覆土は落ち込みとほぼ一体化しており、溝として明瞭な掘り込みではない。

8区では4条の溝が検出され、その内、SD05は北側が二股になり南側で一体化している。同様の溝が重複している可能性があるが、確認面や土層から新旧関係は把握できなかったため1条の溝路とした。SD06・07は大部分が西側にかかるため規模等の詳細は把握できなかったが、ともに屈曲して途切れている。SD05～07のいずれも、覆土はロームブロックを含んだ黒褐色土の単層で締まりが強く、Ⅱ層を切り込んでいることから新しい時期の溝と考えられる。SD08は西傾から東傾に屈曲する溝で、深さは68 cmを有している。底面から中位程は箱状の掘り込みでほぼ直立して立ち上がり、上部は外傾して広がる。覆土は8層に分層され、上層部分は自然堆積、下層部分はロームブロックを多量に含んだ層が主体で人為的な堆積とみられる。形状から区画溝として利用された可能性が高い。

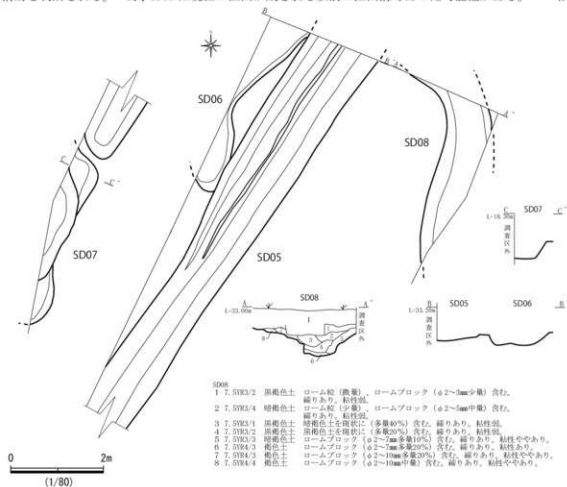
遺物はSD02・04・05・06・08から25点・270gが出土した。摩耗した土師器、須恵器の小破片を主体とし



第64図 溝遺構実測図(1)

ていることから、二次的に混入したと考えられる。

SD01～07は現在使用されている道路と並走していることや、II層を切り込んでいることから新しい時期の溝跡と判断される。一方、SD08は現在の区画が成される以前の区画溝であった可能性がある。(高野)



第 65 図 溝遺構実測図 (2)

第 35 表 溝一覽表

遺構名	位置 (グリッド)	規模 (cm) 上端幅 底端幅 深さ	長軸方向	特徴-その他	出土遺物
SD01	P12-13	111 64 86	N-70°-W	北西側の調査区外に延びる。断面はV字状に深い。掘り込みは出入口が着して南東端部が断らんで途切れる。覆土は早層でロームブロックを多量に含む人為的な堆積を呈す。目録を切り込んでいることから新しい時期の遺跡と考えられる。	なし
SD02	P12-13	238 75 27	N-64°-W	北西側及び南東側の調査区外に延びる。断面は高いU字状。覆土は2層に分層。2層目は厚く硬く締まった暗褐色土。目録を切り込み新しい時期の遺跡と考えられる。硬質層は底面全体に認められ、道として機能していた可能性がある。	土師器片1, 硬土器片1
SD03	Q12-13	90 71 9	N-64°-W	北西側及び南東側の調査区外に延びる。断面は浅いU字状。覆土は早層でロームブロックを含んだ層。目録を切り込み新しい時期の遺跡と考えられる。	なし
SD04	J12-13	67 43 20	N-24°-W	北東側の調査区外に延びる。断面は浅いU字状である。覆土は早層で目録を切り込んでいることから新しい時期の遺跡と考えられる。	土師器片8, 硬土器片4
SD05	A2-R2	156 97 28	N-13°-E	北東側及び南西側の調査区外に延びる。断面は浅いU字状で北面が一帯になり、同様の溝跡が重複している可能性があるが、確認面と土層から新旧関係は把握できず1本の遺跡とした。覆土は早層で目録を切り込み新しい時期の遺跡と考えられる。	土師器片2, 陶磁器片1
SD06	A2	— — 12	N-48°-E ~ N-3°-E	南側で向きを変え途切れる。断面は浅いU字状。北西側の大部分が調査区外に延びるため規模を把握できず。覆土は早層で目録を切り込み新しい時期の遺跡と考えられる。	土師器片5, 内耳土器1
SD07	R2	— — 34	N-26°-E ~ N-4°-E	南側で向きを変え途切れる。断面は浅いU字状であるが断面が崩壊。西側の大部分が調査区外に延びるため規模を把握できず。覆土は早層で目録を切り込み新しい時期の遺跡と考えられる。	なし
SD08	A2-3	— — 66	N-15°-W ~ N-19°-E	南側で向きを変え北西側と南側へ延びる。断面は底面から中位層が露出。土層は外層して立ち上がり、東側の大部分が調査区外に延びるため規模を把握できず。覆土は早層に分層され、いずれの層もロームブロックを多く含む人為的な堆積である。	土師器片2









遺構	出土位置	土器類				陶器類				土製品				その他				中世土器	時期不明			
		環-鉢		甕-甕蓋		環	釜	甕-甕-瓶類		手捏-ヒヤリ	支脚	朝鮮系-土器		石製品	鏡類品	鏡冚	内瓦土器	陶器-土器				
		遺数	重量	遺数	重量			遺数	重量			遺数	重量						遺数	重量	遺数	重量
SK15				7	120	4	40															
SK16				12	230	2	30															
SK17				2	60																	
SK18				1	20																	
SK19				3	40	2	30															
SK20		1	10	2	30																	
SK21				5	40	2	30															
SK25				7	30	1	10															
SK26		1	10																			
SK29		3	30	4	50																	
順観遺物				1	45	1	120											1	46			
小計		5	30	49	701	14	330	0	0	1	172	0	0	1	33	0	0	0	1	46		
Pt21		1	10			1	30															
Pt23				1	10	1	10															
Pt24				1	10																	
Pt27		2	20	6	50																	
Pt29				7	90																	
Pt30				2	50	1	10															
Pt31				2	30																	
Pt32		2	30													1	20					
Pt36		1	10	2	20	3	20															
Pt37		1	20	7	105																	
Pt44		2	10	6	35					1	45											
Pt45				1	15																	
Pt49				4	50																	
Pt51		1	10	2	20																	
Pt53				2	10																	
Pt61				4	20																	
Pt64				1	10																	
Pt66				1	10																	
Pt67				1	10	1	10															
Pt68				3	40																	
Pt71				1	10																	
Pt72						1	10															
Pt85						4	10			5	25											
Pt86				1	20	2	10															
Pt87				2	20	1	5															
Pt88		1	5	1	5																	
順観遺物		1	121	1	71	1	38	1	18											1	33	
小計		12	241	59	711	16	153	1	18	6	70	0	0	0	0	0	0	0	1	15	1	33
SD02		1	20			1	30															
SD04				8	70	4	30															
SD06				2	20																1	5
SD06				5	45												1	15				
SD08				2	35																	
小計		1	20	17	170	5	60	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	15	1	5
SX01				1	40					1	40											
SX08																						
SX10		4	110	5	80																	
SX11		2	60	3	30																	
小計		7	230	2	110	0	0	0	0	1	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A189				10	80	1	10															
D119				11	110	1	5			1	10											
E169		1	10																			
F109		2	15	18	190	2	20	3	100													
H79		1	10	3	45	1	5															
H97				4	70																	
I97				6	50	6	50															
J119		1	15	3	20					1	5											
J127				5	35																	
小計		5	50	42	540	11	90	3	100	4	35	0	0	0	0	0	0	0	1	40	0	0
1区 表段		6	60	23	310	3	30			2	20											
2区 表段		3	20	1	10																	
4区 表段				2	10	2	30			1	50											
5区 表段				1	40	1	20															
6区 表段		1	10	14	165	3	20															
7区 表段		7	50	10	80					1	10											
7区 表段裏		1	85	7	90																	
7区 東カタン		3	30	16	190	2	100	1	10													
7区 表段西		8	70	14	190	2	15															
7区 西カタン				1	10	2	25														1	45
小計		31	315	89	1135	15	140	1	10	4	80	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	45
T-38				1	10					1	100											
T-41											1	20										
T-42				3	30																	
T-43						1	10															
T-45				1	40	1	20															
T-47				1	10																	
T-48		1	5																			
T-49						1	10															

遺構	出土位置	土器類			雑器類			土製品			その他			中世土器		跡目不明												
		環・形類	筒・壺	片類	蓋	葉・筒	手杖・T型	瓦	陶器・玉類	石製品	鉄器	鏡	内瓦土器	陶器・玉類	陶器・玉類	陶器・玉類												
T-50		1	5																									
T-52				4	20																							
T-53								2	20																			
T-54		3	180	9	50																							
T-57				1	20																							
T-59								2	20																			
T-63				4	20																							
T-67				1	10										1	30												
T-68				3	20																							
T-79		5	30	32	240																							
T-82				2	20																							
T-83				3	20																							
T-87				1	20																							
T-88		6	70	80	780	15	20		1	20				79	680													
T-94		1	10																									
T-93				1	10																							
T-100				3	40																							
T-101				2	20	1	20		1	30				1	30													
T-106				1	20																							
T-107				2	20				1	100																		
T-108				5	20									2	70													
T-109				2	10				1	10																		
T-112				5	20																							
T-113				1	10																							
T-115				2	10				1	10																		
T-116				3	20	1	20																					
T-117				2	30																							
T-121				3	10				1	20																		
T-122				1	10																							
T-124				5	20																							
T-126		6	30	2	20																							
T-127				2	40				1	10																		
T-129				1	10																							
T-130				2	10																							
T-133				2	10	1	10																					
T-134		2	20	1	20																							
T-135				5	60	1	10																					
埋藏遺物		3	58	1	51			4	42	1	20																	
小計		24	426	200	1981	22	170	4	42	14	386	0	0	0	82	720	0	0	1	30								
総合計		1863	39274	4878	110511	328	5184	861	2614	180	61851	24	1110	28	2228	3	381	3	1142	1	1	161	142	3562	0	130	5	128

## 第5章 総括

東成井東原遺跡の第2次調査では、道路建設部分という限られた範囲ではあったが、遺跡として周知された範囲のほぼ北側半分を網羅する形で調査を行うことができた。調査の結果、古墳時代、奈良・平安時代にかけての集落が展開し、その後中世まで土地の利用が及んでいることがわかった。ここでは、調査の成果で得られた竪穴住居跡を、規模と出土する土器の観点から比較して変遷をたどり、東成井地区における7世紀代集落の様相を模索してまとめたい。

検出された竪穴住居跡は、7～9世紀代にかけての26軒である。まず、規模の観点からみると、一辺が7mを超える大型住居跡、5m前後～6m前後の中規模住居跡、4m前半の規模よりも小さい小型住居跡の3つに区分できる。大型住居跡には、S108・16・19・20・23の5軒が相当し、配置状況は6～8区にのみ偏在して検出されている。主軸はN-11°-WからN-30°-W間に西傾している。貯蔵穴はほぼ認められないことや、掘り方は極端に深い掘り込みがない一方で、柱穴は大きな掘り方を持つなどの共通点がある。中規模住居跡には、S103・05・17・18・25・26の6軒が相当し、配置状況はそれぞれが近接することはなく、分散傾向にある。主軸はS105を除いてN-4°-E～N-3°-Wと南北軸近辺にままとまっている。主柱穴は明瞭に構築されているものの、貯蔵穴は認められず、掘り方は壁際に沿って極端に深い掘り込みを持っている。小型住居跡には、S101・02・09・10・12・14・22の7軒が相当し、配置状況はそれぞれの調査区に散在しているが、遺跡の東側にあたる1区・4区・7区東地点に多く認められ

る。そして主軸は東傾N-20°-EからN-30°-E、西傾はN-20°-W～N-30°-W前後にまとまる傾向にある。主柱穴や貯蔵穴は認められず、掘り方は主に住居の四隅を極端に深く構築されるようである。

次に遺物の観点からみると、土師器を主体とする住居跡と、土師器を主体としつつも須恵器が混在する住居跡の2つに大別することができる。土師器を主体とする住居跡には、SI01・08・09・16～20があげられ、前述した住居跡の規模に照らし合わせると、小型・中規模住居跡に該当するものもあるが、主体となるのは大型住居跡である。時間的には7世紀代に帰属すると考えられ、出土した遺物にはこの時期特有の形態を認めることができる。土師器環では、口縁部直下に段を持つ須恵器模倣丸底形態の環と、段を持たない無段有稜丸底形態環の2形態が混在する。胎土には雲母細粒が含まれ、漆塗りによる内外面黒色処理で仕上げられているものが主流で、内面に放射状のミガキを密に施しているものが多い。その中であって、土師器環に限ってみれば、7世紀中葉から後葉にかけてのわずかな時間幅の中ではあるが、大きさや形態、調整方法などが少しずつ変化している様相がうかがえる。例えば、SI09では法量や器面の調整が安定しているのに対し、SI08やSI23などでは法量にばらつきがあり、偏平化したものや小型のものが認められ、調整も雑になるなど不安定さが目立っている。また、SI09では須恵器模倣形態の段を持つ環が主流であるのに対し、SI23では無段有稜丸底形態の環が主流であることも変化のひとつといえるだろう。一方甕類では、雲母や長石を多量に含むこの地域特有の胎土は認められるものの、口縁部の形態はつまみ上げ技法や面取りなど、いわゆる常総甕の特徴があまりみられないことも本跡出土遺物の特徴である。大型住居跡から出土する遺物の中で注目されるのは、SI08・16・19から7世紀代の須恵器が含まれていることである。特にSI19ではこれらの須恵器とともに、非常に胎土が精良な土師器碗や、外面が丁寧に黒色処理された土師器壺、土師器短壺、土製紡錘車といった特異な遺物が目を引き、大型住居跡の性格を理解する上で注意が必要と考える。

須恵器が混在する住居跡には、SI02～05・10～14・25・26があげられる。住居跡の規模では小型住居跡と中規模住居跡が混在しているが、中規模の住居跡が数的には優位である。時間的には8世紀代から9世紀前葉まで幅広く認められるものの、主体となる時期は8世紀中葉以降と考えられる。それぞれの住居跡から出土する須恵器は量的に多くはないが、供膳具は土師器環から須恵器環に主体が移っているようである。そのほとんどは新治窯の所産と考えられるが、胎土に雲母が含まれているものともそうでないもの双方が認め

第38表 遺構変遷表

遺構名	平面規模		類型	主軸方向	主柱穴		貯蔵穴	推定時期		
	東西軸	南北軸			有・無	有・無		7C	8C	9C
SI09	3.43 × 3.12	小	N-18°-W	無	有					
SI19	8.90 × 8.64	大	N-11°-W	有	(無)					
SI20	7.36 × 7.16	大	N-24°-W	有	(無)					
SI16	(6.60) × 7.20	大	N-30°-W	有	有					
SI17	(5.12) × 5.58	中	N-24°-W	有	?					
SI01	4.33 × 4.20	小	N-31°-W	無	無					
SI24	(1.42) × (2.84)	?	N-34°-W	?	?					
SI10	(2.20) × 3.33	小	N-4°-E	無	?					
SI08	10.00 × 9.52	大	N-25°-W	有	(無)					
SI23	(5.88) × 8.36	大	N-17°-W	有	(無)					
SI18	5.18 × 5.08	中	N-4°-E	有	無					
SI02	2.68 × (1.43)	小	N-7°-E	無	無					
SI11	(2.00) × (4.36)	?	N-12°-E	(有)	?					
SI13	(2.30) × (2.50)	?	N-3°-E	?	?					
SI03	5.06 × (3.40)	中	N-0°	有	?					
SI12	(1.60) × 2.24	小	N-21°-E	無	無					
SI05	4.95 × (0.80)	中	N-21°-E	?	(無)					
SI14	3.81 × 3.92	小	N-23°-E	無	無					
SI25	(3.07) × 4.97	中	N-3°-W	有	(無)					
SI26	(1.60) × 5.60	中	N-3°-W	有	?					
SI04	(2.41) × (2.12)	?	N-22°-E	無	?					

られる。また、検出された部分がわずかであるため限定的ではあるが、出土した坏類には木葉下窯のみが認められる S126 や、湖西産の良好な資料も出土した S102・03 など存在する。そんな中であって、甕類は依然として土師器が用いられており、そのほとんどは常総甕の特徴を有している。

以上の成果から、第 38 表をもとに各住居跡の変遷をたどってみると、7 世紀代の住居跡は、土師器坏の変化に従えば、7 世紀初頭～前葉頃には坏の法量が安定している S109 が構築されたとみられる。その後 7 世紀中葉～後葉にかけて S119・20 といった大型住居が出現し、坏が扁平化して法量が不安定になる S108・16・23 の時期へ後続していったと考えられる。大型住居跡とともに周辺では S101・17 のような小・中型規模の住居跡も構築されるようである。そして 8 世紀代になると中規模住居跡と小型住居跡が混在しながら 9 世紀へと移り変わる様相がうかがえる。

今回の調査により、園部川左岸における東成井地区の 7 世紀～9 世紀前葉にかけての集落の様相を理解することができた。特に、古墳時代前期から 6 世紀初頭にかけての住居跡を検出している猫松遺跡、6 世紀後半と 7 世紀末から 9 世紀代の集落が営まれた東成井山ノ神遺跡が東西に展開しており、その空白期間であった 7 世紀代を埋めることができた意味は大きい。これにより古墳時代の集落は同域内で地点を変えながら継続していったことが把握された。そして、調査の中で特に注目されるのは大型住居跡の存在であろう。数的にはあまり目立たないものの、調査区に占める面積から本遺跡における存在感は非常に大きい。また、いずれも遺跡北西側の 6～8 区中に近接した偏在傾向にあることも意図的、計画的な背景を予想するに値するもので、共通の目的を持って居を構えた特定の集団が存在したと考えることができるだろう。 (高野)

#### 【引用・参考文献】

- 瀧美賢吾 2013「常陸における七世紀の土器」『博古研究』第 45 号 博古研究会
- 大久保隆史 2011『猫松遺跡 長原遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第 348 集 財団法人茨城県教育財団
- 曾根俊博・福山俊彰・秋山真好・佐藤 俊 2012『東成井山ノ神遺跡』石岡市埋蔵文化財調査報告書  
茨城県・石岡市教育委員会・株式会社ノガミ
- 高橋 透 2014『茨木遺跡 2 号住居出土の縮土師器について』『市内遺跡調査報告書・第 9 集』石岡市教育委員会
- 松本太郎 2013「第 2 章 土師器の伝播と民衆の移動」『東国の土器と官衙遺跡』六一書房

## 写真図版





1区全景 (西から)



4区全景 (北西から)



2区全景 (北から)



5区全景 (南西から)



3区全景 (南西から)



6区北側全景 (北から)



6区全景（南西から）



7区西側全景（南東から）



7区全景（南東から）



8区全景（南から）





S101 遺物出土状況 (南東から)



S101 完掘全景 (南から)



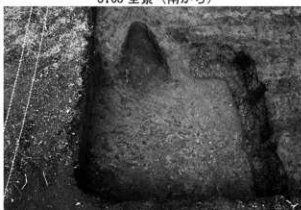
S101 全景 (南東から)



S103 全景 (南から)



S102 全景 (南から)



S104 全景 (南西から)



S103 遺物出土状況 (北から)



S105 全景 (南東から)



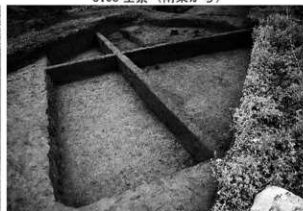
S106 遺物出土状況（北西から）



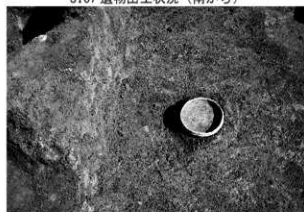
S108 全景（南東から）



S107 遺物出土状況（南から）



S108 土層断面（南から）



S108 遺物出土状況（西から）



S109・10 全景（南から）



S108 遺物出土状況（南西から）



S109 遺物出土状況（南から）



S109 遺物出土状況（北東から）



S115 全景（南西から）



S111 全景（南から）



S116 遺物・炭化材検出状況（東から）



S112・13 全景（南西から）



S116 遺物出土状況（北東から）



S114 全景（南西から）



S116 全景（南東から）



S117 全景 (南東から)



S119 全景 (南東から)



S118 全景 (南から)



S120 全景 (南東から)



S119 遺物・炭化材検出状況 (東から)



S121 炭化材検出状況 (南から)



S119 遺物出土状況 (北東から)



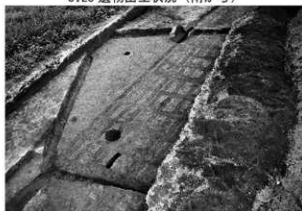
S122 カマド検出状況 (西から)



S123 遺物出土状況 (南から)



S125 遺物出土状況 (南から)



S123 全景 (南から)



S125 遺物出土状況 (南東から)



S123 土層断面 (南から)



S125 全景 (南から)



S124 全景・S125 北検出状況 (東から)



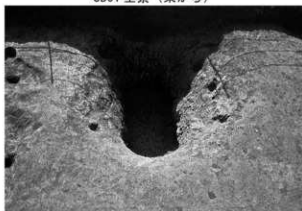
S126 全景 (南から)



SB01 全景 (東から)



SK16 全景 (北西から)



SK07 全景 (北から)



SK16 竖坑部分全景 (北西から)



SK13・14 全景 (南から)



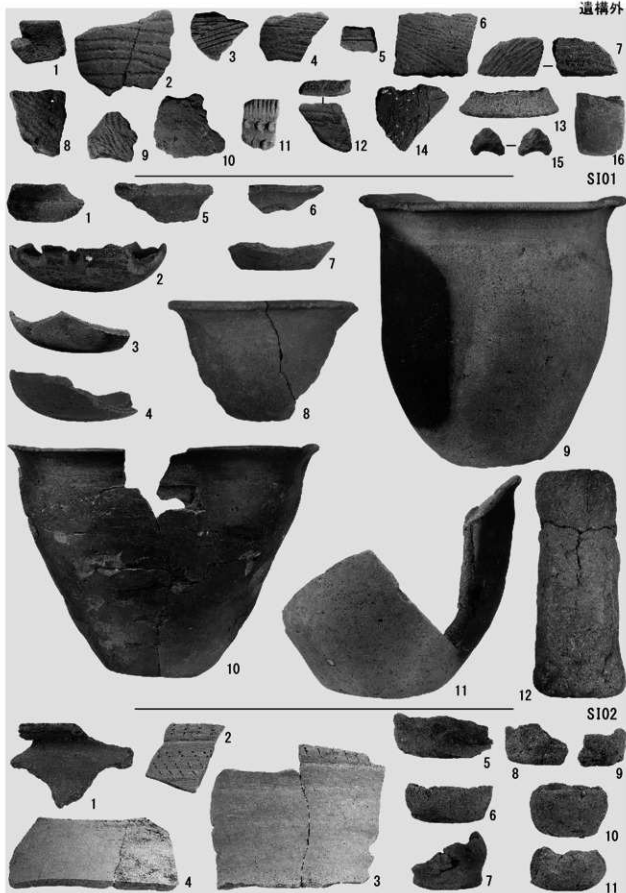
SD01～03 全景 (南東から)



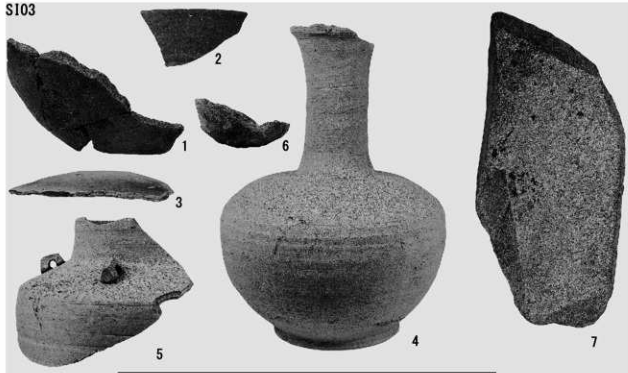
SK16 主室部分土層断面 (西から)



SD08 全景 (南から)



S103



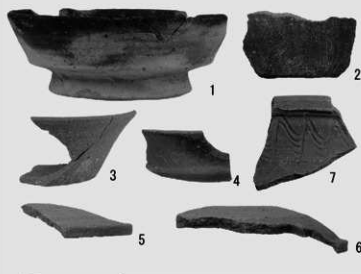
S104





S105

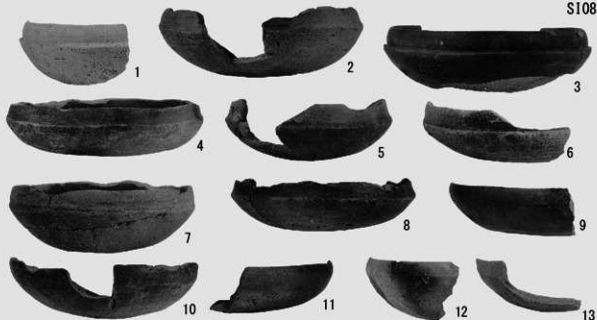
S106



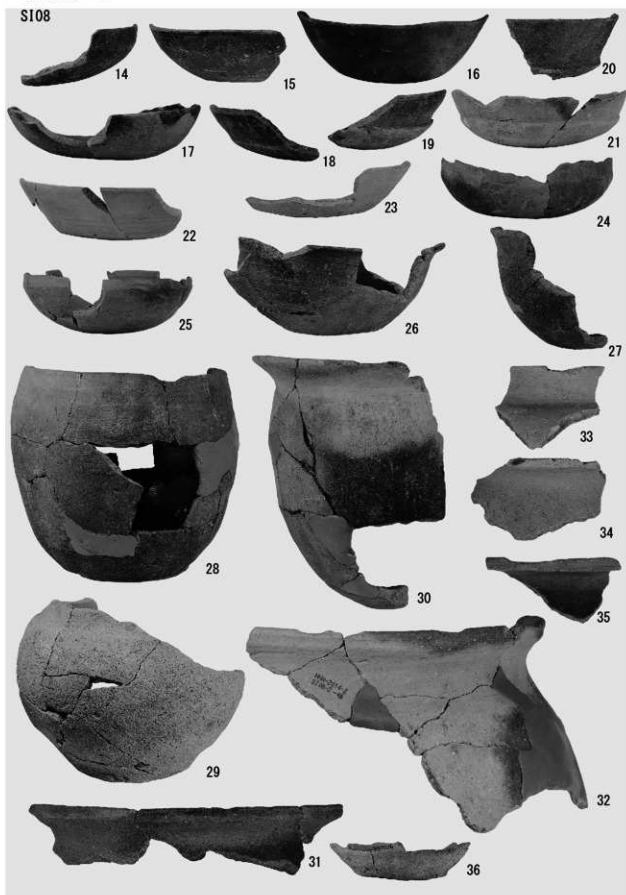
S107

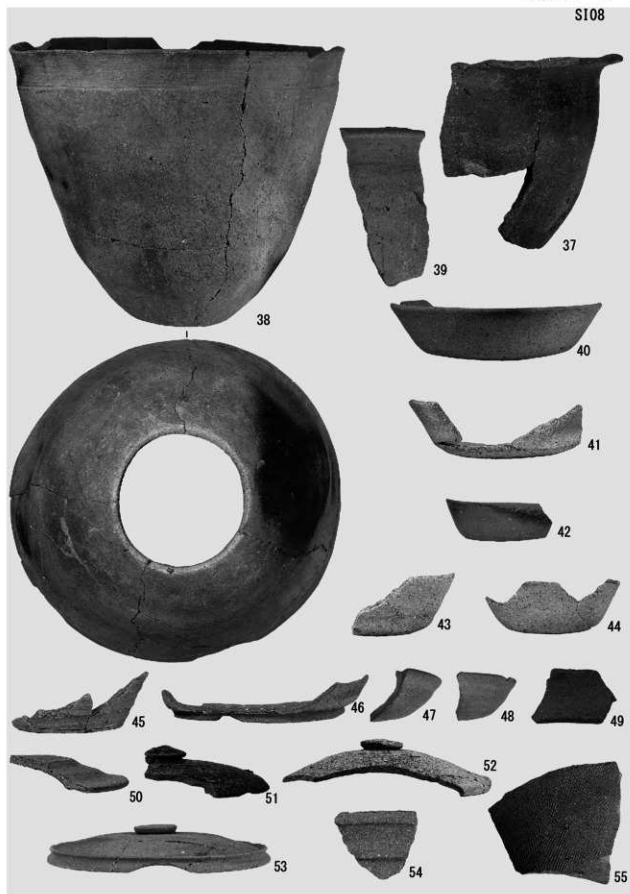


S108

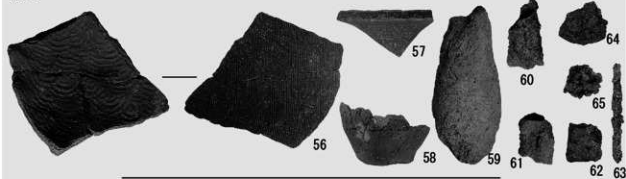


SI08

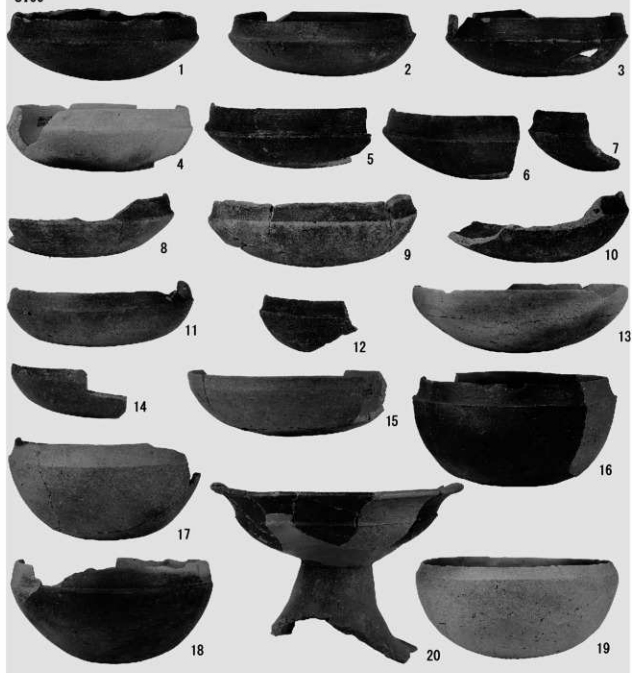




S108

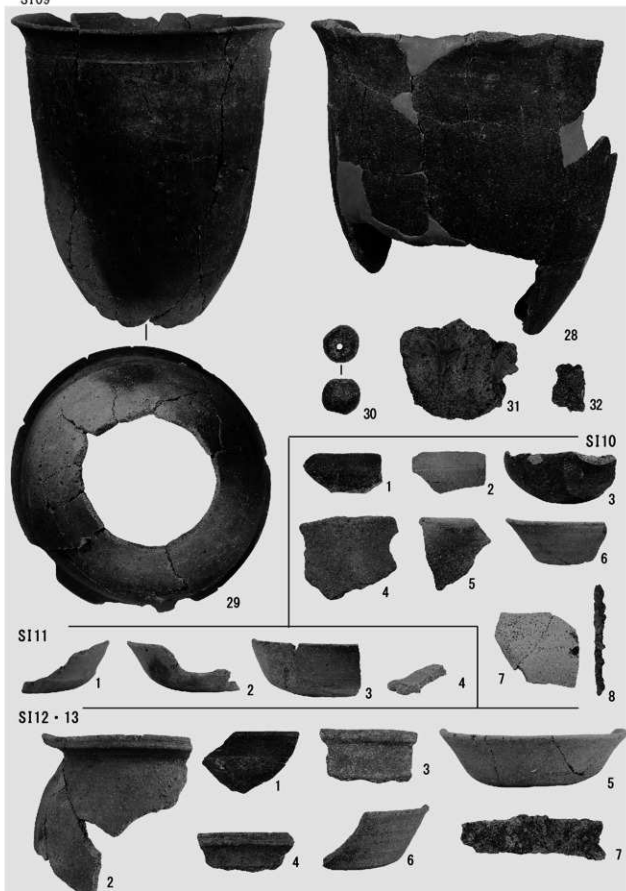


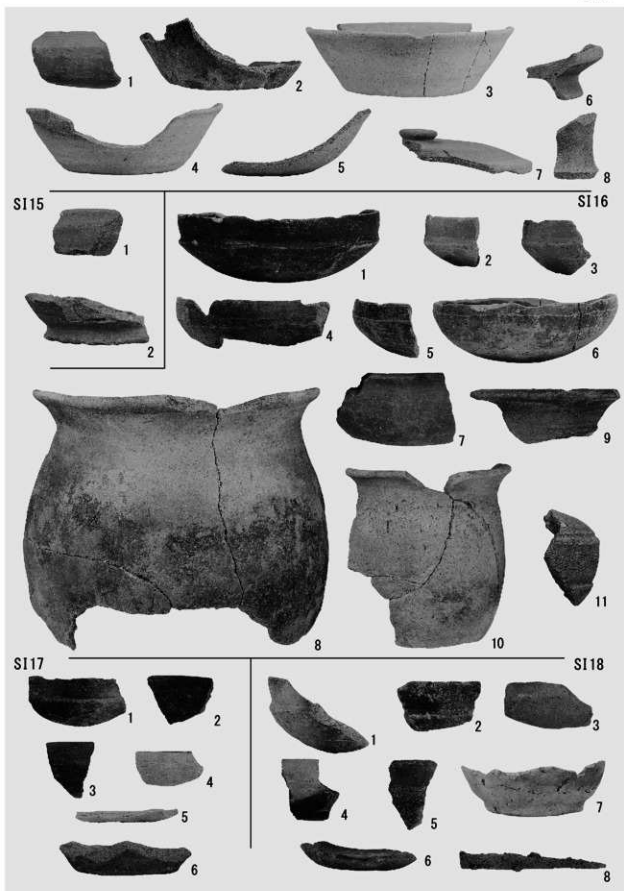
S109



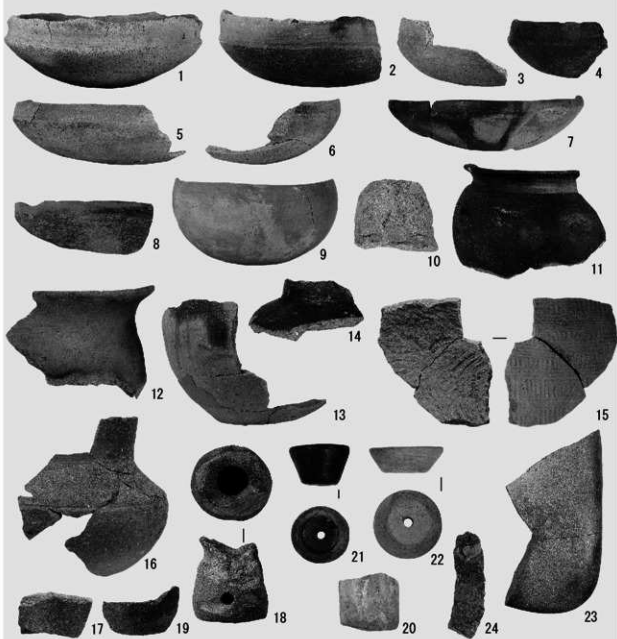


S109

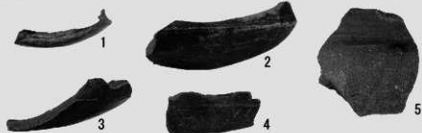




S119



S120



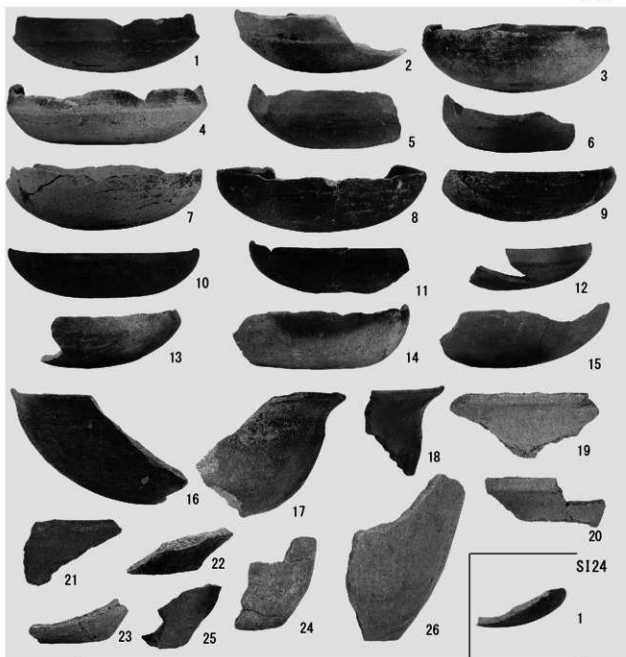
S121

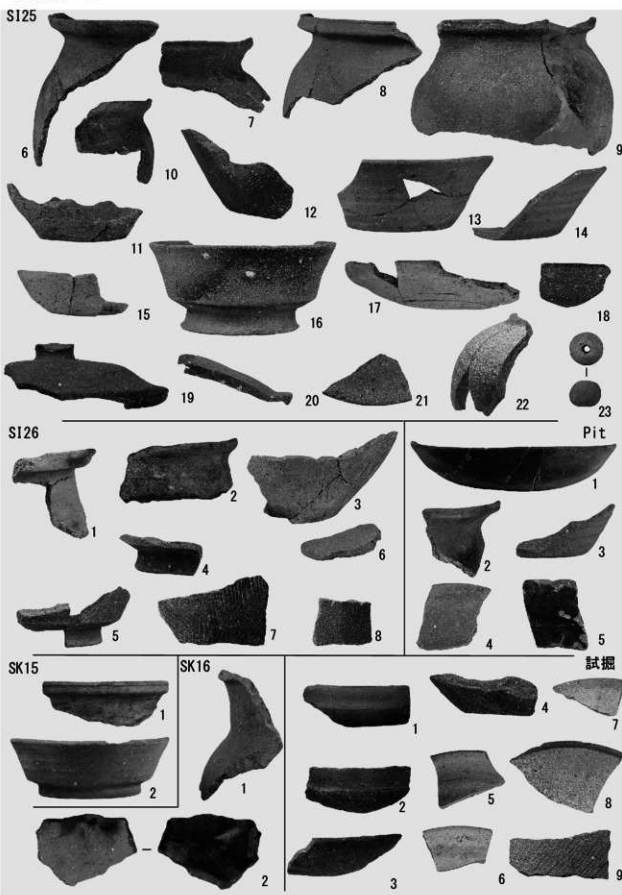


S122









## 報告書抄録

ふりがな	ひがしなるい ひがしはら いせき (だいにじ)								
書名	東成井東原遺跡 (第2次)								
副書名	H26県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査								
シリーズ名	石岡市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号									
編著者名	高野浩之 谷村俊雄								
編集機関	株式会社地域文化財研究所/〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9 電話：0476-42-7820								
発行機関	石岡市教育委員会								
発行年月日	2015(平成27)年3月10日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号						
東成井東原遺跡 (第2次)	茨城県石岡市東成井 1396-3 ほか	08463	140	36° 15' 31"	140° 16' 34"	2014.09.01 ～ 2014.10.29	1950㎡	畑地帯 総合整 備事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物				
東成井東原遺跡 (第2次)	集落跡	縄文時代  古墳時代 奈良・平安時代  中世 中・近世以降	陥穴状土坑  竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 ピット  地下式坑 土坑 ピット 溝	3基  26軒 1棟 21基 75基  1基 7基 15基 8条	縄文土器(深鉢)、石器(石鏃・磨製石斧)  土師器(坏・高台付坏・碗・鉢・甕・甌・短頸壺)、須恵器(坏・高台付坏・甕・蓋・長頸壺・短頸壺・甕・甌・壺類・瓶類)、土製品(手捏土器・ミチア土器・紡錘車・土玉・支脚)、石製品(紡錘車・砥石)、鉄製品(鉄斧・鉄鏃・鎌・動鐵先・釘)、鉄滓	土師質土器(内耳土鍋) 陶磁器			
要約	本遺跡第2次調査地点では、7世紀から9世紀前半を主体とした集落跡が検出された。特に、7世紀の竪穴住居跡では、一辺7m～10m規模の大型住居跡5軒が偏在して検出され、須恵器も共存している。奈良・平安時代では、湖西産の良好な長頸壺が出土した。								

### 石岡市埋蔵文化財調査報告書

## 東成井東原遺跡 (第2次)

—H26 県営畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査—

発行 2015(平成27)年3月10日  
 編集・発行 石岡市教育委員会  
 〒315-0195 茨城県石岡市柿岡 5680 番地1  
 ℡ 0299-43-1111  
 株式会社地域文化財研究所  
 〒270-1327 千葉県印西市大森 2596-9  
 ℡ 0476-42-7820  
 印刷・製本 能登印刷株式会社  
 〒920-0855 石川県金沢市武蔵町 7-10  
 ℡ 076-265-4040

